中津市文化財調査報告　第 121 集

三口遺跡１次・２次調査

市道相原上ノ原線及び農道鶴居 53 号線建設工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

2024

中津市教育委員会

三口遺跡１次・２次調査　市道相原上ノ原線及び農道鶴居53号線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2024　中津市教育委員会

三口遺跡１次・２次調査

市道相原上ノ原線及び農道鶴居53号線建設工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

序　文

本書には、市道建設に伴って平成５年度に調査された１次調査と農道建設に伴って同９年度に調査された２次調査の調査成果が掲載されております。最初の調査からは既に30年近い歳月が流れ、その間に三口遺跡については、様々な開発に伴って４度の発掘調査が行われるなど、遺跡を取り巻く環境も大きく変わっていきました。

１次調査においては、当時あまり類例のなかった９世紀から10世紀の遺物が多く出土し注目を集めたものの、諸般の事情により報告書がすぐに刊行されませんでした。結局、刊行までに長時間を要したことにつきましてお詫び申し上げます。

最後になりますが、本書が中津市の歴史を解明する一助となりますことを願うとともに、当時発掘調査にご協力を頂いた地元の方々をはじめ、関係した多くの皆様方に衷心より御礼を申し上げます。

令和６年３月31日

中津市教育委員会
教育長　古口　宣久

例　言

1　本書は平成５年度（1993）に市道新設工事に伴い発掘調査された三口遺跡１次調査、および平成９年度（1997）に農道拡幅工事に伴い発掘調査された三口遺跡２次調査の発掘調査報告書である。

2　１次調査では、大分県文化課の清水宗昭理蔵文化財第１係長、渋谷忠章理蔵文化財第２係長、玉永光洋理蔵文化財第２係主査、村上久和同主査、小林昭彦同主事（いずれも当時）から現地で指導を頂いた。

3　出土遺物の整理作業は、１次調査については水洗いから接合、一部の実測までは平成６年度に行い、残りの実測、トレースは令和５年度に行った。２次調査については、令和５年度に全ての整理作業を行った。

4　調査時の方位は磁北であったが、今回の報告書中では全て座標北に置き換えている。

5　出土遺物については、亀田修一氏（岡山理科大学教授）、小林昭彦氏（吉野ヶ里公園管理センター歴史専門員）、村上久和氏から貴重な助言を頂いた。また、若杦善満氏（福岡県苅田町教育委員会）には資料調査でお手を煩わした。記して各氏に感謝申し上げたい。

6　本書の執筆、編集は小柳和宏（中津市歴史博物館専門員）が行った。

目　次

第１章　はじめに …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 1
　第３節　調査体制 …… 1
第２章　遺跡の立地と環境 …… 3
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3
第３章　１次調査の成果 …… 8
　第１節　調査概要 …… 8
　第２節　遺構と遺物 …… 8
　　(1) 竪穴建物
　　SH1 …… 8
　　SH2 …… 9
　　SH3 …… 10
　　SH4 …… 11
　　SH5 …… 12
　　SH6 …… 17
　　SH7 …… 17
　　SH8 …… 20
　　(2) 掘立柱建物
　　SB1 …… 20
　　SB2 …… 22
　　SB3 …… 23
　　SB4 …… 23
　　SB5 …… 24
　　SB6 …… 24
　　SB7 …… 24
　　SB8 …… 26
　　SB9 …… 26
　　(3) 土坑
　　SK1 …… 28
　　SK2 …… 31
　　SK3 …… 32
　　SK4 …… 35
　　SK5 …… 36
　　SK6 …… 40
　　SK7 …… 40
　　SK8 …… 41
　　(4) 溝
　　SD1 …… 42
　　SD2 …… 43
　　SD3 …… 44
　　SD4 …… 44
　　(5) ピット出土遺物 …… 46
　　(6) 包含層出土遺物 …… 48
　　(7) その他の出土遺物 …… 52

第３節　小結 …… 55
第４章　２次調査の成果 …… 57
第１節　調査概要 …… 57
第２節　遺構と遺物 …… 57
(1) 竪穴建物
SH1 …… 57
SH2 …… 57
(2) 掘立柱建物
SB1 …… 59
(3) 溝
SD1 …… 60
(4) その他の出土遺物 …… 60
第３節　小結 …… 60
第５章　総括 …… 62
第１節　三口遺跡の歴史的位置づけ …… 62
第２節　下毛郡における飛鳥時代から平安時代中期の土器編年 …… 68
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　周辺の遺跡分布図 …… 4
第２図　調査区位置図 …… 5
第３図　遺跡詳細位置図 …… 6
第４図　三口遺跡１次調査遺構配置図 …… 7
第５図　基本層序 …… 8
第６図　１次SH1 …… 8
第７図　１次SH1出土遺物 …… 9
第８図　１次SH2 …… 9
第９図　１次SH2出土遺物 …… 9
第10図　１次SH3 …… 10
第11図　１次SH3出土遺物 …… 11
第12図　１次SH4出土遺物 …… 11
第13図　１次SH4 …… 12
第14図　１次SH5 …… 13
第15図　１次SH5出土遺物(1) …… 14
第16図　１次SH5出土遺物(2) …… 16
第17図　１次SH6 …… 17
第18図　１次SH6出土遺物 …… 18
第19図　１次SH7 …… 18
第20図　１次SH7出土遺物 …… 19
第21図　１次SH8 …… 20
第22図　１次SB1出土遺物 …… 20
第23図　１次SB1 …… 21
第24図　１次SB2 …… 22
第25図　１次SB3 …… 23
第26図　１次SB3出土遺物 …… 23
第27図　１次SB4 …… 24
第28図　１次SB5 …… 25
第29図　１次SB6 …… 25
第30図　１次SB7 …… 26
第31図　１次SB8 …… 27
第32図　１次SB9 …… 27
第33図　１次SK1 …… 28
第34図　１次SK1出土遺物(1) …… 29
第35図　１次SK1出土遺物(2) …… 30
第36図　１次SK2 …… 31
第37図　１次SK2出土遺物 …… 31
第38図　１次SK3 …… 32
第39図　１次SK3出土遺物(1) …… 33
第40図　１次SK3出土遺物(2) …… 34
第41図　１次SK4 …… 35
第42図　１次SK4出土遺物 …… 36
第43図　１次SK5 …… 36
第44図　１次SK5出土遺物(1) …… 38
第45図　１次SK5出土遺物(2) …… 39
第46図　１次SK6,SK7 …… 40
第47図　１次SK6出土遺物 …… 41
第48図　１次SK7出土遺物 …… 41
第49図　１次SK8 …… 41
第50図　１次SK8出土遺物 …… 41
第51図　１次SD1,SD2 …… 42
第52図　１次SD1出土遺物 …… 43

第53図　１次SD2出土遺物 …… 44
第54図　１次SD3,SD4 …… 45
第55図　１次SD3出土遺物 …… 46
第56図　１次ピット出土遺物 …… 47
第57図　１次包含層出土遺物(1) …… 49
第58図　１次包含層出土遺物(2) …… 50
第59図　１次包含層出土遺物(3) …… 51
第60図　１次包含層出土遺物(4) …… 52
第61図　１次調査その他の出土遺物(1) …… 53
第62図　１次調査その他の出土遺物(2) …… 54
第63図　１次調査区と６次調査区の位置関係 …… 56
第64図　三口遺跡２次調査遺構配置図 …… 57
第65図　２次SH1 …… 57
第66図　２次SH2 …… 58
第67図　２次SH2出土遺物 …… 58
第68図　２次SB1 …… 59
第69図　２次SD1 …… 60
第70図　２次SD1出土遺物 …… 61
第71図　２次調査その他の出土遺物 …… 61
第72図　三口遺跡土器編年表 …… 63
第73図　三口遺跡周辺の地目（明治時代） …… 64
第74図　集落比較 …… 67
第75図　７世紀から10世紀の編年表その１ …… 70
第76図　７世紀から10世紀の編年表その２ …… 71
第77図　坏と埦の口径、器高グラフ …… 75
第78図　底径指数 …… 75

表目次

第１表　遺構一覧表 …… 2
第２表　周辺の遺跡 …… 3
第３表　三口遺跡の調査歴 …… 5
第４表　遺跡別時期変遷 …… 65
第５表　遺物観察表 …… 79

写真図版目次

写真図版１　１次調査区全景 ／１次調査区西側
写真図版２　１次調査区最西端部 ／１次調査区東側
写真図版３　１次調査区全景(東から) ／１次調査区西側SB2周辺
写真図版４　１次SB3周辺 ／１次調査区中央部SD3、SD4周辺
写真図版５　１次調査区東側SB7、SB8周辺 ／１次SH5周辺
写真図版６　１次調査区東側 ／１次調査区西側(西から) ／１次調査区東側(西から)
写真図版７　１次SH1完掘状態 ／１次SH1竈の状況 ／右から１次SH2、SH3、SH4
写真図版８　１次SH3(左)とSH4 ／１次SH3完掘状態 ／１次SH4完掘状態
写真図版９　１次SH5遺物出土状況 ／１次SH5完掘状態 ／１次SH5竈の状況
写真図版10　１次SH6完掘状態 ／１次SH7完掘状態 ／１次SB4、5
写真図版11　１次SH8完掘状態 ／１次SK1遺物出土状況(1) ／１次SK1遺物出土状況(2)
写真図版12　１次SK1完掘状態 ／１次SK2遺物出土状況 ／１次SK3遺物出土状況(1)
写真図版13　１次SK3遺物出土状況(2) ／１次SD1、SD2完掘状態 ／１次SK5遺物出土状況
写真図版14　１次SD3、SD4完掘状態 ／１次包含層３の遺物出土状況 ／１次包含層遺物出土状況
写真図版15　２次調査区北側(北から) ／２次調査区南側(南から)
写真図版16　２次SH1完掘状態 ／２次SH2完掘状態 ／２次SB1完掘状態
写真図版17　１次調査出土遺物(1)
写真図版18　１次調査出土遺物(2)
写真図版19　１次調査出土遺物(3)
写真図版20　１次調査出土遺物(4)
写真図版21　１次調査出土遺物(5)
写真図版22　１次調査出土遺物(6)
写真図版23　１次調査出土遺物(7)
写真図版24　１次調査出土遺物(8)
写真図版25　１次調査出土遺物(9)
写真図版26　１次調査出土遺物(10)
写真図版27　１次調査出土遺物(11)
写真図版28　１次調査出土遺物(12)
写真図版29　１次調査出土遺物(13)
写真図版30　１次調査出土遺物(14)
写真図版31　２次調査出土遺物

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

＜１次調査＞

中津市大字相原字郷ノ木と大字永添字小森を結ぶ新たな市道624号線として、総延長1,061m、最大幅員21mの道路が計画された。建設予定の道路は、国道212号に接続する通称「三口」地区を起点とするが、ここは周知遺跡「三口遺跡」としてすでに遺跡の存在が推測される場所であった。同じ時期、新設道路に隣接する地点に建設予定の新しい市営火葬場予定地でも文化財の有無を確認する調査（当時は「永添遺跡」、のちに「相原山首遺跡」と名称変更）が行われており、試掘調査の結果、両遺跡とも本調査が必要という判断となり、本調査が実施されることになった。三口遺跡の本調査は、西側は国道212号に接続する部分から、標高が一段下がる部分までの総延長105mで行われることとなったのである。

＜２次調査＞

１次調査の要因となった市道相原上ノ原線から北側に伸びる農道（鶴居53号線）の拡幅工事に伴い、全線で確認調査を実施した。その結果、遺構の確認された箇所について発掘調査を実施することとなったものである。

第２節　調査の経過

＜１次調査＞

試掘調査

平成５年４月23日～６月11日

本調査

平成５年７月19日	表土剥ぎ開始
７月26日	遺構検出
８月４日	包含層掘り下げ開始
８月31日	柱穴掘り下げ開始
９月７日	竪穴建物掘り下げ開始
９月24日	掘立柱建物検出、柱穴掘り下げ
９月29日	土坑掘り下げ
10月28日	調査終了

＜２次調査＞

試掘調査

平成９年11月７日～12月９日

本調査

平成10年１月７日	調査開始
３月30日	調査終了

第３節　調査体制

１次調査（平成５年度）

調査責任者	高椋　忠隆（中津市教育委員会教育長）
調査担当者	栗焼　憲児（中津市教育委員会市民文化センター文化財係主任）
調査事務	土井　　勝（中津市教育委員会市民文化センター館長）
	佐藤　輝彦（中津市教育委員会市民文化センター文化財係長）
	田中布由彦（中津市教育委員会市民文化センター文化財係主査）

２次調査（平成９年度）

調査責任者	前田　佳毅（中津市教育委員会教育長）
調査担当者	高崎　章子（中津市教育委員会市民文化センター文化財係主任）
調査事務	麻川　尚良（中津市教育委員会市民文化センター館長）
	田中布由彦（中津市教育委員会市民文化センター文化財係長）
	富田　修司（中津市教育委員会市民文化センター文化財係主任）

第１表　遺構一覧表

遺構名		種別	主な出土遺物	時期（※）	備考
1次調査	SH1	竪穴建物	須恵器	Ⅲ期以降	不整方形
	SH2	竪穴建物	土師器	Ⅱ～Ⅲ期	
	SH3	竪穴建物	須恵器、土師器、土錘	Ⅲ期	
	SH4	竪穴建物	須恵器、滑石製勾玉、鉄製刀子	Ⅱ～Ⅲ期	
	SH5	竪穴建物	須恵器、土師器、黒色土器、土錘	Ⅲ期	
	SH6	竪穴建物	須恵器、土師器、古代瓦	Ⅲ期～Ⅳ期	
	SH7	竪穴建物	須恵器、土師器、黒色土器	Ⅰ期	
	SH8	竪穴建物	なし	?	小型
	SB1	掘立柱建物	須恵器、土師器、土錘	Ⅹ期	
	SB2	掘立柱建物	なし	?	
	SB3	掘立柱建物	弥生土器	?	総柱建物
	SB4	掘立柱建物	なし	?	総柱建物
	SB5	掘立柱建物	なし	?	総柱建物
	SB6	掘立柱建物	なし	?	
	SB7	掘立柱建物	なし	?	総柱建物
	SB8	掘立柱建物	なし	?	
	SB9	掘立柱建物	なし	?	
	SK1	土坑	須恵器、土師器	Ⅰ期	
	SK2	土坑	土師器	Ⅱ～Ⅲ期	
	SK3	土坑	土師器、須恵器、黒色土器、墨書土器	Ⅻ期	
	SK4	土坑	須恵器、土師器、古代瓦	Ⅰ期	
	SK5	土坑	須恵器、土師器、黒色土器、土錘、銅製品	Ⅹ期	
	SK6	土坑	土師器、黒色土器	Ⅹ期	
	SK7	土坑	土師器、土錘	Ⅻ期以降	
	SK8	土坑	須恵器	?	
	SD1	溝	須恵器、土師器、黒色土器、土錘、砥石	Ⅹ期	SD2を切る
	SD2	溝	須恵器、土師器、黒色土器	Ⅹ期	SD1に切られる
	SD3	溝	須恵器	?	SD4と並行
	SD4	溝	なし	?	SD3と並行
2次調査	SH1	竪穴建物	なし	?	
	SH2	竪穴建物	須恵器、土師器、瓦質土器、鉄滓、砥石	Ⅲ期～Ⅴ期	
	SB1	掘立柱建物	なし	?	
	SD1	溝	須恵器、土師器、古代瓦	中世	

※時期は第５章第２節を参照のこと

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

奇岩織りなす耶馬渓から流れ下った山国川は、相原の鶴市神社が鎮座する下毛原台地の最西端部にぶつかり、流れを西に変える。そこが沖代平野を形成する扇状地の扇頂部ということになる。平野部の標高は16.8m で、下毛原台地の30m前後と比べると10m以上の標高差がある。

三口遺跡１次調査区の場所は、第73図のようにちょうど旧河道に挟まれた微高地で、明治21年の地籍図でも畑地であり、水田化はなされていなかった場所である。この微高地を囲む範囲が三口遺跡で、６次調査まで行われている。概ね標高は16mから17m で、周囲に比べ0.5 ～１m ほど高い。

第２節　歴史的環境

三口遺跡がある相原から永添にかけての地区（以下、相原地区）は、下毛郡において重要な遺跡が集中する箇所である。律令成立以前の古墳時代後期においても、この地は高塚古墳（鶴市神社裏山古墳、上人塚古墳）や横穴墓群（上ノ原横穴墓群、坂手隈横穴墓群など）があり、７世紀には相原山首遺跡で小石室墳（方形墳）が６基営まれる。

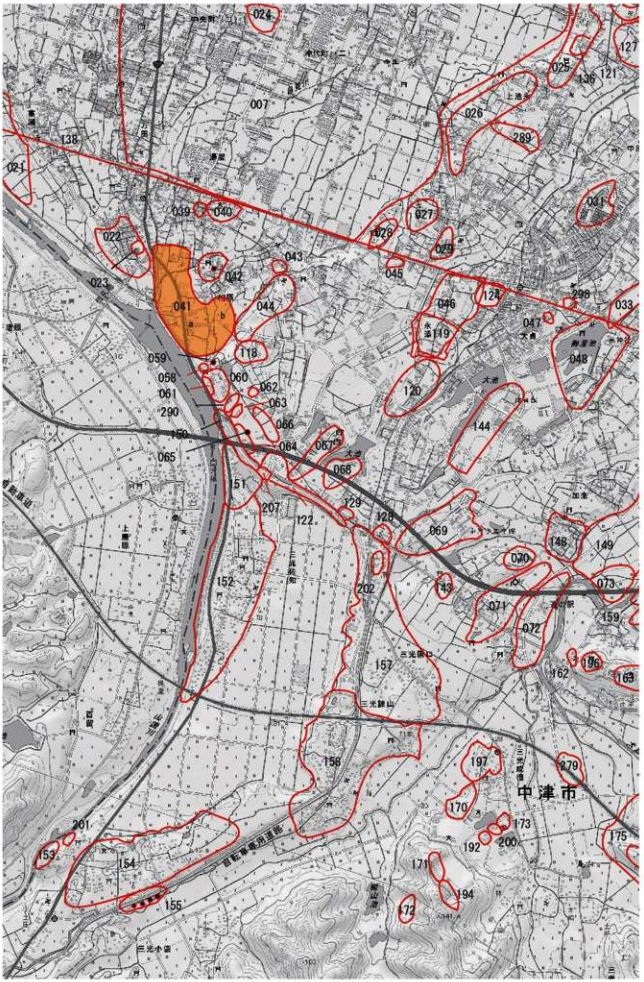
奈良時代になると、下毛原台地上では長者屋敷官衙遺跡において下毛郡正倉が確認されて、さらに相原山首遺跡や勘助野地遺跡、坂手隈城跡などで火葬墓が発見されている（一部は平安時代まで下る）。一方で、台地下の平野部では７世紀末の創建といわれる相原廃寺があり、その北側約500mには東西に古代官道（勅使街道）が通っている。さらに、その古代官道に交差する形で、南北に通じる道（江戸期には永山布政所路と呼ばれる、下毛郡と日田郡を結ぶ道）も存在した可能性が高い。

このように相原地区は古墳時代後期から古代にかけて、下毛郡では政治的に最も重要な場所であった。周辺には官道以北に展開する約900町に広がる条里水田があり、下毛原を挟んで約５km東側の伊藤田地区には須恵器や瓦を焼いた、確認されているだけで約50基からなる一大古窯跡群（伊藤田窯跡群）がある。

第２表　周辺の遺跡

遺跡番号	遺跡名	所在地	時　代
007	中代地区有屋跡	中津市中津市郊ほか	弥生・古墳・古代・中世・近世
012	鶴山古墳	中津市下池永	古墳
021	高瀬遺跡	中津市高瀬	弥生・古墳
022	上万田遺跡	中津市万田	弥生・古墳・中世
023	河原田城跡	中津市万田字河原田	中世
024	旧代小学校校庭遺跡	中津市旧代町	弥生
025	下池永遺跡	中津市下池永	弥生・古墳・中世・近世
026	上池永遺跡	中津市上池永	弥生・古墳
027	本江城跡	中津市永添	中世
028	西永添遺跡	中津市永添	弥生・古墳
029	梶屋遺跡	中津市永添	弥生・古墳
031	中原遺跡	中津市大悟法・上郡水	中世・近世
032	大悟法地区条里跡	中津市大悟法	古代・中世
039	福永城跡	中津市相原	中世
040	市場遺跡	中津市湯屋	古墳・中世
041	**三口遺跡**	**中津市相原・湯屋**	**弥生・古墳・古代**
042	相原廃寺	中津市相原	古代
043	法華寺城跡	中津市相原	中世
044	台遺跡	中津市相原	弥生・古墳
045	永添中堀遺跡	中津市永添	弥生・古墳
046	八宝城跡	中津市永添	中世
047	東ノ迫遺跡	中津市大貞	古墳
048	銅雲地岡古墳群	中津市大貞	古墳ほか
058	坂手前横穴墓群	中津市相原	古墳
059	鶴市神社裏山古墳	中津市相原	古墳
060	坂手隈城跡	中津市相原	古代・中世
061	坂手隈横穴墓群	中津市相原	古墳
062	相原古墳群	中津市相原	古墳
063	鴨猪部古墳群	中津市相原	古墳
064	勘助野地遺跡	中津市相原	縄文・古墳
065	上人塚古墳	中津市相原	古墳
066	柳ケ迫地遺跡	中津市相原	弥生・古墳
067	六宝寺遺跡	中津市永添	弥生・古墳
068	大池尾遺跡	中津市永添	弥生
069	清水原西遺跡	中津市加来	古墳
070	大幡城跡	中津市加来	中世
071	黒水遺跡	中津市加来	縄文・中世・近世
072	法師遺跡	中津市加来	縄文・弥生・古墳・平安・中世
073	植野田遺跡	中津市加来	弥生・古墳
118	相原山首遺跡	中津市相原	古墳・古代・中世
119	長者屋敷官衙遺跡	中津市永添	奈良・平安
120	勘助田遺跡	中津市永添	古墳・古代・中世

遺跡番号	遺跡名	所在地	時　代
121	大源寺遺跡	中津市下池永	中世
122	上ノ原平原遺跡	中津市相原・永添・三口金応知	弥生・古墳
124	東遺遺跡	中津市永添	
127	石堂池遺跡	中津市下池永	古墳・中世
128	高次郎原遺跡	中津市加来	弥生
129	上ノ原稲荷宮遺跡	中津市永添	古墳
136	池永城跡	中津市上池永	中世
138	古代屋敷遺跡	中津市伊藤田・福島迫ケ	古代
143	横遺跡	中津市加来	縄文ほか
144	中ノ林遺跡	中津市大貞	弥生・古墳
148	加来原屋敷遺跡	中津市加来	中世・近世
149	加来栗遺跡	中津市加来・福島	縄文・古墳
150	上ノ原横穴墓群	中津市三光佐知	古墳
151	佐知古城跡遺跡	中津市三光佐知	縄文・弥生・古墳
152	佐知遺跡	中津市三光佐知・土田字宮前・屋敷	縄文・弥生・古墳・中世
153	城の百八横穴墓群	中津市三光土田	古墳
154	日本遺跡	中津市三光日本	弥生・古墳
155	日本古墳群（1～4号）	中津市三光日本	古墳
156	外園遺跡	中津市三光日本	中世
157	廻口遺跡	中津市三光廻口	弥生・古墳
158	鍋山遺跡	中津市三光鍋山	縄文・弥生・古墳・古代・中世
159	樋岡長遺跡	中津市三光森山	縄文・中世
160	北平横穴墓群	中津市三光森山	古墳
162	池添横穴墓群	中津市三光森山	古墳
163	東遺尾遺跡	中津市三光下林	中世
170	成恒遺跡	中津市三光成恒	弥生・古墳
171	尾ノ尾横穴墓群	中津市三光成恒	古墳
172	鶴山横穴墓群	中津市三光鍋山	古墳
173	猪熊寺遺跡	中津市三光成恒	古代・中世
175	岡崎遺跡	中津市三光岡崎	弥生ほか
176	岡崎城跡	中津市三光田口	中世
192	成恒熊原遺跡	中津市三光成恒	古墳
194	大谷平横穴墓群	中津市三光田口・成恒	古墳
196	北平城跡	中津市三光森山	中世
197	田嶋崎城跡	中津市三光成恒	中世
200	猪熊遺跡	中津市三光成恒	奈良・平安・中世
201	土田城跡	中津市三光土田	中世
202	耳ヶリ古墳群	中津市三光廻口	奈良
207	上ノ原遺跡	中津市三光佐知	弥生・古墳
279	鍋ノ町遺跡	中津市三光田口鍋ノ町・石ノ上	弥生・古墳・中世
289	上池永矢筈遺跡	中津市大字上池永	中世
290	相原平坦遺跡	中津市大字相原	中世

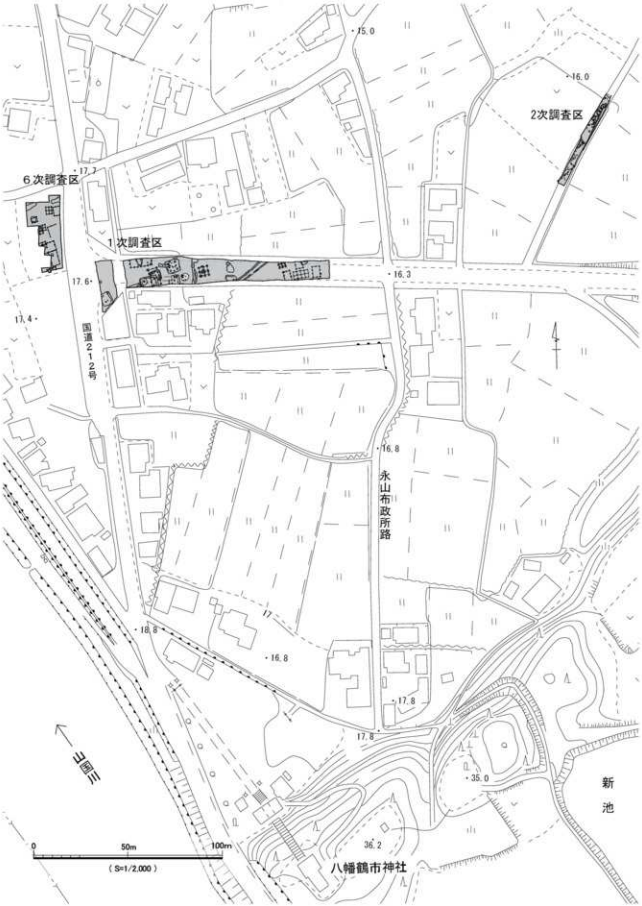


第１図　周辺の遺跡分布図

第 2 図　調査区位置図

第 3 表　三口遺跡の調査歴

次数	調査地	調査面積 ㎡	調査期間	調査内容			調査要因	報告書
				主な遺構	主な遺物	時代		
1	大字相原字堀ノ木3388番地ほか	1,557	1993/7/19～1993/10/28	竪穴建物、掘立柱建物、土坑、溝	須恵器、土師器、緑釉陶器、越州窯青磁、墨書土器	古墳、古代	市道建設	本書
2	大字相原山ノ下3503番地	212	1998/1/7～1998/3/30	竪穴建物、掘立柱建物、溝	須恵器、土師器、古代瓦	古代	農道整備	本書
3	大字相原字溝畑3334番地	142	2011/10/14～2011/10/19	柱穴		弥生、古墳、古代	遊技場増築、立体駐車場建設	第61集『三口遺跡広畑地区』2013
4	大字相原字後畑3360番地-5ほか	81	2017/1/6	柱穴、溝		古墳	宅地造成	第81集『市内遺跡試掘確認調査他』2017
5	大字相原字神ノ木3303番地ほか	440	2017/6/22～2017/8/10	竪穴建物、石棺墓、礫棺墓、集積遺構	弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、石鏃、石包丁、刀子	弥生、古墳、古代	店舗建設	第85集『三口遺跡第5次調査』2018
6	大字相原字堀ノ木3375番地ほか	490	2021/9/1～2021/10/15	竪穴建物、掘立柱建物、溝	須恵器、土師器	弥生、古墳、古代	福祉施設建設	第109集『三口遺跡第6次調査』2022


15.0
16.0
2次調査区
6次調査区
17.7
1次調査区
17.6
16.3
17.4
国道212号
16.8
永山布政所路
17
18.8
16.8
17.8
17.8
35.0
新池
36.2
八幡鶴市神社
0
50m
100m
(S=1/2,000)

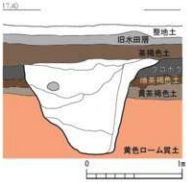
第３図　遺跡詳細位置図

第４図　三口遺跡１次調査遺構配置図

第３章　１次調査の成果

第１節　調査概要

国道212号に接続する部分から、東に伸びる新設の道路の長さ109m、幅10～15m分、約1,557㎡が調査対象となった。調査の結果、竪穴建物８基、掘立柱建物９基、土坑８基などが検出された。調査対象地は厚いクロボク層に覆われており、遺構検出は困難を極めた。クロボク下の暗茶褐色土層まで掘削すると、浅い遺構は飛ばしてしまうことになる。実際、包含層として取り上げた土器群（例えば包含層３など）は、何らかの遺構に属していた可能性が高い。



第５図　基本層序（隣接する第６次調査区の土層を使用）

出土した遺物を見ると、弥生時代中期の遺物が最も古いが、弥生時代の遺構は確認されていない。次いで、古墳時代後期（飛鳥時代）の６世紀末から７世紀後半と、平安時代前半の９世紀前半から10世紀前半にほとんどの遺構は含まれる。その後、12世紀から13世紀の陶磁器類が僅かに確認されたが、遺構は確認できなかった。つまり、三口遺跡１次調査区は、飛鳥時代と平安時代前半の大きく二つの時期に分けられる遺跡という事になる。出土遺物が無くて時期的位置づけが不明瞭なものも多いが、概ね竪穴建物は前者に、掘立柱建物の多くは後者に属する可能性が高い。

第２節　遺構と遺物

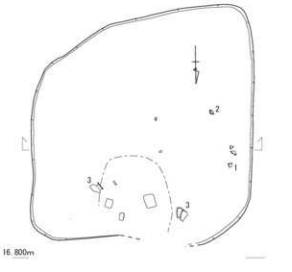
（１）竪穴建物

SH1（第６図）

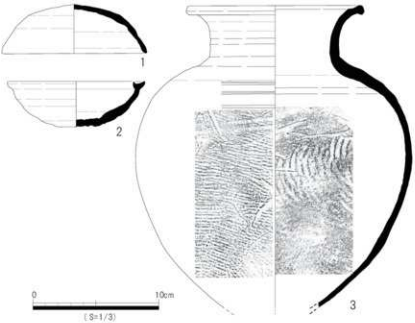
調査区の西寄りで確認された竪穴建物で、SH3の埋土中に掘り込まれている。東西3.5m、南北2.8～3.5mの台形を呈し、残存する深さは0.1mほどと浅い。柱穴は２ヵ所で確認されたが、この建物に伴うものであるかは不明である。北壁の中央には電がある（調査時の図面が確認できないため、規模や構造は不明）。

図示できる出土遺物は３点である。第７図１は口径11.6cmの坏H蓋である。天井部は比較的丁寧にナデ調整されている。２は坏Hで、口径は11.0cmである。底部はヘラ切り離しのままであるが、底部中央には粘土を巻いた痕跡が残る。３は小型の甕で、頸部が真っすぐ立ち上がり、先端で強く外反する口縁部を持つ。

これらから、伊藤田窯跡群では穂屋１号窯並行期、すなわち後述の三口２期とすることができるが、切り合い関係でSH1よりも古いSH3が三口３期と考えられるので、矛盾する。出土遺物の少なさに起因するものであろう。竪穴建物の時期は三口３期以降としておく。



第６図　１次SH1



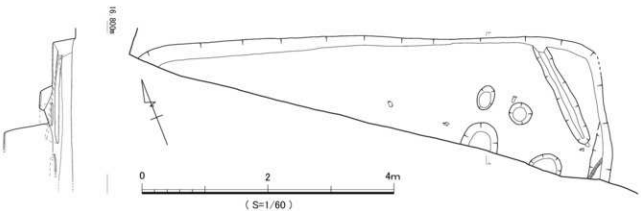
第７図　１次SH1出土遺物

SH2（第８図）

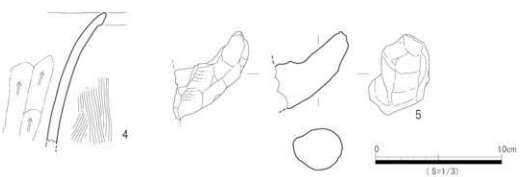
調査区の西寄りで確認された竪穴建物で、大部分が調査区外に延びるので全形は不明であるが、北辺は3.7mあり、残存する深さは0.17mである。主柱穴は不明である。

図示できる出土遺物は２点である。いずれも土師器の甕である。第９図４は緩やかに外反しながら開く口縁部で、５は把手の部分である。

図示できた資料だけでは、竪穴建物の時期を絞り込むのは難しい。



第８図　１次SH2



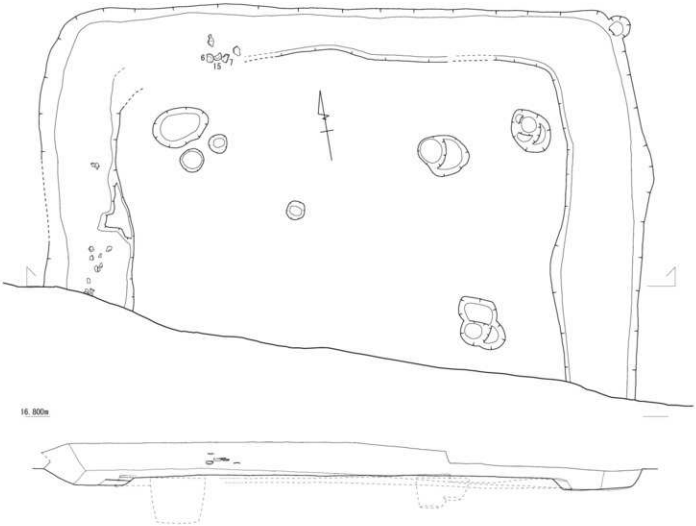
第９図　１次SH2出土遺物

SH3（第10図）

調査区の西寄りで確認された竪穴建物で、SH1に切られ、SH4を切っている。３分の１ほどが調査区外のため、全形は不明であるが、東西は9.5mと大きく、残存する深さは0.5mほどある。床面の壁際には幅0.8 ～ 1.2m、深さ0.15mがほぼ全周する。南側３分の１が調査区外のため、竈の有無は不明である。主柱穴は北壁に近い２カ所の可能性が高い。

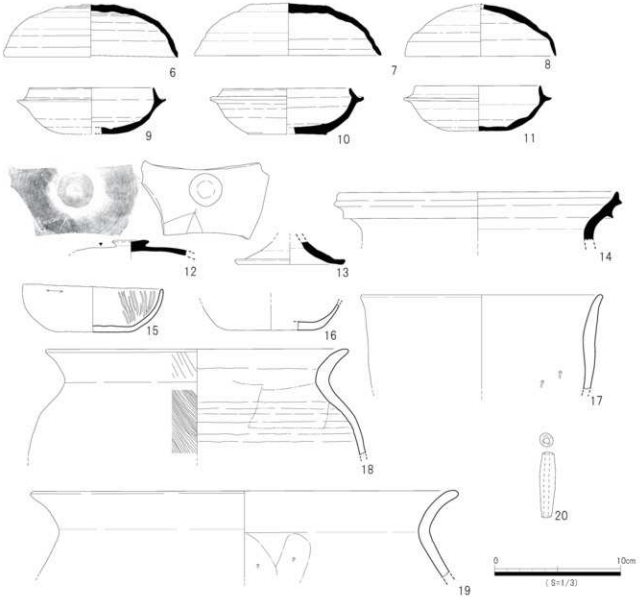
図示できる出土遺物は15点である。第11図６から13は須恵器。６～８は坏H蓋で、６は口径13.6cmで天井部はヘラ切り未調整、７は口径14.8cmで、天井部ヘラ切りのちヘラ調整、８は口径12.0cmで、天井部は回転ヘラ削りがなされる。９から11は坏H で、９は口径9.8cmで、底部は回転ヘラ削り、10は口径10.0cmで、底部は手持ちヘラ調整、11は口径10.0cmで、底部は回転ヘラ削りが施される。12は扁平で中央が窪む摘みが付く坏B蓋で、天井部は丁寧な回転ヘラ削りである。外面に３本の直線で構成されるヘラ記号がある。13は短脚の脚部で、裾部で外方向に広がる。14は口縁部に二条の突帯を巡らせる甕。端部でやや内湾気味に開く。15から19は土師器。15は平底の底部から丸みを持って立ち上がる体部を持つ坏で、外面は横方向のミガキ、内面は雑に線を刻み入れたような左放射状の暗文を施す。16は15と同様の器形であるが、内外面ともナデである。17は甑で、口縁端部が細くなって外反する。18、19は甕で、外反して開く口縁部を持ち、胴部は丸みを持つ。20は土師質の土錘である。

これらの出土遺物は、須恵器蓋坏の特徴から伊藤田窯跡群では瓦ヶ迫窯跡群出土資料（田辺編年TK43）と並行と考えられるが、明らかに後出の12なども含む。14の甕は、伊藤田窯跡群に特徴的とされる「口縁部突帯付大甕」であり、長氏によると長氏のⅤ～Ⅵ期、すなわち７世紀後半に認められるとされる（長2012）。出土状況を見ると、11の坏身が床面上で出土していることから、この竪穴建物の時期は後述の三口１期とも考えられるが、切り合い関係から考えると、７世紀後半（三口３期）に属する12、14 ～ 16などの遺物群の時期とする方が矛盾が無い。



第10図　１次SH3

0　2　4m
（S=1/60）



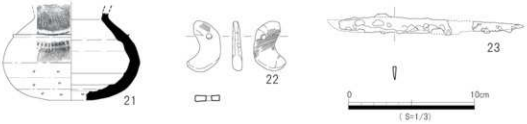
第11図　１次SH3出土遺物

SH4（第13図）

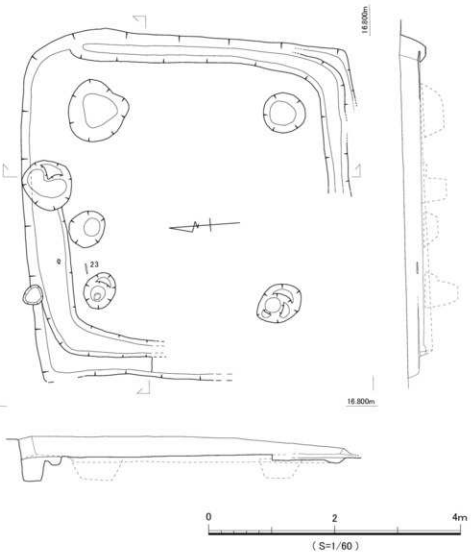
調査区の西寄りで確認された竪穴建物で、SH3に切られている。東西5.4m、南北5.3mのほぼ正方形を呈し、残存する深さは0.3mほどである。主柱穴は壁際の４つである。壁際には、幅0.45m、深さ0.15mほどの溝がめぐる。

図示できる遺物は３点である。第12図21は須恵器甕で、やや下膨れの体部を持つ。伊藤田窯跡群では城山窯跡群A地区１号土坑で出土しており、集落遺跡では佐知遺跡塚ノ原地区（大分県埋セ2016b）などで出土している。22は滑石製の勾玉である。23は鉄製の刀子で、復元長15.5cmほどか。

竪穴建物の時期は、遺物が少ないので難しいが、須恵器甕が７世紀代のものなので、竪穴建物の時期は７世紀としておく。



第12図　１次SH4出土遺物



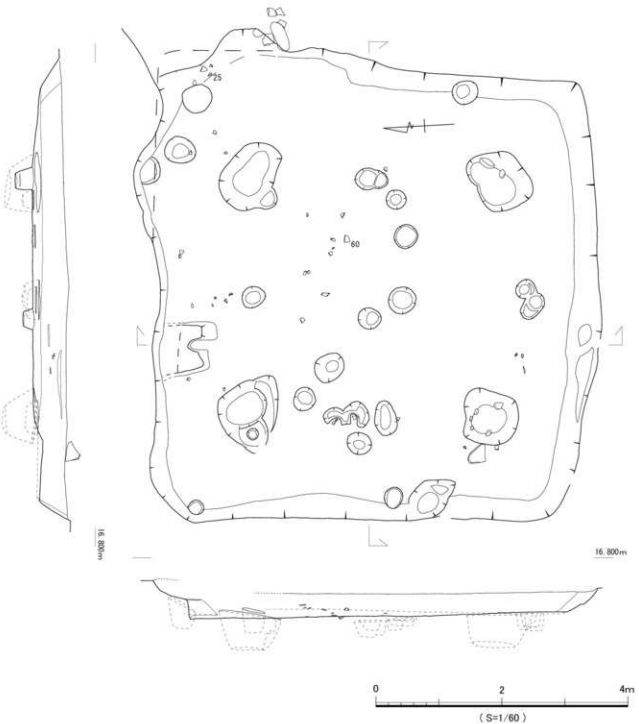
第13図　１次SH4

SH5（第14図）

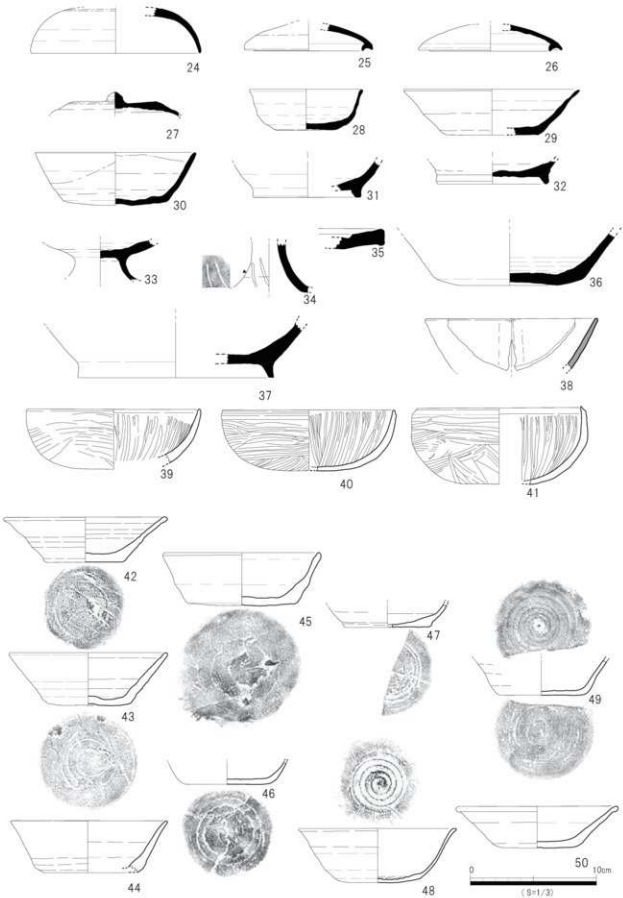
調査区中央やや西寄りで確認された竪穴建物である。東西7.5m、南北7.0mのやや長方形を呈する。残存する深さは0.35mである。北辺の壁のやや西寄りに竈がある。竈は幅0.85mである（調査時の図面が確認できず、詳細は不明）。主柱穴は大きな４本が該当する。

出土遺物は第15図24から第16図77である。24から37は須恵器。24は坏Hの蓋で、口径は13.2㎝で、天井部は回転ヘラ削り、25と26は坏B蓋で、内面に返りを持つ。27は坏B蓋で、回転ヘラ削りを施す天井部にくびれの無い擬宝珠摘みを持つ。28は坏Bで、口径は8.8㎝。口縁部は僅かに外反して開く。29と30は平底から直線的に外傾して大きく開く坏で、底部はヘラ切り離しである。やや甘い焼成が似ている。31と32は坏Bの底部で、しっかりした高台からあまり外に張り出さないで体部が立ち上がる。33と34は低脚の高坏脚部である。34には平行する２本のヘラ記号がある。35は甕の口縁部で、端部上面を帯状に厚くしている。白っぽい焼き上がりと形状からすれば、伊藤田窯跡群のものではない可能性が高い。36と37は壺の底部で、37には高台が付く。

38は口縁部を輪花にする緑釉陶器椀。口縁端部を上部から押圧して輪花を作る。その部分の内外面にも縦方向の押圧痕？が残る。胎土はあまり緻密ではないが、灰色からやや黄褐色気味を呈し、陶器ほどではないが硬質である。39から66は土師器。39から41は平底気味の底部から丸く内湾して立ち上がる体部を持つ坏で、色調が赤の強い橙色となる。いずれも外面はミガキ、内面には右放射状の暗文を施す。40、41は口縁端部外面に凹線を入れる。42から50は平底から直線的に外傾しながら開く体部を持つ坏。底部は回転ヘラ切りのまま（43、45、47、48）と、その後ナデ調整を行うもの（42、46、49、50）がある。体部は内外面とも回転ナデ調整である。口径は12.2 ～ 13.0cmとまとまっ



第14図　1次SH5

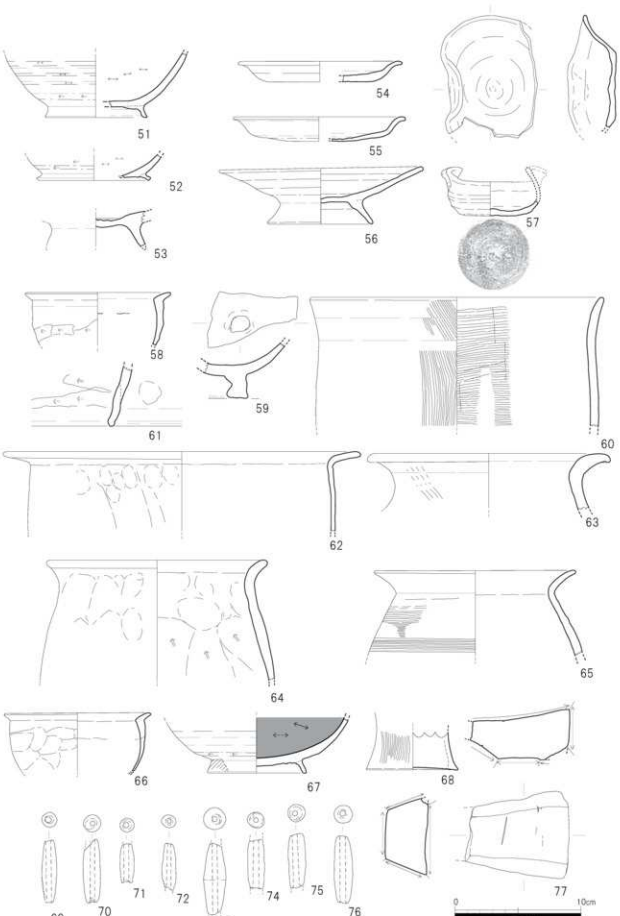


第15図　1次SH5出土遺物(1)

ているが、器高が浅いものと深いものがある。51、52、53は高台の付く埦。51はやや細く長めの高台に、内湾しながら開く体部を持つ。底部は丁寧にナデ調整されている。高台に接する体部約1.5cmはヘラ削り、それより上はナデ調整を行ったうえに、間隔をあけて暗文風のヘラミガキを施す。52は外側に踏ん張る高台で、体部外面にはヘラ削り痕が残る。内面はミガキが施される。51と52は色調が赤みの強い橙色で、良く似ている。53は高台が高く伸びる埦で、底部内面が窪む。54と55は皿で、平底から大きく外反して開く口縁部が付く。底部は回転ヘラ切り後、丁寧にヘラ調整されている。54は51や52と色調が同じである。55はやや黄白色をしている。56は托で、高台は直線的に開く。皿状の体部の下側1.5cmほどは回転ヘラ削りで、それより上部は回転ナデ調整、内面も回転ナデ調整である。ミガキはないが、色調は51などと同様に赤が強い黄褐色である。57は耳皿で、底部は回転ヘラ切りのち、丁寧なナデ調整。体部外面には段々を意識的に付している。内面はナデ調整である。58は鉢で、口縁部が小さく折れる。外面はヘラ削り。59は器形が不明であるが、おそらく３足が付く盤のようなものになるのではなかろうか。内外面ともナデで、それほど丁寧な作りではない。色調が他の土師器と全く異なり、やや紫がかった明灰茶色である。60と61は甑で、60は口縁が先端で外反して開く。61は底部で、端部は丸く納まる。62から65は甕。65の外面にはカキ目状の横線を施している。66は鉢。

67は黒色土器A類埦で、内面は丁寧に磨かれており、外面は高台に接する部分は回転ヘラ削り、上部は暗文風に間隔をあけて回転ヘラミガキを施す。68は弥生時代中期の甕底部。69から76は土錘。77は泥岩製の砥石である。

以上の遺物を見ると、大きくは後述する三口３期のものと、三口４期のものがある。竪穴建物の時期は三口３期（７世紀後半）であり、39から41の暗文土師器坏（埦）や25から28の須恵器坏、坏蓋が該当し、さらには赤色が強い黄褐色を呈する土師器の51、52、55、57なども同時期と考えられる。一方、後者には42から50の坏や66の黒色土器A類埦、さらに38の緑釉陶器などが該当する。



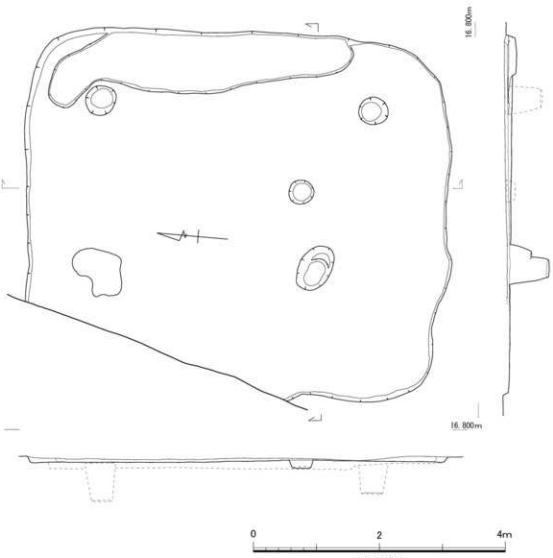
第16図　1次SH5出土遺物(2)

SH6（第17図）

調査区の最も西端で確認された竪穴建物である。北西部が僅かに調査区外となる。南北6.6m、東西5.7mの南北に長い長方形を呈する。残存する深さは0.05mほどと浅い。床面には４カ所のピットがあるが、明確に主柱穴を指摘することはできない。また、東壁際には、幅0.9mで深さ0.2mほどの溝状の遺構がある。

第18図**78**から**84**が出土遺物である。**78**から**80**は須恵器。**78**は坏G蓋で、内面に返りを持つ。**79**は坏H で、口径は10.8㎝。底部は回転ヘラ削り。**80**は高坏で、口径は15.0㎝ある。体部下側は回転ヘラ削り、上部から内面は回転横ナデ調整である。焼きが甘く、白黄灰色をしている。**81**は土師器椀で、内外面とも磨かれている。底部はヘラ切りのち、ナデ調整。体部の下位に一条の粘土ひもを巡らせて、托に載せた姿を表す。この形は黒色土器で作られることがほとんどで、土師器では珍しい。**82**は甑で、口縁部が緩やかに外反する。**83**は黒色土器A類椀で、内外面とも磨かれている。底部はヘラ切りのち、中央を除いて回転ナデ調整。**84**は古代瓦である。

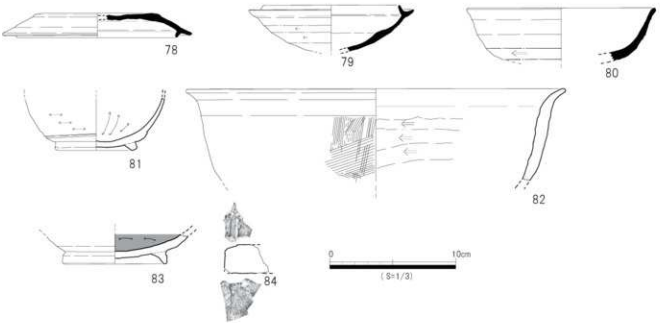
以上の土器群は、穂屋1号窯跡に並行する資料と９世紀後半代の資料が混在する。竪穴建物の時期は前者、すなわち７世紀中頃から後半とすることができよう。



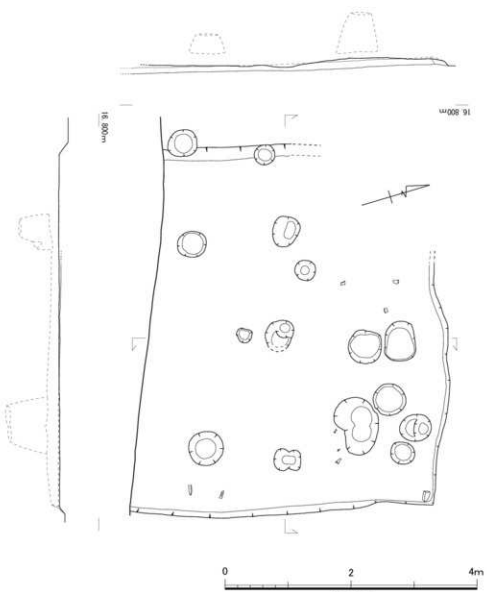
第17図　１次SH6

SH7（第19図）

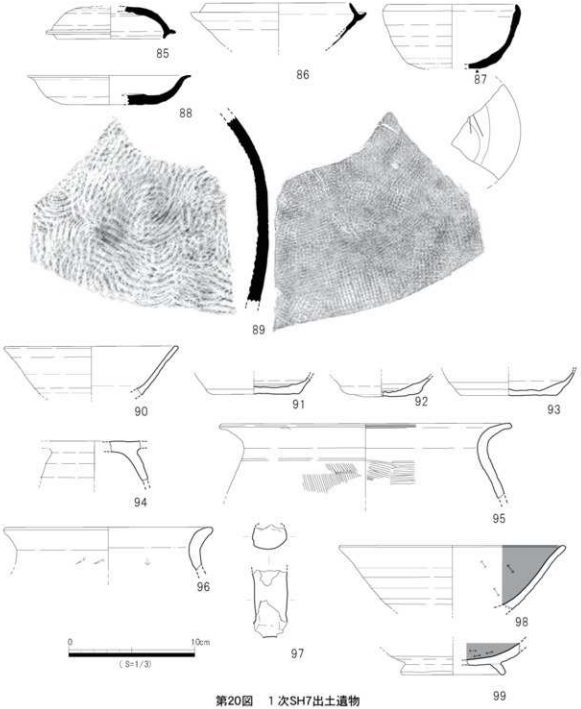
調査区中央やや西寄りで確認された竪穴建物である。南側が僅かに調査区外となり、南北の長さは不明である。東西は5.8mで、残存する深さは0.2mほどである。床面にはピットが多くあるが、主柱穴を指摘するのは難しい。



第18図　1次SH6出土遺物



第19図　1次SH7



第20図　1次SH7出土遺物

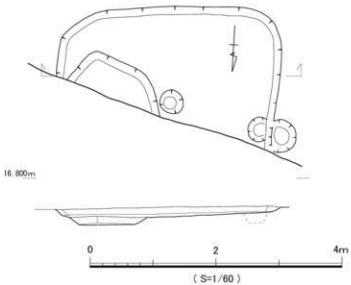
出土遺物は第20図85から99である。85から89は須恵器。85は坏G蓋で、口径は8.4cm。天井部は丁寧に回転ヘラ調整されている。86は坏Hで、口径は11.4cm。87は坏Gで、口径は10.2cm、底部は丁寧な回転ヘラ調整がなされる。底部にはヘラ記号がある。口縁端部が細り、内側がやや窪む。88は皿で、口径は13.0cm。底部は回転ヘラ調整か。口縁端部で細りながら折れて開く。焼きが甘く、明黄白色を呈する。89は甕の胴部。90から97は土師器。90から93は坏である。90は口径13.8cmに復元できる坏で、内外面とも回転横ナデ調整。91から93はいずれも平底の底部で、回転ヘラ切りのち、ナデ調整が施されている。94は托あるいは燭台と考えられる土師器。底部、体部とも丁寧にナデ調整されている。底部内面は薄く炭化したように明灰茶色を呈す。95と96は土師器甕である。97は何らかの把手で、図面下側が本体に接続する部分となる。98と99は黒色土器A類椀で、98は胴部が直線的に開き、先端部でやや外反する。99は「ハ」字状に開く高台で、底部はヘラ調整されている。体部はヘラ削りがなされている。内面はいずれもよく磨かれている。

以上の遺物を見ると、7世紀代と9世紀代の遺物がある。竪穴建物ということからすれば、このSH7の時期は後述の三口1期となる。須恵器の86、87などが該当する。86はやや古い形態を持つが、伊藤田窯跡群でいえば夜鳴池窯跡に並行する時期と考えられる。9世紀代はその他の土師器坏、黒色土器A類椀が該当する。

SH8（第21図）

調査区の東端近くで確認された竪穴建物である。２分の１ほどが調査区外となり全形は分からないが、東西は3.5mほどで、残存する深さは0.15mほどである。床面の東側には直径1.5mほどの土坑がある。床面からの深さは0.1mである。ピットは二つあるが、主柱穴ではないと考えられる。

出土遺物はなく、時期は不明である。



第21図　１次SH8

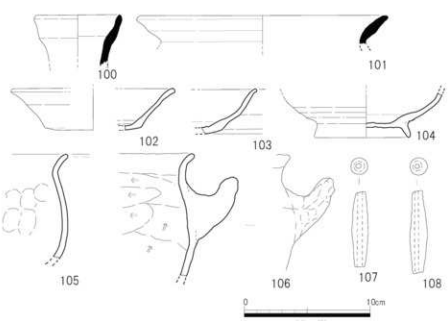
（２）掘立柱建物

SB1（第23図）

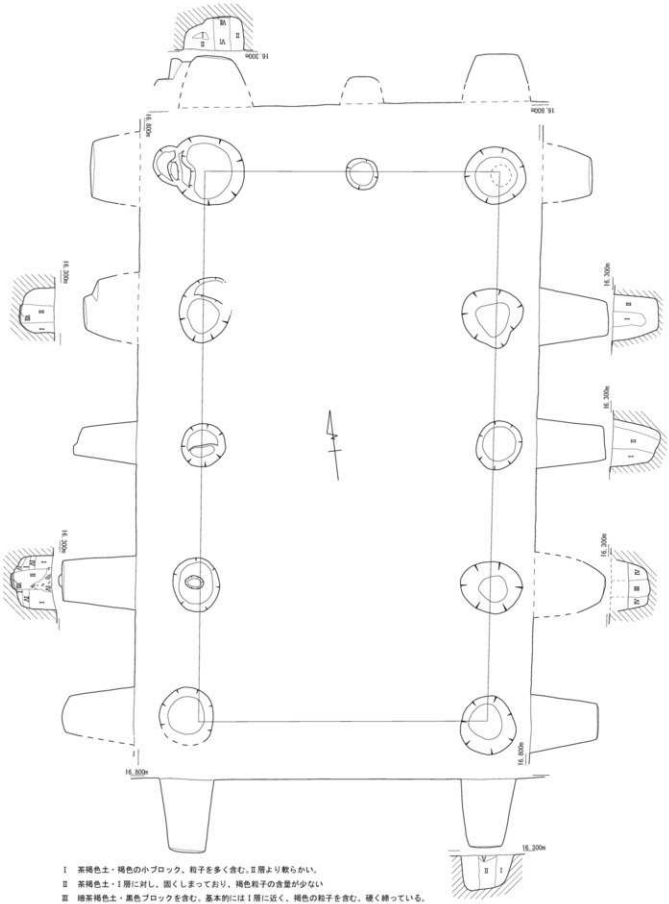
調査区西寄りで確認された掘立柱建物である。調査区内では４間×２間であるが、南側にさらに伸びる可能性がある。建物規模は芯々で桁行8.65m、梁間4.6mである。側柱の柱穴掘方は直径が0.7 ～ 1.1mと大きく、梁間の柱穴掘方は0.45mと小さい。ほとんどで柱痕が残っており、それらは直径が0.25mから0.35mである。柱が地山に接する部分には、固く締まった粘質の強い土が認められた。桁行は磁北にほぼ並行である。

第22図100から108が、掘立柱建物SB1の柱穴から出土した土器である。100と101は須恵器である。100は平瓶の口縁部。緩やかな段を持って内湾して開く。101は壺の口縁部か。102から106は土師器。102と103は坏で、いずれも底部はヘラ切り離しである。102の復元口径は13.0cmである。両者とも口縁端部は小さく外反する。104は椀で、あまり伸びない高台である。底部は回転ヘラ切り離しである。体部の下端はヘラ調整痕が残るが、ほかは内外面ともナデ調整である。105は甕、106は甑である。107と108は土錘である。

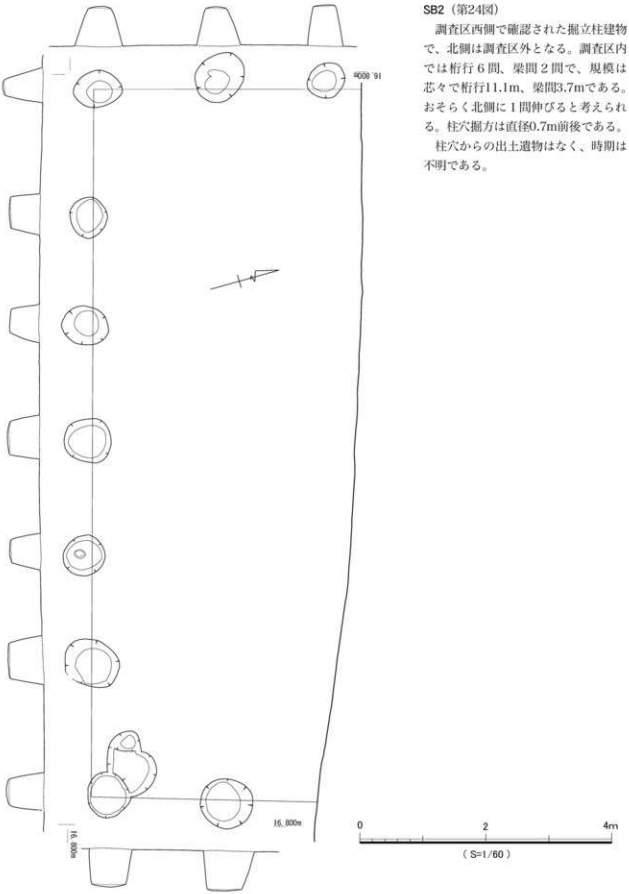
これらの資料は、後述する三口５期に該当する。



第22図　１次SB1出土遺物


16.300m
16.800m
16.300m
16.300m
16.300m
16.300m
16.300m
16.800m
16.800m
16.300m
Ⅰ　茶褐色土・褐色の小ブロック、粒子を多く含む。Ⅱ層より軟らかい。
Ⅱ　茶褐色土・Ⅰ層に対し、固くしまっており、褐色粒子の含量が少ない
Ⅲ　暗茶褐色土・黒色ブロックを含む。基本的にはⅠ層に近く、褐色の粒子を含む。硬く締っている。
Ⅳ　明茶褐色土・褐色ブロックを多量に含み、一部は版築様になるが、分層までできない。軟らかい。
Ⅴ　褐色土・カーボンを多く含む。褐色の粒子もまじり、ややしまっている。
Ⅵ　茶色土・褐色の粒子をほとんど含まない点でⅡ層と区別される。
Ⅶ　茶灰色土・粘土と黒色土を茶色ローム土と混ぜたような土層で、これを粘床風につき固めている。
Ⅷ　白色粘土層・Ⅶ層と同様に、柱基礎として利用か。
0
2
4m
（S=1/60）

第23図　1次SB1



第24図　1次SB2

SB2（第24図）

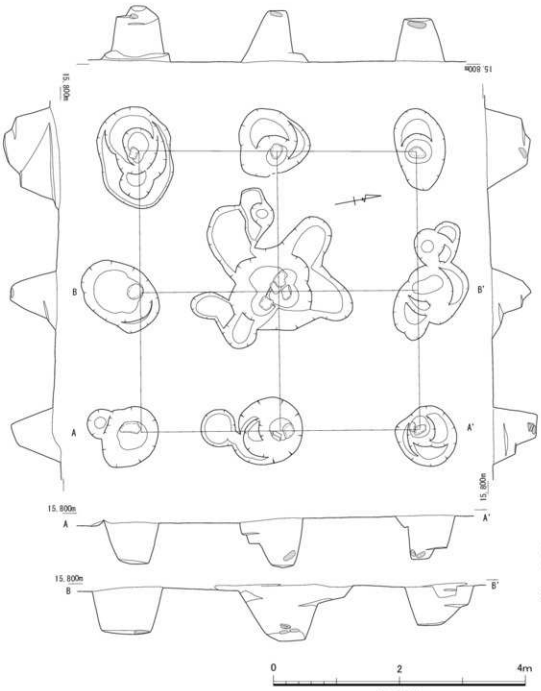
調査区西側で確認された掘立柱建物で、北側は調査区外となる。調査区内では桁行６間、梁間２間で、規模は芯々で桁行11.1m、梁間3.7mである。おそらく北側に１間伸びると考えられる。柱穴掘方は直径0.7m前後である。

柱穴からの出土遺物はなく、時期は不明である。

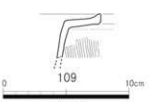
SB3（第25図）

調査区中央付近で確認された掘立柱建物で、２間×２間の総柱建物である。芯々で4.4mの正方形となる。柱穴は柱を引き抜いたために楕円形を呈しているが、本来の掘方は直径１m前後と、大きなものであったと考えられる。

柱穴からは第26図**109**のみ出土している。**109**は弥生時代中期の甕で、掘立柱建物の時期を示すものではない。柱穴の規模から６～７世紀のものではなく、三口遺跡では９世紀以降の遺構群に伴うものと考えられる。



第25図　１次SB3



第26図　１次SB3出土遺物

SB4（第27図）

調査区の東側で確認された掘立柱建物で、SB5とは建て替えの関係になるが、先後関係は不明である。北側が調査区外となる為、全形は不明であるが、おそらく２間×２間の総柱建物になると考えられる。柱穴掘方は直径0.4～0.5mで、建物規模は東西で3.4mとなる。

柱穴からの出土遺物はなく、時期は不明である。

SB5（第28図）

調査区の東側で確認された掘立柱建物で、SB4とは建て替えの関係になるが、先後関係は不明である。SB4と同じく北側が調査区外となり、全形は不明であるが、２間×２間の総柱建物になると考えられる。柱穴掘方は直径0.5～0.7mで、建物規模は東西で3.2mとなる。

柱穴からの出土遺物はなく、時期は不明である。

SB6（第29図）

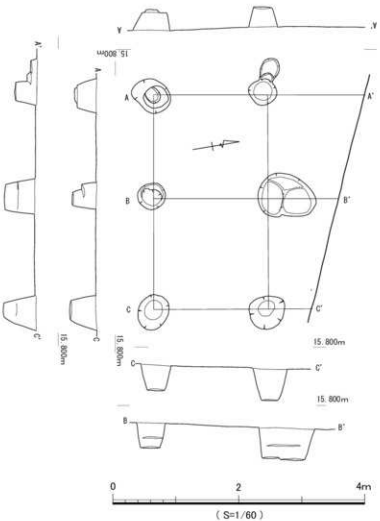
調査区の東側で確認された掘立柱建物である。南側が調査区外となる。梁間は２間で、桁行は３間確認出来る。柱穴掘方は直径0.35mから0.5mほどである。

柱穴からの出土遺物はなく、時期は不明である。

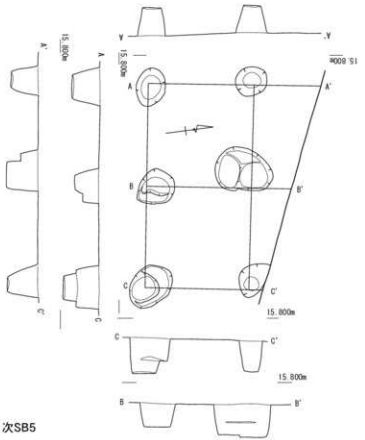
SB7（第30図）

調査区の東端近くで確認された４間×２間の掘立柱建物で、総柱建物である。柱穴掘方は直径0.25mから0.6mである。建物規模は芯々で桁行7.8m、梁間3.95mである。

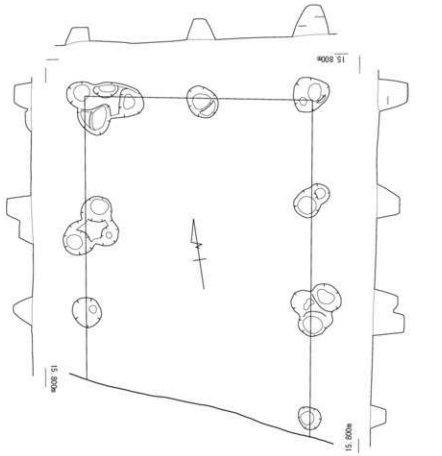
柱穴からの出土遺物はなく、時期は不明である。



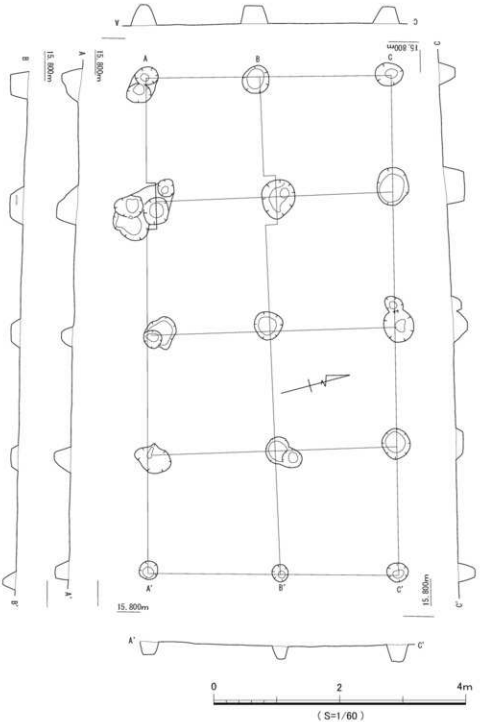
第27図　１次SB4



第28図　1次SB5



第29図　1次SB6



第30図　1次SB7

SB8（第31図）

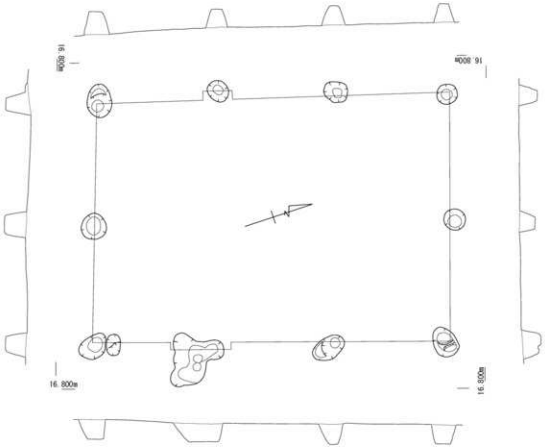
調査区の東端で確認された３間×２間の掘立柱建物である。柱穴掘方は直径0.3mから0.6mである。建物規模は桁行5.5m、梁間3.75mである。

柱穴からの出土遺物はなく、時期は不明である。

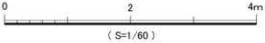
SB9（第32図）

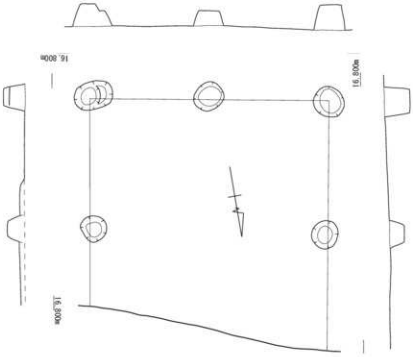
調査区の東端近くで確認された掘立柱建物である。北側が調査区外となり、全形は不明である。梁間は２間であるが、桁行は不明である。梁間の規模は3.75mである。柱穴掘方は直径0.4mから0.55mである。

柱穴からの出土遺物はなく、時期は不明である。

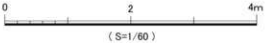


第31図　1次SB8





第32図　1次SB9

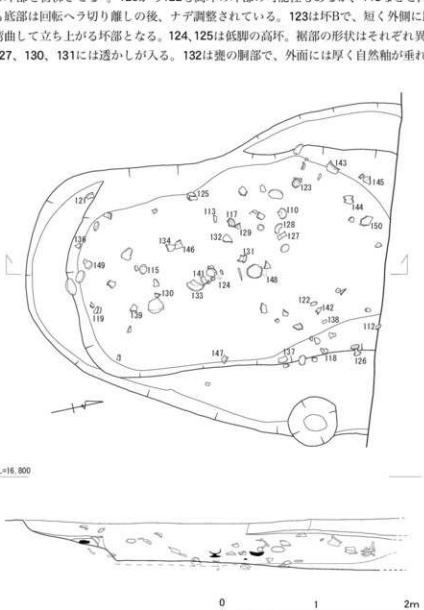


（3）土坑

SK1（第33図）

調査区の西側で確認された土坑である。北側は調査区外となる。現状で東西最大幅3.5m、南北は3.8m+αで、深さは0.4mである。南側と西側には一段高い部分がある。遺物は全体から満遍なく出土している。

第34図110から第35図150までがSK1出土遺物である。110から115は坏H蓋である。口径は12.8 ～ 14.0cmである。111、112は回転ヘラ調整、116は丁寧な手持ちヘラ調整、115は底部回転ヘラ切り離しのち未調整である。116は坏B蓋か。117は坏G。底部はヘラ調整がなされる。118と119は体部中ほどで段を持って大きく外反して開く坏で、高坏の坏部を彷彿させる[註]。120から122も高坏の坏部の可能性もあるが、118などと同様の坏かもしれない。118、119とも底部は回転ヘラ切り離しの後、ナデ調整されている。123は坏Bで、短く外側に踏ん張る高台で、外側に張り出して湾曲して立ち上がる坏部となる。124、125は低脚の高坏。裾部の形状はそれぞれ異なる。126から131は長脚の高坏で、127、130、131には透かしが入る。132は甕の胴部で、外面には厚く自然釉が垂れる。

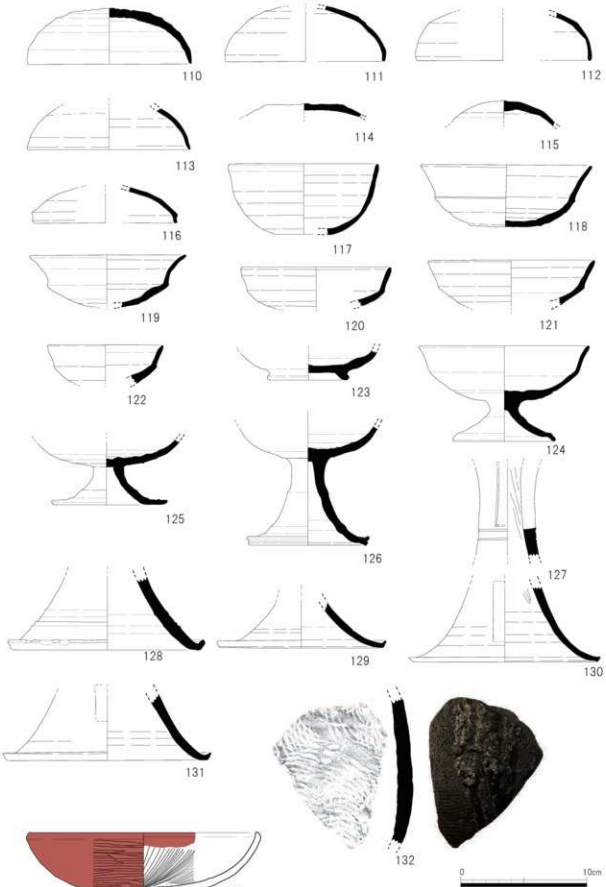


第33図　1次SK1

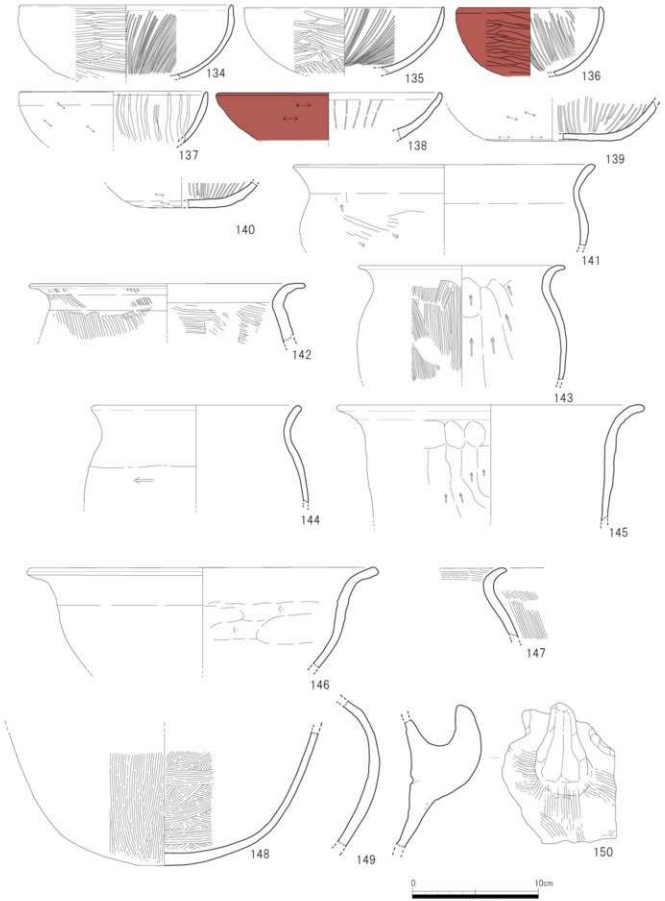
133から150は土師器。133から140は平底気味の底部から内湾して立ち上がる体部を持つ坏で、いずれも外面はミガキで、内面には暗文を施す。137は正放射状、136と138は左放射状、他は右放射状である。133は外面および内面の一部に、136と138は外面に赤彩を施す。いずれも口縁端部を細くし、内面に窪みを持つか（133）、外面に窪みを持つ。141から148は甕・鉢である。口縁部は緩やかに外反しながら開く。149は壺か。150は甑の把手である。

以上から、この土坑の時期を探れば、須恵器坏H蓋のほとんどが天井部をヘラ調整していること、短脚の高坏が多いとはいえ、長脚２段透かしのものも存在するなど、伊藤田窯跡群でいえば瓦ヶ迫窯跡から草場窯跡段階に想定される。時期的には後述の三口１期（６世紀末から７世紀前葉）である。一方で、116や123は７世紀後半まで下る可能性のある資料であり、暗文を施す土師器も同時期まで下るものと考えられる。

註　伊藤田窯跡群内で類例を探せば草場窯跡灰原出土の232が最も近いが、脚部が剥離したと解釈して高坏に分類されている。実見したところ、確かに剥離痕が確認出来る。しかし、綺麗に剥離しており、高台（坏底部の剥離痕の直径が大きく、脚とするよりも高台と考え、高台付坏に分類した方が良いかもしれない）がはかれた後も使用したことが想定できる。



第34図　1次SK1出土遺物(1)



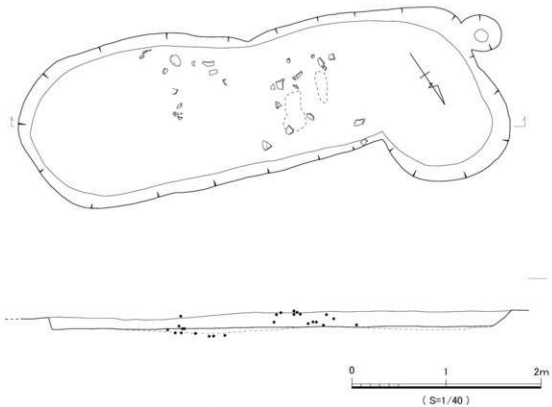
第35図　1次SK1出土遺物(2)

SK2（第36図）

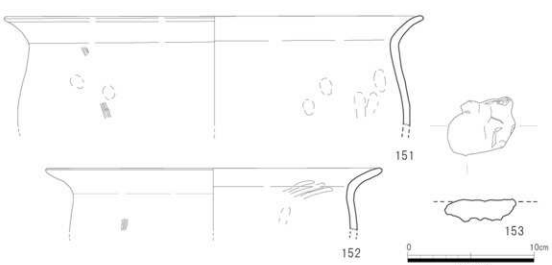
調査区中央やや西寄りで確認された土坑で、SH5を切っている。長軸5.0m、短軸1.2mの長楕円形を呈し、西端では別のピットと切り合い関係がある。残存する深さは0.15mで、遺物は中央付近に集中する。

図示できる資料は３点である。第37図**151**と**152**は土師器の甕である。緩やかに外反しながら開く口縁部。**153**は焼けたスサ入りの粘土塊である。片側は面をなすので壁土であろうか。

時期は土師器のみでは明確でないが、７世紀代のものであろうか。



第36図　１次SK2



第37図　１次SK2出土遺物

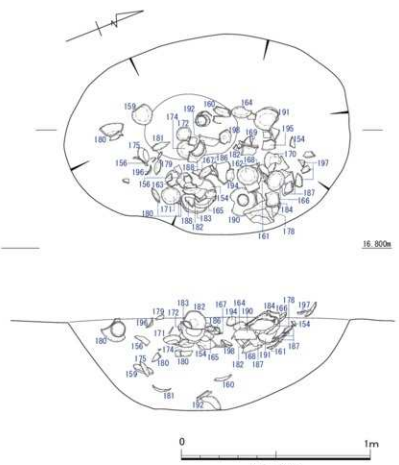
SK3（第38図）

調査区の最西端にある土坑である。長軸1.5m、短軸1.05mの楕円形を呈し、残存する深さは0.5mである。遺物は底部に近いものもあるが、多くは上層からまとまって出土している。

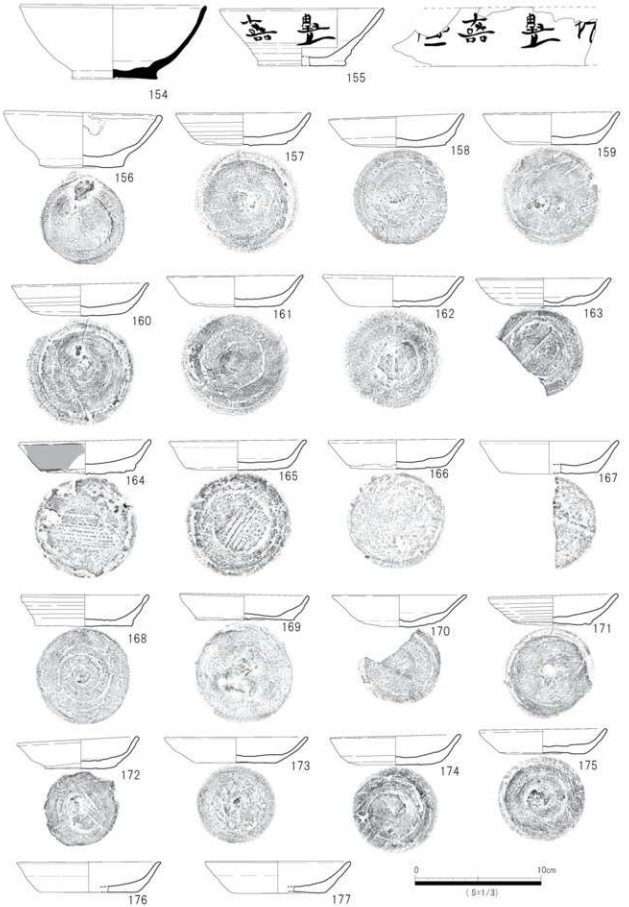
第39図154から第40図198までが出土遺物である。須恵器は１点である。154は円盤高台状の底部で、ヘラ切り離しの後に平滑に調整している。底部内面は一段窪む。色調は明るい灰色で、胎土に１～２㎜の黒色の礫が少し混じる。155と156は円盤状高台の土師器坏。平底の底部から直線的に体部が開く。口径は155が13.0㎝、156が12.6㎝である。底部はヘラ切り離しの後、ナデ調整を施す。155は体部外面に墨書がある。４文字分確認出来る。「□□□□」となる。155の出土位置は図中で明示できないが、160の坏と一括で取り上げているので、出土層位は中層ということになる。157から178は浅い皿状の坏。口径は9.2～11.6㎝で、器高は1.9～2.6㎝である。底部は大部分が回転ヘラ切り離しのままであるが、その後に部分的にナデ調整をしているものがある。179は口径9.6㎝で、器高も1.5㎝と浅く、小皿として扱う。底部はヘラ切り離しのままである。180から186は椀で、高台が残るものは、長く伸びるもの（180、181、182）と短いもの（184）がある。内外面ともナデ調整で、ミガキは見られない。187は甑で、口縁部が内傾して開く。

188から198は黒色土器A類椀である。口径は11.2～16.5㎝とバラつきがある。いずれも内外面ともミガキが施されている。高台はやや伸びて外側に踏ん張り、そこから外側に張り出さずに丸みを持って内湾して立ち上がる。端部で小さく外反するものもある。188と189は明確に黒くなっていないが、調整や器形からここに置いておく。

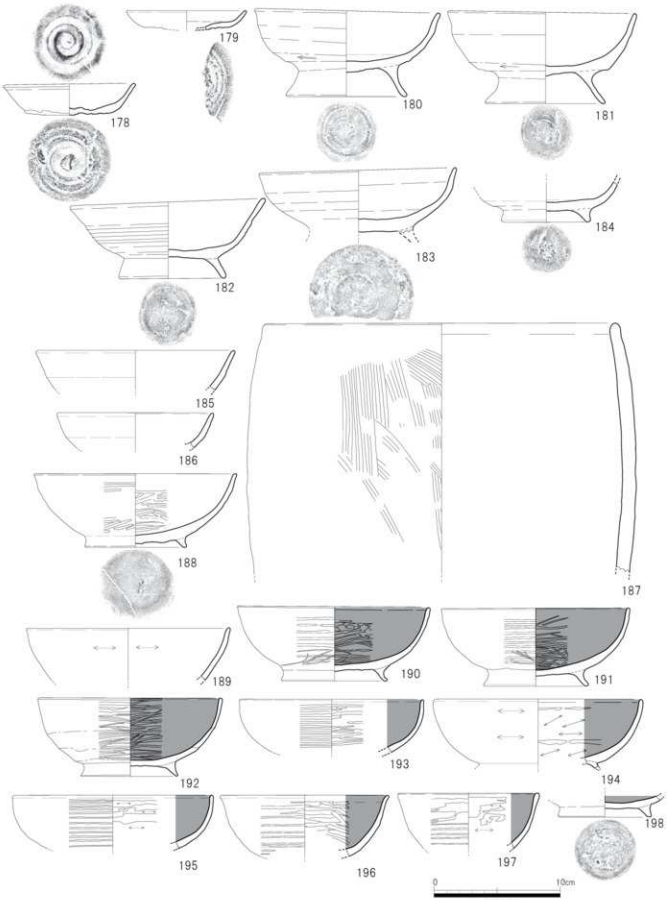
以上の遺物群を見ると、土師器坏が口径を小さくする一方で、155や156のような新しいタイプの坏が出現する。さらに、179のような小皿に分類できるものも含まれるなど、土器相に新しい要素が伴うようになる。須恵器が基本的に伴わないので、時期決定が難しいが、後述するように三口７期（10世紀前半代）に位置付けておきたい。



第38図　１次SK3



第39図　1次SK3出土遺物(1)



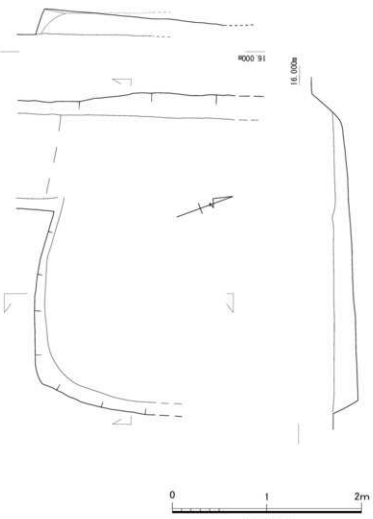
第40図　1次SK3出土遺物(2)

SK4（第41図）

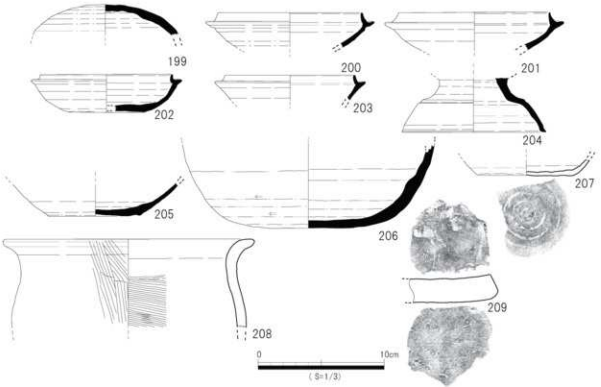
調査区の中央付近で確認された土坑である。西側はSD1に切られ、北側は調査区外のため全形は不明である。コーナーは明確にあるので、方形あるいは長方形の土坑、または竪穴建物の一部の可能性もある。

図示できる遺物は11点である。第42図199から206は須恵器である。199は坏H蓋で、天井部には回転ヘラ削りが施される。200から203は坏Hで、口径は12.0 ～ 14.4cmである。200は下半に回転ヘラ切りがあり、202はナデ調整されている。204は壺の脚部。一度外側に張り出し、やや内湾気味に開く。205は平底底部から大きく直線的に開く体部で、明黄褐色を呈す。206は鉢であろうか。207は土師器坏で、底部はヘラ切り離しのままである。208は土師器甕で、口縁部は小さく強く外反する。209は明黄褐色に焼けた古代瓦で、内外面とも撫でられており、タタキ痕などはない。

以上から、207、209は後世の混入と考えられ、土坑の時期は瓦ヶ迫窯跡の時期、すなわち三口Ⅰ期（6世紀末から7世紀前葉）に位置付けられる。



第41図　1次SK4

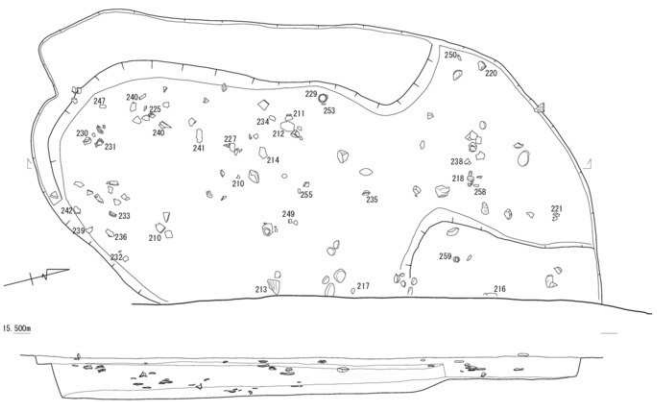


第42図　1次SK4出土遺物

SK5（第43図）

調査区中央付近で確認された土坑で、南側が調査区外となり、全形は不明である。長軸5.7mの不整楕円形を呈しており、幾つかの土坑が切り合っている可能性もある。西側と北側には一段高い部分がある。

第44図210から第45図260までが出土遺物である。210から213は須恵器。210は高台が付く埦で、高台は比較的真っすぐに伸び、体部は丸みを持って立ち上がり、先端近くで外反する。底部は回転ヘラ切りの後、ナデ調整か。色調は



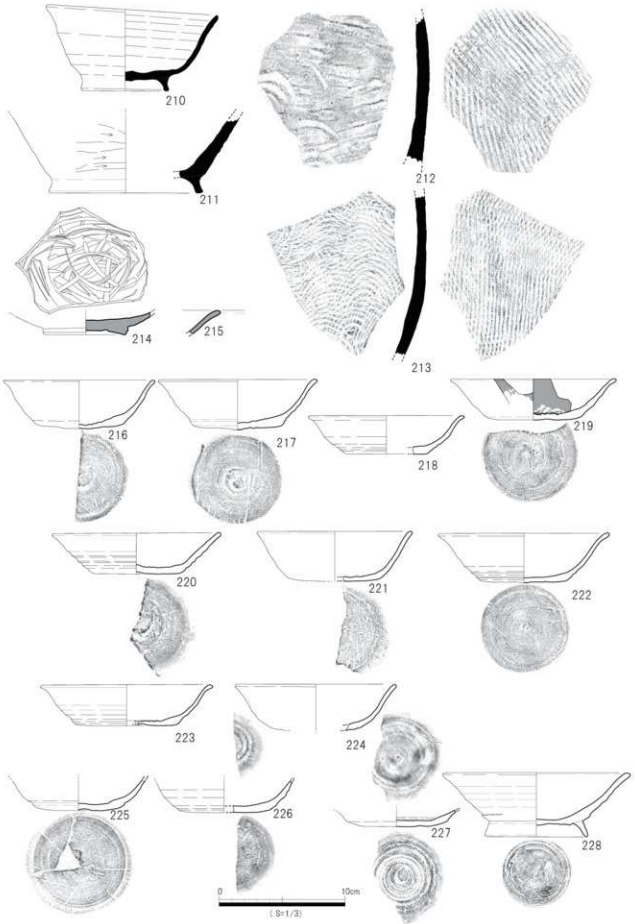
第43図　1次SK5

やや明るい灰色。211は壺の底部。212と213は甕である。214と215は緑釉陶器である。214は皿で、淡い鶯色を呈し、削りだしの蛇の目高台である。焼きは硬質で、胎土は灰色からやや明黄褐色を呈する。見込みは幅5㎜程度の縦横に施されたミガキ痕が残る。215は皿の口縁部で、口縁端部で小さく外反する。色調は明るい鶯色。胎土は明黄褐色の土師質で、軟質である。214は畿内産、215は防長産か。

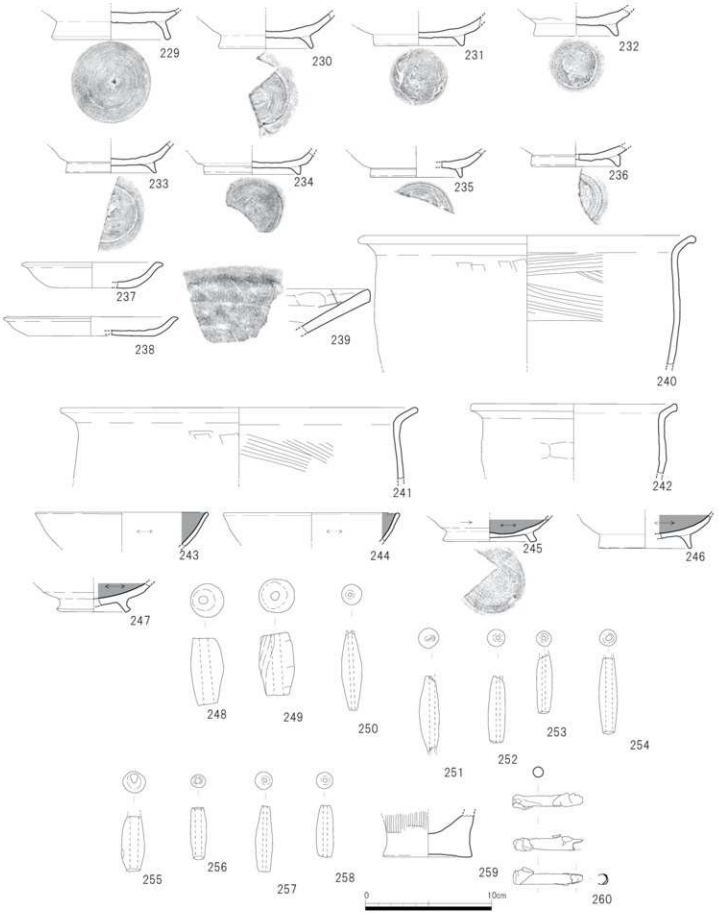
216から242は土師器である。216から227は坏である。口径は11.4 ～ 13.6㎝で、高さは3.0 ～ 4.0㎝である。底部は全て回転ヘラ切り離しで、一部部分的にナデ調整を行うものがあり、板状圧痕を持つものもある。形態的には、平底から直線的に開き、先端部で小さく外反するものがほとんどである。219は黒漆が内面全面に付着し、一部外面にも付着する。228から236は埦である。口縁部まで残る228を見ると、体部は直線的に伸びて、先端部で小さく外反する。脚部は228、229はやや長いが、総じて高台は低い。底部はすべて回転ヘラ切り離しで、高台部との接合時に横ナデがなされている。233は高台に近い体部外面にヘラ削りが認められるが、他は明確な痕跡が認められない。237と238は皿である。復元口径は237が11.2㎝、228が13.8㎝である。いずれもミガキは認められず、ナデ調整である。239は何らかの大型製品の口縁部。直線的に大きく開く。内面に線刻（ヘラ記号）がある。240から242は甕である。胴部はあまり張らないという共通点がある。

243から247は黒色土器A類埦である。高台は短く、体部は丸みを持って開き、先端部でやや外反する。243と244、246は小破片ではあるが、外面にミガキ痕が認められない。245は下端部に回転ヘラ削りが施される。248から258は土錘である。259は弥生時代中期の甕底部である。260は青銅製品で、片側（図の左側）は潰れた状態で、反対側は折れており、そこでは厚さ0.5㎜ほどの筒状となっている。

以上から、一部を除いて一括資料と考えても問題ないと考えられる。後述するように、土師器などの形態や緑釉の時期などから、三口6期（9世紀後半）と考えられる。



第44図　1次SK5出土遺物(1)



第45図　1次SK5出土遺物(2)

SK6（第46図）

調査区の中央付近で確認された土坑で、北側はSK7に切られている。全体的に不整形であるが、東西は最大で3.8m、南北は5.3m以上となる。残存する深さは0.2mである。

図示できる出土遺物は３点である。第47図**261**と**262**は土師器埦である。**261**の高台部は僅かに長い。**263**は黒色土器A類埦である。外面下端にはヘラ削り痕が認められる。

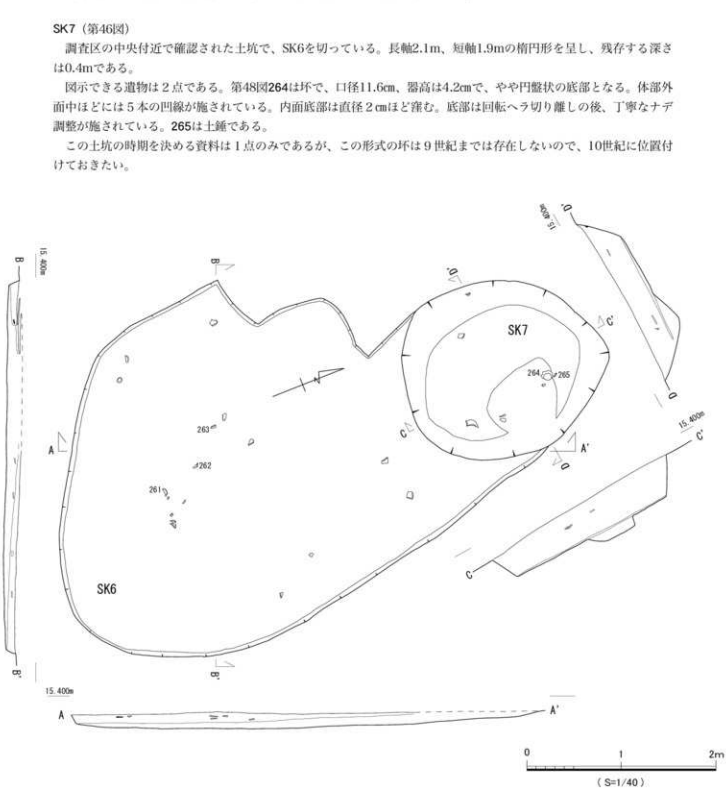
遺物が少なく時期の想定は難しいが、SK5と同時期の三口５期と考えられる。

SK7（第46図）

調査区の中央付近で確認された土坑で、SK6を切っている。長軸2.1m、短軸1.9mの楕円形を呈し、残存する深さは0.4mである。

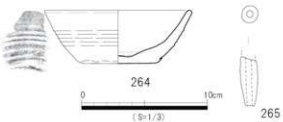
図示できる遺物は２点である。第48図**264**は坏で、口径11.6cm、器高は4.2cmで、やや円盤状の底部となる。体部外面中ほどには５本の凹線が施されている。内面底部は直径２cmほど窪む。底部は回転ヘラ切り離しの後、丁寧なナデ調整が施されている。**265**は土錘である。

この土坑の時期を決める資料は１点のみであるが、この形式の坏は９世紀までは存在しないので、10世紀に位置付けておきたい。



第46図　１次SK6,SK7

第47図　1次SK6出土遺物

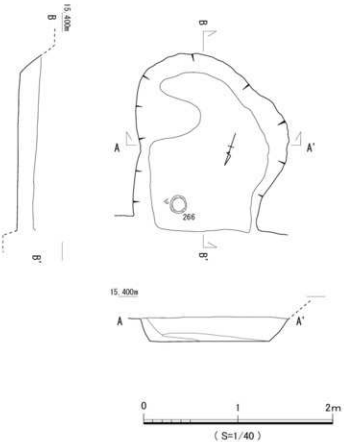


第48図　1次SK7出土遺物

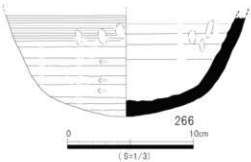
SK8（第49図）

調査区中央やや東寄りで確認された土坑で、SD4を切っている。SD3との関係は不明である。南北1.9m+α、東西最大1.5m、残存する深さは0.25mである。

図示できる遺物は1点である。第50図266は須恵器鉢で、外面下部はヘラ削り、上部はカキ目となる。



第49図　1次SK8



第50図　1次SK8出土遺物

（4）溝

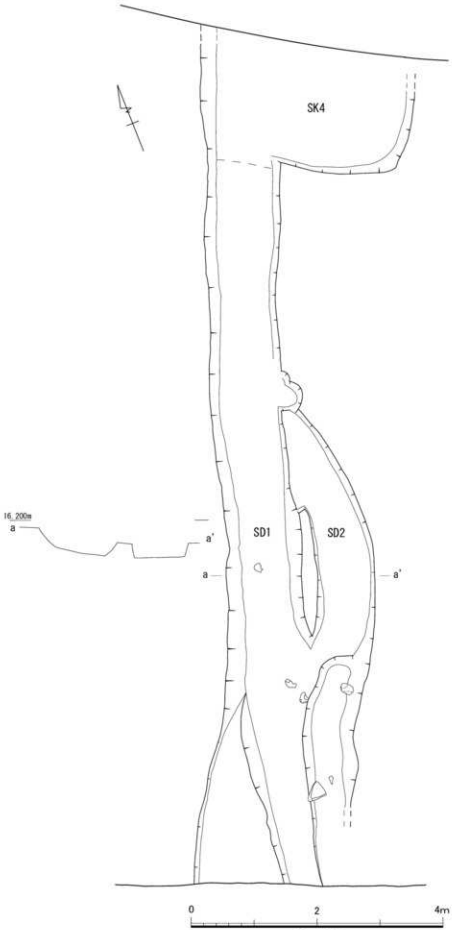
SD1（第51図）

調査区の中央やや西寄りで検出された溝である。SD2とSK4を切っている。幅は1.2mほどで、深さは0.3～0.4mである。SD1は、最初にあったSD2を直線的に掘り直したものと考えられる。

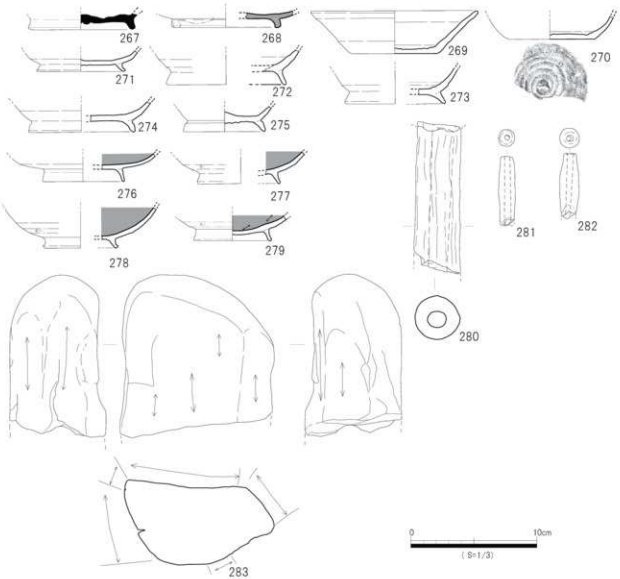
第52図**267**から**283**が出土遺物である。**267**は須恵器坏Bで、底部は回転ヘラ切り離しのまま。高台は安定している。**268**は緑釉陶器の皿で、内側を抉るようなシャープな高台が付く。釉薬は皿部の全面には掛かっていない。高台内部は露胎となる。皿部には重ね焼きの痕跡が輪状に残る。釉色は薄い鶯色で、胎土は緻密でやや橙色がかった灰色をしており、硬質である。底部には糸切りの痕跡は見られない。**269**と**270**は土師器坏。**269**は口径が13.2cm、器高が3.4cmある。底部は回転ヘラ切りのちナデ。**270**の底部も回転ヘラ切り離しで、幅の狭い痕跡が渦巻き状に残る。**271**から**275**は土師器埦である。**272**の高台はやや伸びるが、他はいずれもあまり伸びない高台を持つ。体部の状況は分からないが、直線的に開くようである。**276**から**279**は黒色土器A類埦である。やや高い高台部に、丸みを持ちながら開く体部になると考えられる。

280は中空になる把手。図面の上側が鍋などに接合する部分になる。法垣遺跡SD42（『法垣遺跡3次・4次調査』中津市教育委員会　2018）などでも出土している。**281**と**282**は土師質の土錘。**283**は砂岩製の砥石である。

以上の出土遺物から、このSD1は後述する三口5期に位置付けられる。



第51図　1次SD1,SD2



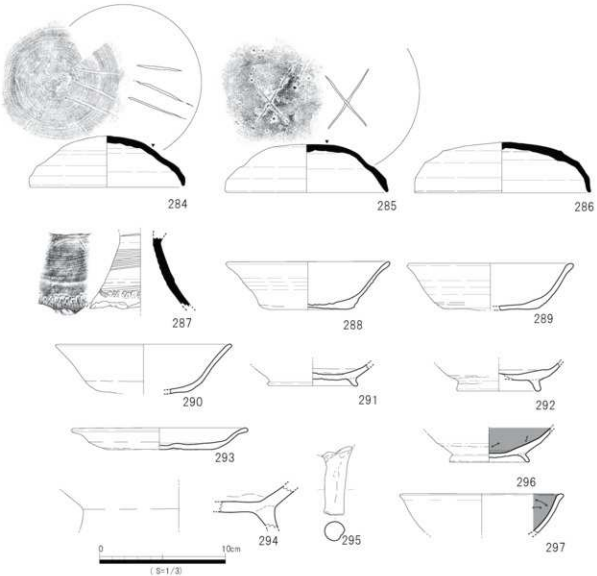
第52図　1次SD1出土遺物

SD2（第51図）

SD1に切られるように検出された溝である。幅は0.8～0.9mで、深さは0.35mである。

第53図**284**から**297**が出土遺物である。**284**から**286**は須恵器坏Hの蓋である。口径は12.4～14.0cmで、天井部はいずれも回転ヘラ削りが施されている。**284**には三本線、**285**には×の窯印がある。**287**は須恵器高坏の脚部。上部にはカキ目を、下部には細かな波状文を描く。**288**から**290**は土師器坏で、口径は12.8～13.8cmで器高は3.7～3.9cmである。底部はいずれも回転ヘラ切り離しで、部分的にナデ調整されている。**291**と**292**は土師器埦である。いずれもあまり高くない高台を持ち、底部は回転ヘラ切り離しである。体部下端はヘラ削りの痕跡を残す。**293**は土師器皿である。底部は回転ヘラ切り離しで、皿部の内外面にミガキはなく、ナデ調整である。**294**は土師質の壺の底部か。脚部に窓、あるいは抉りが入る。**295**は中実の土師質の脚部である。**296**と**297**は黒色土器A類埦である。

以上の出土遺物を見ると、須恵器は伊藤田窯跡群の瓦ヶ迫窯跡出土資料に並行する時期（6世紀末から7世紀前半）であるが、土師器は9世紀代の特徴を持つ。よってこのSD2は後述の三口5期とすることができるであろう。



第53図　1次SD2出土遺物

SD3（第54図）

調査区の中央やや東寄りで確認された溝で、SD4に並行する。幅は0.8～1.0mで、深さは0.45mである。

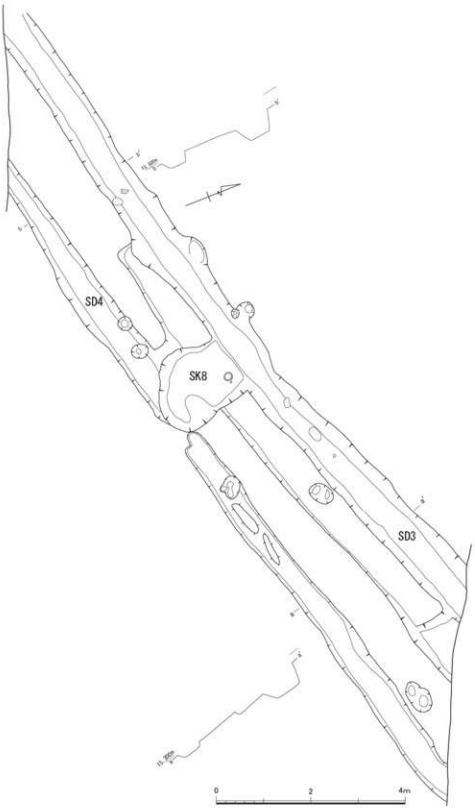
図示できる出土遺物は2点である。いずれも須恵器坏Hで、第55図**298**は口径14.0cmで、ヘラ削りの痕跡が残るが、**299**は10.0cmで、ナデ調整されている。

出土遺物が2点なのでSD3の時期を決めがたいが、出土遺物で見る限り、伊藤田窯跡群の瓦ヶ迫窯跡に並行する時期と考えられる。

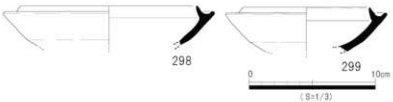
SD4（第54図）

調査区の中央やや東寄りで確認された溝で、SD3に並行する。SK8に切られている。幅は0.5～0.75mで、深さは0.2mである。

出土遺物はなく、時期は不明である。



第54図　1次SD3,SD4

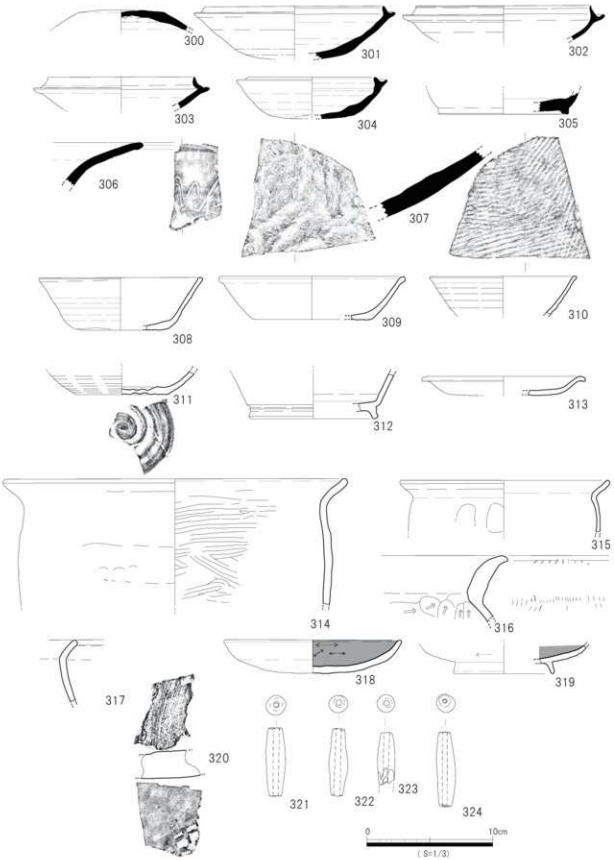


第55図　1次SD3出土遺物

（5）ピット出土遺物

ここでは、建物を構成しないピットから出土した遺物を説明する。第56図300から307は須恵器である。300は坏Hの蓋で、天井部はナデ調整されている。301から304は坏Hである。301は復元口径14.2cmと大きく、底部は回転ヘラ削りがなされている。304は復元口径10.0cmで、底部は手持ちヘラ削りがなされる。305は坏Bで、短い高台から張り出さずに体部が立ち上がる。306は大きくラッパ状に開く甕の口縁部で、ヘラ描きの波状文が描かれている。307は甕の胴部。

308から317は土師器である。308から311は坏。308の底部は回転ヘラ切り離しで、体部下半は強く水引きされて、凹線状となる。309は底部回転ヘラ切り離しで、口縁端部で小さく外反する。310は器壁が薄く、赤色が強い。外面には凹線状となる水引き痕が残る。311は底部には凹線状の渦文が明瞭に残る。粘土紐を巻き上げて成形したものかもしれない。同様の例は一括資料で扱った第61図431にも認められる。312は椀で、しっかりした高台から、あまり張り出さずに体部が直線的に伸びる。内外面ともナデ調整である。313は皿で、底部も含め内外面ともナデ調整である。314から317は甕。316は口縁部が肥厚し、外反して開く。314、315は弥生土器かもしれない。318と319は黒色土器A類。318は今回唯一の出土である皿である。内面はミガキが施されているが、外面はナデ調整である。全体的に器壁が厚く、内面も緩やかな凹凸があるなど、シャープさに欠ける。外面はやや白色が強い明黄白色である。319は椀で、内面は丁寧なミガキ、外面は残っている部分ではヘラ削りである。320は古代瓦で、凸面格子タタキ、凹面には布目痕が残る。321から324は土師質の土錘である。



第56図　1次ピット出土遺物

（6）包含層出土遺物

第57図325から第60図419は包含層出土遺物である。中でも325から360は遺物集中箇所からの出土であり、包含層3として取り上げられたものである。黒色土中に掘られたため確認できなかった遺構出土の可能性が高く、一括性がある。

325は須恵器甕である。焼成不良で明黄褐色から赤褐色に発色している。326は越州窯青磁の大碗で、山本分類大碗Ⅰ5（山本信夫「大宰府出土施釉陶器の編年について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第82集　1999）である。平底が少し外に張り出して、そこから立ち上がり、内湾気味に開く体部となる。見込みには楕円形の目跡がある。底部から体部の下半は露胎である。327から343は土師器坏である。口径は11.8～13.8cmと幅があるが、多くは12.2cmから13.0cmに納まる。体部はほとんどが先端部で小さく外反する。直線的に開くものの方が少ない。344から346は埦である。344は外側に踏ん張る高台に、やや内湾気味に立ち上がり、先端部で小さく外反する体部となる。底部は回転ヘラ切り離しで、外面体部最下端はヘラ削り、他は横ナデ、内面はかなり平滑にナデ調整されている。345は内湾気味の高台に、内湾して開く体部となる。体部内外面、底部外面ともナデ調整である。346は「ハ」字状に開く高台で、体部は横に張り出さずに直線的に開くものとなる。底部は回転ヘラ切り離しで、体部内外面ともナデ調整である。347と348は皿。347は螺旋状に粘土紐痕があるので、粘土巻き上げで作ったものか。口縁部端部で小さく外反する。348は口縁部が内湾し、外反しない。349と350は鉢で、349は口縁部を小さく折り、350は緩やかに外反させる。349と同様の鉢は、8世紀中頃から後半の諸田南遺跡南方地区SH-1でも出土している。351と352は甕の口縁部。353から355は黒色土器A類埦である。口縁端部でやや外反する。353と354は、内面はヘラミガキが施され、外面は体部下端がヘラ削り、上部が横ナデである。355も外面は横ナデ、内面はヘラミガキが施されている。356から358は土師質の土錘。359は鞴の羽口で、図の右側が叺内に差し込まれた部分になる。360は焼けた粘土塊で、壁土であろうか。

この包含層3出土資料は、後述の三口5期に位置付けることができる。

361から419はその他の包含層出土遺物で、一括性はない。361から373は須恵器である。361は坏Bの蓋で、天井部は回転ヘラ削りがなされている。362は坏Hの蓋で、天井部はナデ調整がなされている。363も坏Hの蓋で、天井部は手持ちヘラ調整がなされている。364と365は坏B で、高台部からそのまま坏部が立ち上がる。366は坏で、口径は13.8cm、底部は回転ヘラ切り離しである。367は壺の口縁部で、端部で外反した後、小さく折れて上方に立ち上がる。368は廻の体部。369から373は甕。370は細く直立する口縁部に扁平な突帯を廻らせる。焼成、色調は325に類似する。

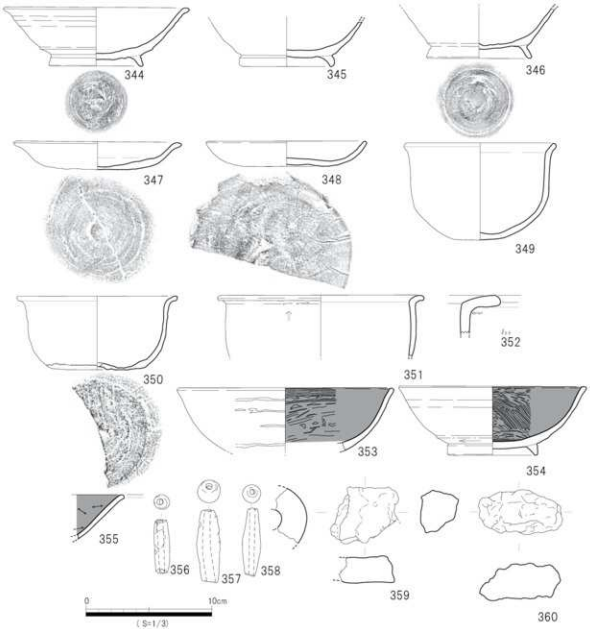
374から379は輸入陶磁器である。374から378は越州窯青磁碗。377は大型のもので、輪高台である。内外面とも全面施釉される。見込みに目跡がある。378は蛇の目高台で、全面施釉されている。379は玉縁状口縁の白磁碗。

380から402は土師器。380から388は坏である。口縁部が残っているものは、端部で小さく外反する。底部の状況がわかるものでは、回転ヘラ切り離しのままのもの（381、383）と、粘土紐を4～5巻きして底部を作るもの（385、387）がある。389から395は埦である。389と390はやや高台が高い。396は皿である。内外面ともナデ調整、底部は回転ヘラ切りと思われるが、ナデ調整されているため不明確である。口縁部は小さく外反する。397は鉢である。口縁部が小さく折れて開く。398は何らかの注口部。七角形にヘラで面取りされている。399は壺の底部か。400と401は甕である。402は甑の把手である。

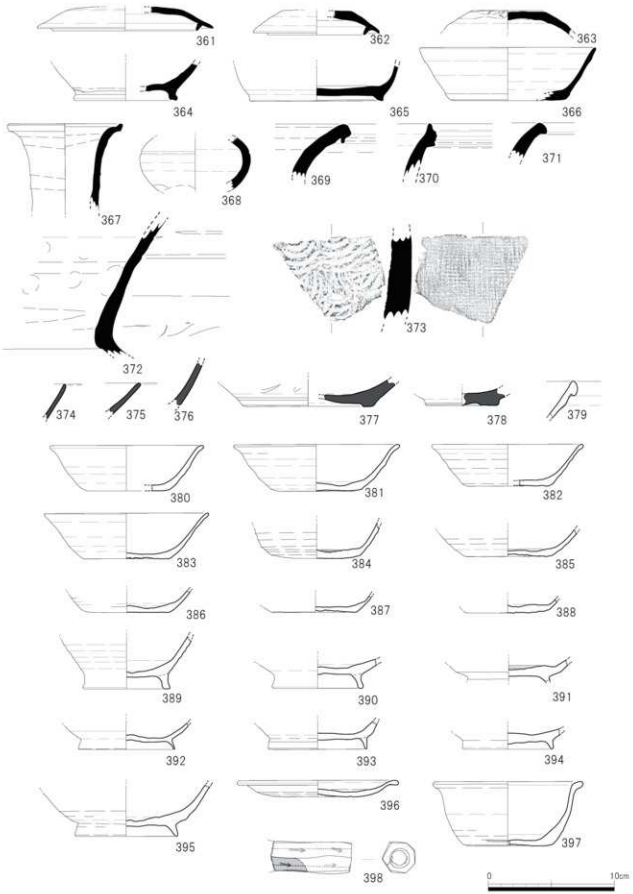
403から405は黒色土器A類である。403と404は埦、405は皿か。高台に近い体部下端は回転ヘラ削りがなされている。外面ナデ、内面はよく磨かれている。

406から411は土師質の土錘。412から414は古代瓦。412と413は丸瓦で、凸面はナデ調整。414は平瓦で、凸面は縄目タタキ、凹面には布目痕がある。415は鉄製鉈。416から418は鉄滓で、416は椀形滓、417には木炭痕がある。419は硬質凝灰岩製の砥石である。

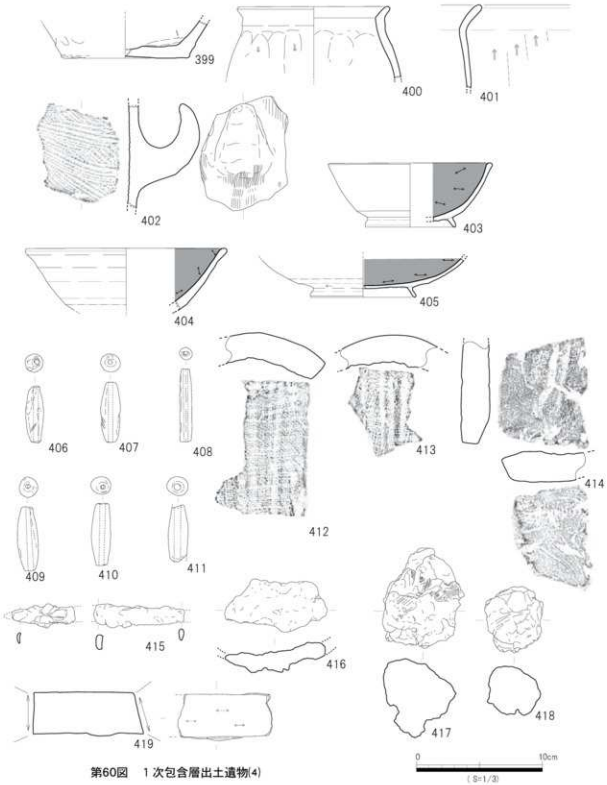
第57図　1次包含層出土遺物(1)



第58図　1次包含層出土遺物(2)



第59図　1次包含層出土遺物(3)

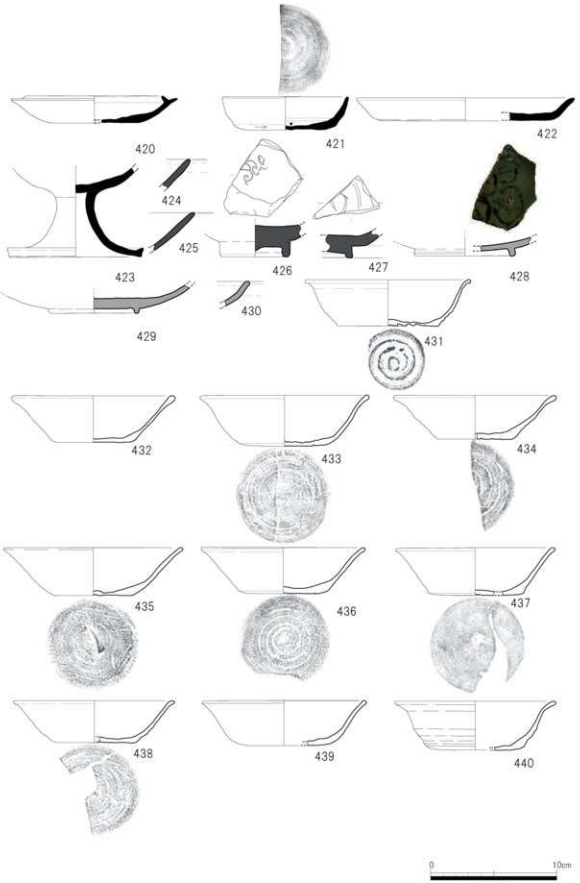


第60図　1次包含層出土遺物(4)

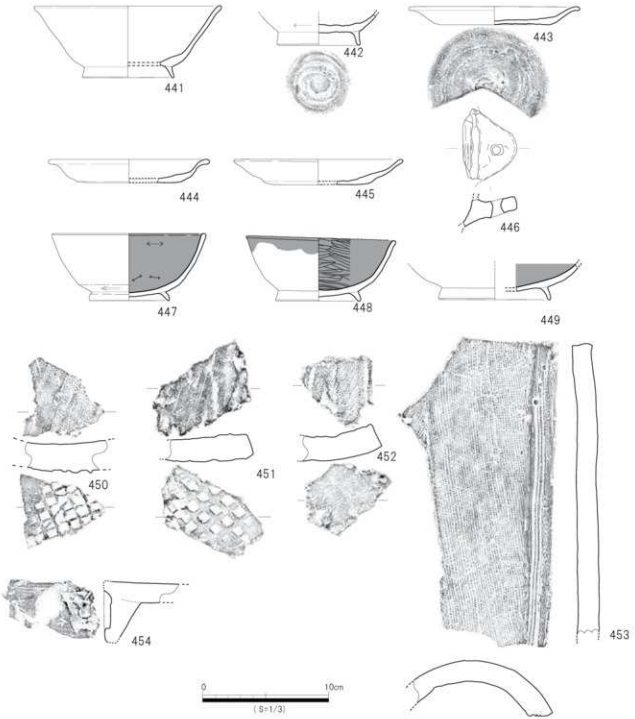
（7）その他の出土遺物

ここでは、表採や試掘調査時に出土したものを扱う。第61図420から423は須恵器である。420は坏Hで、底部はナデ調整されている。421は坏Gで、平底から内湾して立ち上がる。内面にヘラ記号がある。422は皿で外反しながら開く。423は高坏で、脚裾部が小さく上方に折れる。424と425は越州窯青磁碗、426と427は龍泉窯青磁碗である。428から430は緑釉陶器である。428は見込みに濃い緑で桐の葉のような文様を描く。高台部も含めて全面に施釉されている。胎土は白黄褐色で、やや硬質である。429は皿で、内外面とも高台部を除き全面に施釉されている。胎土は明黄褐色で、軟質である。430は皿で、体部が中ほどで折れて小さく外反する。胎土はやや黄色みを帯びた明灰色で、やや硬質である。

第61図431から第62図446は土師器である。431から440は坏、441と442は埦、443から445は皿である。446は把手で、水平方向に付く。447から449は黒色土器A類埦である。450から453は古代瓦、454は近世瓦である。瓦当面は剥落しており、文様は不明である。



第61図　1次調査その他の出土遺物(1)



第62図　１次調査その他の出土遺物(2)

第３節　小結

三口遺跡１次調査区の土層断面図はないが、隣接する６次調査区のものを見ると（第５図）、現表土下にクロボク層とその前後の漸移層が厚く堆積していることがわかる。その厚さは約60cmあり、古墳時代の遺構はこのクロボク層を掘りこむことになる。当然、後の古代の遺構も同様であり、クロボク層の下にある暗茶褐色土層まで届かない遺構があれば、遺構検出に困難をきたすことになる。特に、古墳時代の竪穴建物跡に重なるように古代の遺構があり、それが暗茶褐色土、あるいは黄茶褐色土まで届かなければ、検出はより困難になると予想される。三口遺跡１次調査は、中津市において発掘調査が本格化し始めた1993年の調査であり、このことが十分に認識できていなかったことも、遺構一括遺物の扱いを難しくした要因の一つである。例えばSH5、SH6などは、おそらく７世紀後半の竪穴建物が廃絶した後にクロボク由来の黒色土が竪穴内に堆積し、そこに９世紀後半になって、何らかの浅い遺構（土坑など）が掘られたが、遺構の検出が困難だったため、竪穴建物の一括資料として取り上げられたと考えられる。新しい時期の資料が時期的一括性を保っていることがそのことを裏付ける。包含層３として取り上げられた資料にも時期的一括性が認められることも、同様に理解できる。よって、竪穴建物出土の新相の資料群や包含層３資料も、遺構出土一括資料に準じた扱いが可能となる。

今回の調査区は、幅約10 ～ 15m、長さ約120mの細長い調査区のため、広がりを把握することは難しいが、おおよそ調査区の西側に竪穴建物が集中し、東側には掘立柱建物が集中する傾向は掴むことができる。そして、前者が曖ね６世紀後半から７世紀後半、後者が９世紀前半から10世紀前半という時期を与えることが可能と考える。ただし、掘立柱建物の多くは時期を示す遺物が柱穴から出土しておらず、配置や主軸方位からの推測にとどまる。

また、１次調査区の西側にある６次調査区（令和３年度調査）の状況を見ると（第63図）、１次調査とは主軸方位の異なる掘立柱建物群があり、これらは６世紀後半と考えられている。竪穴建物は１棟確認され、同じく６世紀後半代である。そうすると、１次調査区の竪穴建物群とは僅かに重なる可能性もあるが、１次調査区の竪穴建物群が廃出ということになる。６次調査区は、複数の２間×２間の小型倉庫と３間×２間あるいは４間×２間の掘立柱建物で構成され、区画を示すと考えられる溝も確認されるなど、一般集落ではない可能性があるが、その要素は１次調査区には及んでいないことになる。

逆に９世紀前半から10世紀前半の１次調査区の在り方が６次調査区にはほとんど及んでいない。６次調査区内ではわずかに建物を構成しない柱穴から出土した９世紀代の土師器埦あるだけである。これから考えられることは、１次調査区５６次調査区も南北方向への遺構の広がりは分からないものの、東西方向への広がりはあまり大きくないという事である。１次調査区の東側にある掘立柱建物群も、調査区の途切れたところで一段の段差が付くので、東側への展開は想定できない（もちろん、段丘崖の形成が遺構形成以後であれば別だが）。

そこで、周辺の調査区を見ると（第２図）、１次調査区の北側300mほどにある３次調査区では、トレンチ調査のため遺構の展開は分からないが、遺物としては１次調査区と重なる９世紀前半のものが出土している。ここまで１次調査区の遺構群が直接及ぶことは考え難いので、微高地の平坦面上に遺構群が点在していたと理解しておきたい。

この三口遺跡の立地は、微高地という自然条件の他に、道の存在が大きいと考えられる。１次調査区と２次調査区の間を南北に貫く道を更に北に延ばせば、官道である勅使街道と直交する。その交差点を「湯屋の辻」といい、江戸期の道標が立つ。南に延ばすと、山国川沿いに日田に向かう道となる。つまり、江戸期にはこの道が天領日田（永山布政所）と中津を結ぶ道（永山布政所路）であったのである（中津城下町の北側の山国川河口には、天領の年貢を津出しするための港があり、そこに「日田蔵」と呼ばれる蔵が建っていた）。この重要な道が中世、古代と遡るのかどうかについては資料を欠く。第73図のように、この道は古代寺院である相原廃寺跡を回り込むが、その前後で鍵手状に道が折れている。さらに、鶴市神社のある台地突端部を登って台地に出ると、そこからはほぼ直線の道が５kmほど続き（江戸期には台地上を進まず、すぐに山国川沿いの沖積地に降りる）、その先には古代寺院の塔ノ熊廃寺と瓦を焼いた塔ノ熊窯跡がある。さらに、塔ノ熊の場所から犬丸川本流を外れて長谷の谷を遡ると、古代の青銅仏を持つ長谷寺に至る。つまり、犬丸川流域の谷部を遡ることになる。その先は「桜峠」を越えて耶馬渓の羅漢寺に至り、さらに南下すると玖珠に至るというルートである（山国川の幾多の難所を避け、筑後川上流部に至るには最も最短のルートである）。

もしそのように考えられるとすると、三口遺跡の立地する相原地区は、東西に延びる官道（豊前道）と南北に延びる玖珠ルートの交差する場所という事になる。ここに、６世紀後半代の掘立柱建物群（６次調査区）や９世紀後半から10世紀前半の掘立柱建物群が展開し、その間の６世紀後半から７世紀後半には竪穴建物群が展開する。調査箇所の問題もあると思われるが、至近の長者屋敷官衙遺跡の主体をなす８世紀から９世紀初頭が抜けているのも、何らかの意味があるものと考えられる。

第63図　1次調査区と6次調査区の位置関係

第４章　２次調査の成果

第１節　調査概要

幅約3.5m、長さ54mの道路部分を調査した。調査の結果、竪穴建物２基、掘立柱建物１基、溝１条などを確認した。

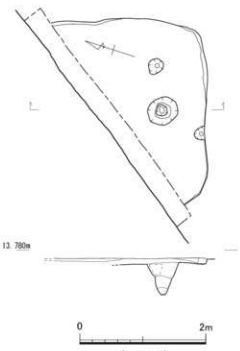
第２節　遺構と遺物

（１）竪穴建物

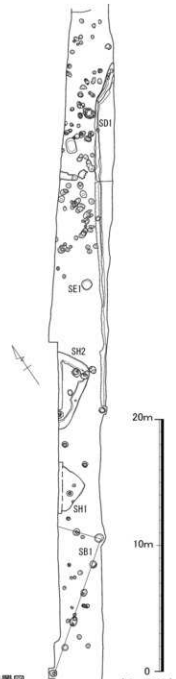
SH1（第65図）

調査区の南寄りで確認された竪穴建物で、西側半分は調査区外となる。東西は2.8m、深さは0.15mである。この建物に伴うと考えられる柱穴は１本あり、調査区外にもう１本ある２本主柱の建物と考えられる。

図示できる遺物は無かった。



第65図　２次SH1



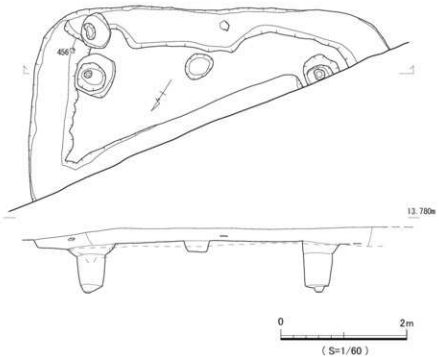
第64図
三口遺跡２次調査遺構配置図

SH2（第66図）

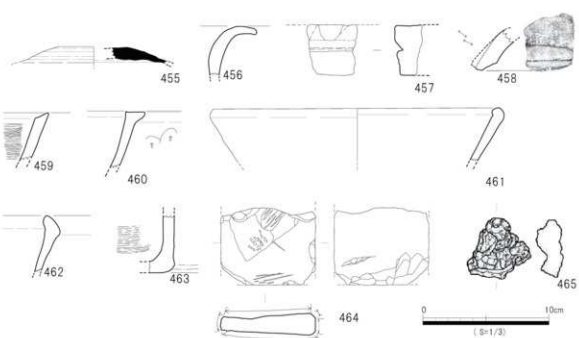
調査区中央付近で確認された竪穴建物である。３分の２ほどが調査区外となり、全形は窺い知れない。東西は5.5m、深さは0.23mである。この建物に伴うと考えられる柱穴は２カ所あり、４本主柱をなすものと考えられる。床面は、壁際が約0.5mの幅で数cm低くなっている。

出土遺物は第67図455から465である。455は須恵器坏蓋で、天井部は平坦をなす。摘みの有無は不明である。456は土師器の甕で、口縁部は大きく外反する。457と458は古代瓦である。457は軒平瓦で中央部に横方向の沈線が伸びる。458は丸瓦で、内面には布目痕がある。外面は大きく摩耗しており、何らかの工作で二次利用したものと思われる。459から463は中世の瓦質土器である。464は赤間石の砥石で表裏、側面とも使用されている。465は部分的に僅かに磁石に反応する含鉄の鉄滓である。

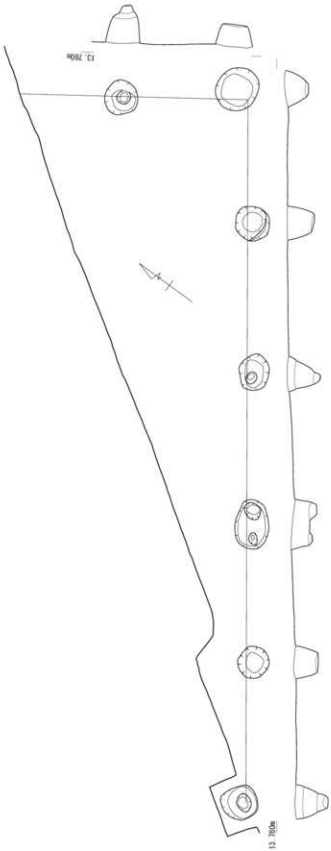
一括で取り上げた出土遺物には中世の遺物が含まれるが、７世紀後半から８世紀前半の遺物があるので、竪穴建物の時期は７世紀後半から８世紀前半としておきたい。



第66図　2次SH2



第67図　2次SH2出土遺物



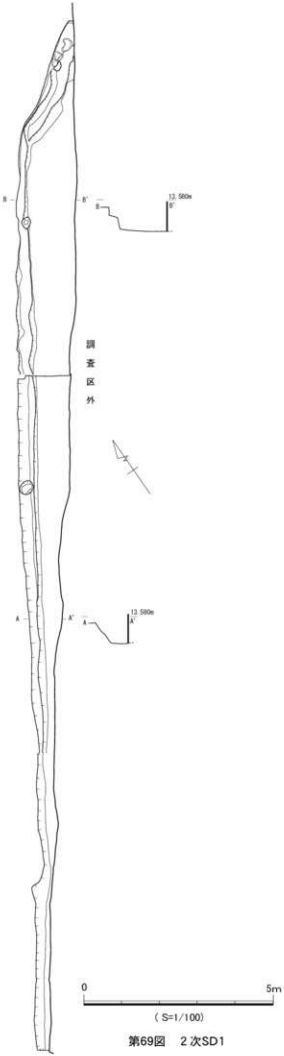
第68図　2次SB1

（2）掘立柱建物

SB1（第68図）

調査区の南端で確認された掘立柱建物である。北西側が調査区外となっているため、確認された範囲では桁行は５間以上、梁間は２間以上となる。最小で考えると５間×２間の側柱建物ということになる。

柱穴からの遺物の出土は無く、時期は不明である。



第69図　2次SD1

（3）溝

SD1（第69図）

細長い調査区の東端に沿うように伸びる溝で、東側の立ち上がりが調査区外となっているため、溝の幅は分からない。延長で27.1m確認でき、北東端でやや東に折れている。検出面からは0.5～0.6mほどの深さとなる。

出土遺物は第70図**466**から**470**である。**466**は須恵器の高坏で、低脚となるものである。**467**は内面に灰釉、外面（脚部）には茶色の釉薬がかかる陶製の鉢、あるいは碗である。**468**は内黒土器A類の埦である。内面は良く磨かれている。外面はナデ調整。**469**は口縁部が細りながら外反して開く土師器の甕で、内外面ともヘラ削りされている。**470**は古代瓦で、内面にはわずかに布目の痕跡がある。

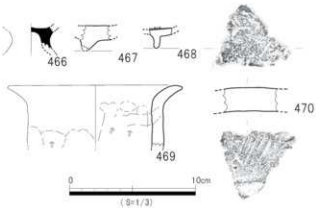
以上の遺物の内、最も新しいのは**467**の陶器であり、SD1の時期は中世と考えられる。

（4）その他の出土遺物

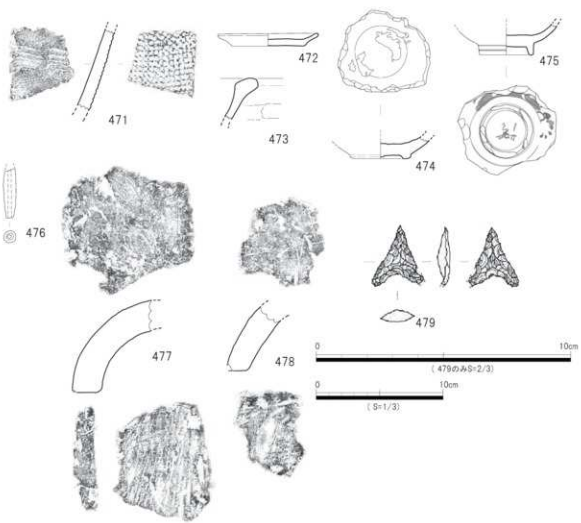
第71図**471**から**479**は、試掘調査や本調査中に出土した、遺構に伴わない資料である。**471**は須恵器甕の胴部で、外面には格子状タタキ痕、内面には青海波の当て具痕とハケ状のものによる擦痕がある。**472**は土師器小皿で、底部は糸切り離しである。復元口径は8.0cmである。**473**は土師質土器の鉢口縁部で、口縁端部は玉縁状に肥厚する。外面は横方向にヘラ削り、内面は丁寧なナデ調整である。形態や色調などから近世の高村焼（宇佐市高村）と考えられる。**474**は陶器皿で、かなり釉が剥がれているが、内面見込みに胎土目が残る。**475**は染付の磁器碗である。**476**は土師質の土錘。**477**と**478**は古代瓦。共に丸瓦で、内面に布目痕があり、外面はナデ調整である。**479**は姫島産黒曜石の打製石鏃である。

第３節　小結

２次調査区は、第73図のように三口遺跡の最東端に位置する。ここは微高地が終わる所であり、地形的にも「端」に位置することになる。幅3.5mという細長い調査区のため、周辺の状況はまったく不明ながら、７世紀後半から８世紀前半の竪穴建物が確認されたことから、１次調査区にはない様相の一端を知ることとなった。この２次調査区の状況や、３次から６次調査区の状況からは、古墳時代後期の６世紀後半から奈良時代の８世紀にかけて、三口遺跡の範囲内では転々と居住区が移動していた、あるいは消滅と出現を場所を変えながら繰り返していた、という事ができるだろう。また、１次調査区で確認された９世紀から10世紀の遺構群は、２次調査区にはまったく及んでいなかったことも確かめられた。両者の間に小さな谷地形があったことが要因としては大きい。



第70図　２次SD1出土遺物



第71図　２次調査その他の出土遺物

第５章　総括

第１節　三口遺跡の歴史的位置づけ

遺構の時期と展開

第72図は、三口遺跡１次調査出土資料を年代別に並べたものである。三口１期から三口７期として説明する。三口１期はSH3とSK1出土資料である。後述の「下毛郡における飛鳥時代から平安時代中期の土器編年」（以下「下毛郡土器編年」とする）の１期に該当する。伊藤田窯跡群の中では草場窯跡群（大分県1992）に並行する時期である。６世紀後葉から７世紀初頭である。三口２期は、SH1とSH7出土資料が該当する。下毛郡土器編年Ⅱ期で、７世紀前半である。三口３期はSH5出土資料で、下毛郡土器編年Ⅲ期に該当する。７世紀後半である。

三口４期はSH5出土資料の内、新しい時期の一群の資料である。下毛郡土器編年Ⅸ期にあたり、９世紀前半である。三口５期は、包含層３の一括資料である。下毛郡土器編年Ⅹ期にあたり、９世紀中頃から後半である。三口６期は、SK5出土資料である。下毛郡土器編年Ⅺ期にあたり、９世紀終わり頃である。三口７期は、SK3出土資料である。下毛郡土器編年Ⅻ期で、10世紀中頃となる。

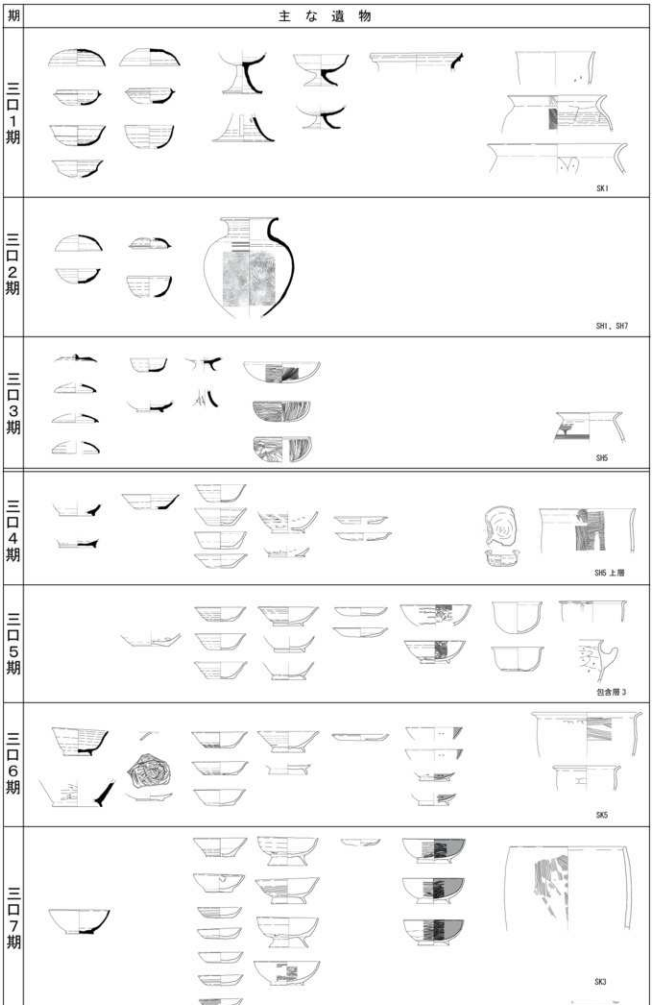
このように考えられるとすると、三口遺跡１次調査で検出された遺構は、６世紀後葉から７世紀後半のものと、９世紀前半から10世紀中頃のものに大きく分けることができる。竪穴建物８基の内、遺物が出土していないSH8を除くと、いずれも７世紀代に位置付けられるものであった[11]。一方、掘立柱建物で時期を示す遺物が出土したのはSB1のみで、時期は９世紀後半から末であった。調査区の東側で集中して検出された掘立柱建物群の時期が遺物からはわからないが、近接し軸もほぼ等しいことから概ね同時期と考えられる。また、２間×２間の総柱建物であるSB3は柱穴掘方も大きく、他の掘立柱建物と様相が違うが、「北部九州では９世紀以降の集落遺跡での総柱建物の事例が少なくなる」（重藤2018）とされることから考えると、６世紀後葉（遺構は調査区内では未確認）から７世紀代の竪穴建物に伴うものである可能性も考えられるが、柱穴規模からすると後者の可能性が高いのではなかろうか。

遺構群の歴史的意味

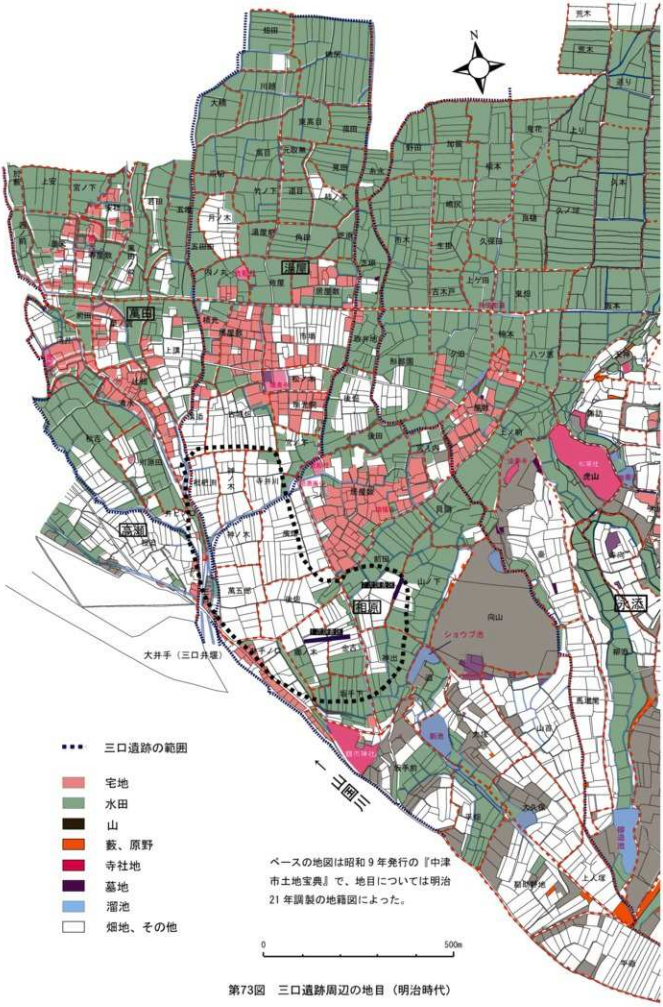
遺跡のある相原地区は神代平野を望む下毛原台地の北西端と、神代平野の条里ではない部分を含む一帯であり、すぐ横を流れる山国川には「大井手」と呼ばれる水路の取水口（通称「三口井堰」）があって、条里（遺跡名は「神代地区条里跡」）への水の供給を担っている。さらに、すぐ北側には官道（勅使街道）が東西に走り、さらには下毛郡と日田郡を結ぶ南北道（江戸期には「永山布政所路」と呼ばれる道）が相原地区を通っているという、陸上交通の要衝でもあった。周辺で調査された遺跡では、８世紀から９世紀、一部10世紀にかけて機能した下毛郡正倉の長者屋敷官衙遺跡（中津市2001、2015b）が台地上にあり、同じく台地上では７世紀後半から８世紀にかけて小規模な横穴式石室を持つ古墳７基や、蔵骨器を伴う火葬墓４基などで構成される相原山首遺跡（中津市2023）がある。さらに山国川に面する台地縁辺では、坂手隈城跡（中津市2011）や鵜助野地遺跡（大分県1992）で８世紀後半から９世紀前半の火葬墓が見つかっている。さらに同じく屋面では５世紀後半から７世紀中頃にかけて連綿と横穴墓が作られており（大分県1989、1991、2005）、すぐ上の台地上では、４世紀から６世紀にかけて古墳が７基造営されるなど（中津市1984など）、古墳時代から奈良時代、さらに平安時代初期にかけては一大墳墓地でもあった。一方、台地下の平野部に目を転じると、墳墓に係る遺跡はなく、７世紀末には創建されたとされる相原廃寺（中津市1989ほか）があり、６世紀後半の居館の可能性のある三口遺跡６次調査区（中津市2022）などがある。

このような環境の中に、今回報告する三口遺跡１次調査区、２次調査区がある。調査区は道路幅という限られた面積であり、遺構の広がりはわからないという限界があるが、特に１次調査において判明した点を押さえておく。前記したように、竪穴建物は概ね６世紀後葉から７世紀後半にかけて作られたと考えられる。その後、明確な遺構としては９世紀前半から10世紀前半にかけて土坑などが作られている。おそらく大部分の掘立柱建物はこの時期のものと考えられる。掘立柱建物は８棟（建て替えを含むと９棟）あり、軸は統一されているが全体的な配置は不明である。柱穴掘方は１次調査SB1（以下は、特に断らない限り１次調査の遺構番号とする）が直径0.7 ～ 1.1m、SB3の倉庫が0.9 ～ 1.0mと大きいが、他は0.5m前後と小さい。SD1、SD2は略南北に直線的に伸びる幅１mほどの溝であるが、時期は掘立柱建物とほぼ同時期であり、この溝が何らかの区画を示すものである可能性が高い。

遺物では越州窯青磁や緑釉陶器が出土しており、通常の集落ではない可能性が高い。しかし、今回下毛郡土器編年で事例として取り上げた池の下・能元遺跡区域２溝状遺構（大分県埋セ2015）、法垣遺跡SD42（中津市2018b）からも緑釉陶器が出土しており、他に市内では野依遺跡D区２号溝（宮内・村上1988）や高畑遺跡（大分県埋セ2010c）、



第72図　三口遺跡土器編年表



第73図　三口遺跡周辺の地目（明治時代）

定留遺跡赤松地区（中津市2018c）、諫山遺跡（大分県埋セ2016）、濱田遺跡（大分県埋セ2023）からも出土するなど、９世紀後半以降には緑釉陶器がかなり流通していた可能性があるので、このことをもって官衙的要素というわけにはいかない。一方、下毛郡の正倉である長者屋敷官衙遺跡の動態を見ると（中津市2001）、Ⅰ期：８世紀中～後半、Ⅱ期：８世紀末～９世紀初頭、Ⅲ期：９世紀前葉から中葉、Ⅳ期：９世紀後葉から10世紀前葉とし、盛期はⅠ、Ⅱ期で、Ⅲ期、Ⅳ期と規模を縮小する。このまさに衰退していく時期に三口遺跡１次調査区で掘立柱建物群が成立する。しかし、この建物群も10世紀の中頃までには終焉を迎え、中世的な集落へは繋がっていかない。

では、この三口遺跡１次調査区の掘立柱建物群はどういった脈絡の中で出現し、衰退したのであろうか。それを考えるにあたって、下毛郡内の古代遺跡の消長を確認するために作成した一覧表（第４表）を見ると、興味深い点が浮かび上がる。それはⅢ期とⅣ期の境（７世紀後半）、Ⅷ期とⅨ期の境（９世紀初頭）という２時期で集落の衰退と成立が顕著に認められることである。さらに、Ⅴ期とⅥ期の境（８世紀中頃）にも、何らかの変化があった可能性がある。もちろん、集落全域を調査できているわけではないので個別の遺跡では多少の移動があるかもしれないが、複数の遺跡でほぼ同様の消長を見せていることは、ある程度地域的状況を反映した可能性を示していると理解できる。このような集落の消長と、官衙遺跡である長者屋敷官衙遺跡や相原山首遺跡などの墳墓の消長がリンクしているようにも見える。

第４表　遺跡別時期変遷

西暦（参考）		600			700			800			900			
	0期	Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	Ⅴ期	Ⅵ期	Ⅶ期	Ⅷ期	Ⅸ期	Ⅹ期	Ⅺ期	Ⅻ期	〇期
長者屋敷官衙遺跡①							掘立、土坑			掘立、土坑				
三口遺跡１次調査区②		竪穴、掘立？、土坑								掘立、土坑			土坑	
定留遺跡八反ガンソウ地区③					掘立、土坑				土坑					
定留遺跡赤松地区④						竪穴				掘立、土坑、溝				
定留遺跡田畑地区⑤			竪穴、掘立			掘立、土坑								
諸田遺跡女郎屋敷地区⑥	竪穴													
諸田遺跡戸入道地区⑦	竪穴													
諸田南遺跡古池地区⑧	竪穴、掘立					掘立、土坑								
諸田南遺跡南方地区⑨		竪穴、掘立、土坑												
法垣遺跡⑩	竪穴												溝	
野田遺跡⑪	竪穴、掘立、土坑							掘立、土坑						
市堀遺跡⑫		溝、土坑			土坑									
諫山遺跡⑬						竪穴		溝	土坑					
野佐遺跡⑭											溝			
池の下・能元遺跡⑮											溝			
上畑成遺跡⑯											溝			
大勢遺跡⑰	竪穴				土坑									
相原山首遺跡⑱				方形墳			火葬墓							
上ノ原横穴墓⑲	横穴墓													
坂手隈火葬墓⑳							火葬墓							
勘助野地火葬墓㉑							火葬墓							
森山遺跡火葬墓㉒							火葬墓							

白抜き文字は主な遺構を示す
灰色は遺構が少ない、または遺物のみ確認
遺跡名の後の〇数字は参考文献（92ページ）

坂上康俊氏は福岡市内の古代を中心とした遺跡の消長を調べ、８世紀末から９世紀初頭の画期を見出した（坂上2022）。その要因として「８・９世紀の交に起こった大洪水」をあげ、さらには「大規模な飢饉・凶作」がそれに追い打ちをかけ、そこに「律令制的国郡制の機能不全が重なった結果」、遺跡の立地に変化が生じたとした。下毛郡内においては、今のところ大規模な洪水を裏付ける資料は得られていないし、具体的な開発の経過がわかる発掘資料も少ないので、Ⅷ期とⅨ期の境（９世紀初頭）の画期が自然的要因なのか、社会的要因なのかはわからないが、坂上氏が言及しているように「律令制的国郡制の機能不全」も一要因であったことは間違いないであろう。

次に、三口遺跡とほぼ同様の時期の遺跡である豊後大野市の加原遺跡（大分県2014）や国東市の久末京徳遺跡（安岐町1991）、中津市の定留遺跡赤松地区（中津市2018b）との比較を通じて、遺跡の性格を考えてみたい。これらの遺跡の報告書から、掘立柱建物のみを抽出してトレースしたものが第74図（スケールは全て1,000分の1に統一）である。

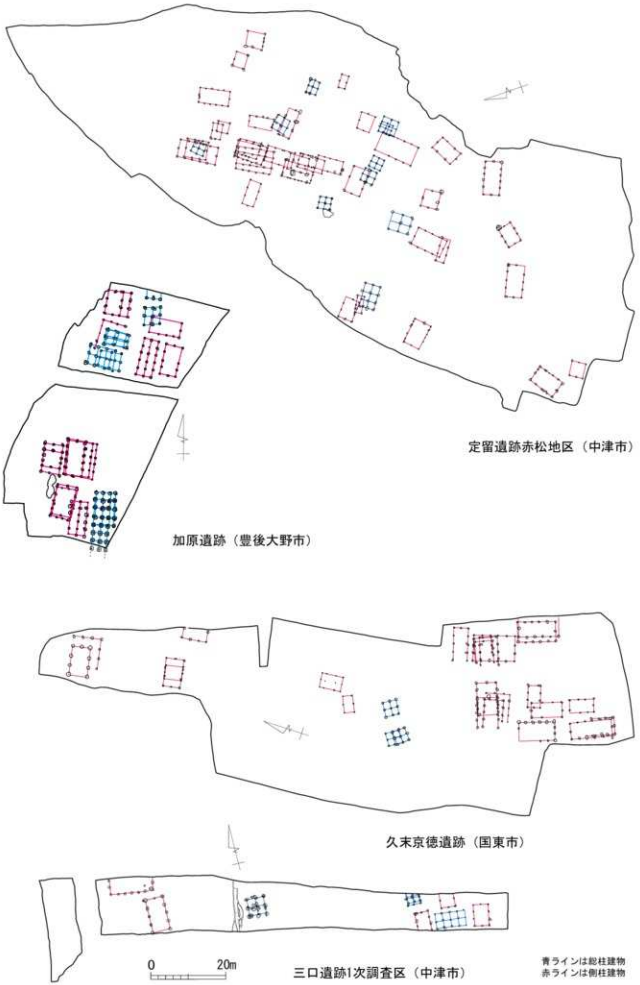
加原遺跡は、6世紀後半に竪穴建物群が出現し7世紀前半まで存続する。その後空白期間があり、9世紀中頃になって掘立柱建物群が出現し10世紀初めまで存続するという三口遺跡1次調査区とほぼ同様の変遷をたどる。遺物は越州窯青磁が多く出土しているが、祓など官衙的要素を持つものは出土していない。加原遺跡では、屋と倉がほぼ1対1、ないしは屋がやや上回る数で推移する。倉は2間×2間、3間×2間、3間×3間のものがあり、柱穴掘方は1mを超えるものもあるなど、三口遺跡1次調査区のものより規模が大きい。なお、建物配置がほぼ同一軸に沿っているように見えるのは、立地が西から東に向かって傾斜を有しており、建物が等高線に並行に建てられていることによる。調査区の中の北西部の建物群が中心となる建物群であろう。ここでは2～3回の建て替えが行われている。

久末京徳遺跡は、8世紀後半から9世紀後半まで、比較的長い期間にわたって営まれた遺構群である。25棟確認された掘立柱建物群は大きく3カ所に分かれ、3段階の変遷が想定されている（安岐町1991、大分県2004）。注目されるのは最も南側の一群で、建物規模も大きく、建て替えが行われつつも「コ」字状の配列を維持している。報告書の中で、後藤一重氏はこの遺跡について、「8世紀後半に出現した有力在地首長の居宅」とする。その他の遺構として、完形土器が多量に埋納された土坑5基、口縁部を打ち欠いた須恵器、土師器の壺に、石や土師器坏で蓋をしたものを土坑内に埋置した3例など、特殊な土坑が検出されている。

定留遺跡赤松地区は、8世紀と9世紀の遺構が重なっており、掘立柱建物がどちらに属するかを峻別するのは難しい。丸山氏は建物方位から7時期にわたって4つのグループが盛衰したとする（丸山2023）が、遺物からそれを裏付けるのは難しい。しかしながら、丸山氏のいうAグループ（最も建物が集中しているところ）が何度か建て替えを繰り返しながら、集落全体の中核として機能したであろうことは窺える。

ある特定の空間で繰り返し建て替えが行われるのは、前述した加原遺跡や久末京徳遺跡においても見られ、集落における居住者間に明確な序列が存在したことを窺わせる。その一方で、やや古い同じく丸山氏が分析した8世紀代の諸田南古池地区（中津市2016、2018）においても掘立柱建物の同一場所における建て替えは認められるが、4つのグループ間に格差は無く、それぞれのグループが均質に見える（丸山2023）。つまり、8世紀段階では集落内の格差が顕在化しておらず、それ以後に集落内部で格差が生じた、あるいはそのような格差を持って集落が成立した、とすることができるだろう。

つまり、9世紀後半に及ぶ集落は、景観的には明確に中核的なエリアがあり、その中では同一場所で数度の建て替えを行い、少し離れた周囲に倉を有していた姿[23]が想定される。三口遺跡1次調査区がそれに該当するのかどうかは、調査面積の関係で判断できないものの、その可能性を否定する材料はない。前記した変遷から、衰退する律令体制の中で、郡衙に関係した人物などが「富豪の輩」として輩出してくる過程を読み解くこともできるのではなかろうか。今後、9世紀から10世紀代の遺跡の資料が蓄積した段階で、改めて検討を加えたい。


定留遺跡赤松地区（中津市）
加原遺跡（豊後大野市）
久末京徳遺跡（国東市）
0
20m
三口遺跡1次調査区（中津市）
青ラインは総柱建物
赤ラインは側柱建物

第74図　集落比較

第２節　下毛郡における飛鳥時代から平安時代中期の土器編年

はじめに

従来、資料が少ないと言われてきた標記の時期の遺物が、近年かなり充実してきた。特に旧下毛郡域においては、諸田南遺跡（中津市2016、2018a）を初めとした幾つかの遺跡で、特に大規模工事に伴う発掘調査によって一括資料が知られるようになってきた。今回報告する三口遺跡Ⅰ次調査は、発掘調査自体は1993年の調査と古いが、一部遺物が公表されている（大分・大友土器研究会2001）のみで、全体像は知られなかった。そこで、三口遺跡Ⅰ次調査の報告を行うのに合わせて、該期の土器を整理し、年代的な位置づけを与える試みを行いたい。

この地域（豊前南部）の土器編年に先鞭をつけたのは、宇佐宮弥勒寺の報告書（大分県立歴民1988）である。報告者の宮内克己氏は、土坑や溝の一括資料をもとに、８世紀から16世紀の土器編年を行った。ここで問題にする７世紀後半から11世紀初めについては、８世紀中頃から後半、９世紀後半、10世紀後半、11世紀前半という４つの段階を設定している。つまり、資料的制約から10世紀前半が無く、50年単位という時間幅での編年であったため、器種ごとの細かな変化を十分に追えたわけではなかった。豊前南部においては、その後はこの編年に基づく年代観で語られることになる。

一方須恵器については、下毛郡域において古墳時代から古代にかけての須恵器や瓦を焼いた窯が集中して発見され、伊藤田窯跡群と総称され、編年作業も進捗している[5]。特に近年では穂屋１号窯、同２号窯、コンゲ窯跡の調査報告書（大分県埋セ2010b）が刊行され、今まで詳らかではなかった７世紀後半から８世紀前半の様相が明らかになってきた。さらに、その後の梨ヶ谷窯跡（中津市大字伊藤田字梨ヶ谷）の調査では、伊藤田窯跡群内において最も新しい時期の窯であることが判明している[6]。

さらに近年では、長氏による豊前南部地域における須恵器編年が行われ（長2012など）、主に窯出土資料による編年の深まりが認められるが、豊前南部（下毛郡、宇佐郡）については地域性のある土師器などまで含めたトータルな編年の提示までは至っていないのが現状である。

そこで、ここでは下毛郡内（現在の中津市域）の遺跡、特に集落遺跡出土資料の中から、基本的に遺構（特に土坑）一括資料を中心として器種ごとにその特徴を抽出した上で、一括資料の時期の変遷として編年案を示していきたい。主に扱う時期は７世紀中頃から10世紀後半、扱う器種は土師器の坏、高台付坏（椀）、皿、黒色土器の椀、須恵器の坏、高台付坏（椀）、皿、高坏などである。

坏の分類

ここでは、記述の便宜性を考え、出土資料の多い土師器の坏について、形式設定をしておきたい。坏は、大きく以下の６形式に分けられる。

坏①：比較的小さな平底から大きく直線的に、あるいは内湾気味に開く体部を持ち、外面体部下半には回転ヘラ削りを施す。

坏②：丸底の椀形態を呈するもので、内外面はヘラミガキされ、しばしば内面には暗文が施される。

坏③：平底の箱形態を呈するもので、坏部は直線的に開くが、しばしば先端部で小さく外反する。底部はヘラ切り離しである。

坏④：円盤状高台から、直線的に開く体部を持つもの。底部はヘラ切り離しである。

坏⑤：丸底気味の底部に、やや内湾気味に外傾する短い体部が付く坏で、底部は手持ちのヘラ削りを施す。

坏⑥：大宰府において「坏ｄ」とされるもので、口径に比べ底径が小さく、内外面ともミガキが施される。底部はヘラ切り離しである。

前後関係の確定

前記の検討に基づき、各遺構出土資料に前後関係を与えて、それをⅠ～Ⅻ期としてそれぞれの期の特徴、特に後半期においては土師器坏の特徴を述べていきたい。それぞれの「期」は、必ずしも同一の時期幅を有するとは限らない。単純に言うと、Ⅱ期はⅠ期より、Ⅷ期はⅦ期より新しい時期であることを示しているに過ぎない（場合によっては、使用時の幅を考えると一部で重なっていたことも考えられる）。きわめて単純に、廃棄あるいは使用時が同一であった可能性を示す一群の土器であるに過ぎない。

なお、編年表には伊藤田窯跡群との関係上、０期として諸田遺跡女郎屋敷地区SH17（中津市2016）の資料を置いている。

Ⅰ期

三口遺跡１次のSK1とSH3が該当する。古墳時代以来の須恵器坏H（15～18）、長脚２段透かしの高坏（23）、短脚の高坏（24、25）などに、新たに坏G（19）が伴う。また、高坏の上部のみを取り出したような、坏部上半部が大きく外反する坏（20、21）が伴っている。SK3から２点出土しており、この坏については、脚あるいは高台が剥離した痕跡は認められず、今のところ類例は無いため、イレギュラーな形で製品として流通したものと考えておきたい。さらに、伊藤田窯跡群に特徴的な口縁部に突帯を２条巡らせる甕（26）がある。

土師器は小型のものが無く、甕と甑のみである。甕は口径に比べ、胴が張る古墳時代以来の形状を示す。甑は口縁端部が細り、先端で小さく外反する。前時期に比べ、外反が小さく、直線的になっている。

Ⅱ期

諸田南遺跡南方地区E区SK16（中津市2016）が該当する。須恵器坏蓋（30～32）は回転ヘラ切りののち、ナデ調整。坏身は回転ヘラ削りが見られるもの、手持ちヘラ調整のもの、回転ヘラ切りのままのものがある。坏蓋の口径は9.7～11.2㎝、坏身の受け部径は9.6～10.0㎝である。高坏（35）は坏部上半が外反するもので、裾部は緩やかに湾曲しながら跳ね上がる。他に平瓶（36）や甕（37）の口縁部が出土している。土師器は甕の口縁部（38）と甑の把手（39）、蛸壺（40）である。

裾部が上方に跳ね上がる高坏（35）は、伊藤田窯跡系須恵器とされるもので（長2012）、穂屋１号窯跡（大分県埋セ2010）や伊藤田城山A地区２号窯跡（中津市1985）、同B地区２号窯跡（中津市1985）から類似のものが出土している。ただし、この諸田南遺跡例のように緩やかに屈曲するものは無く、強く屈曲して跳ね上がるものが大半である。器種は少ないが、坏Hに、本来は坏Gが伴う。編年表では同時期の穂屋１号窯跡出土資料で補っている。高坏は脚部が短いもので、他に平瓶がある。

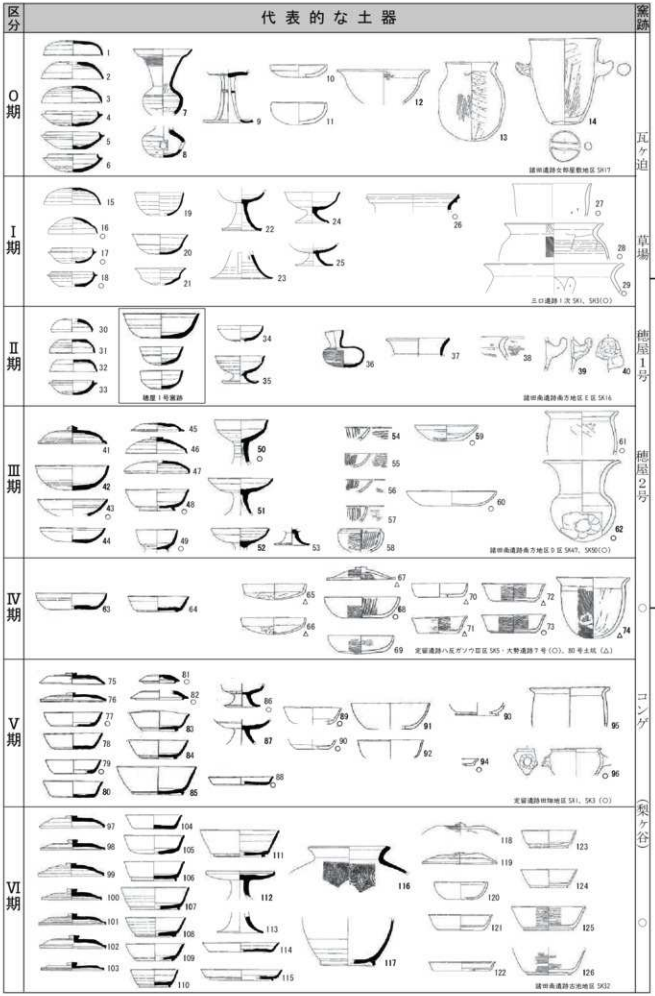
Ⅲ期

諸田南遺跡南方地区D区SK50とSK47（中津市2016）が該当する。古墳時代以来の須恵器坏Hが姿を消し、椀状の体部を持つ坏G（42～44）、及び高台を有する坏B（48、49）がある。坏Gは平底の底部から内湾して立ち上がり、端部が小さく外反するという共通の形態を持つ。蓋は、かえりを持つもの（45）と持たないもの（46、47）がある。後者は、口縁部が「く」字状に折れるもの（46）と、内面にやや段を作って小さく折れるもの（47）である。摘みは扁平で中央が窪む。高坏は低脚のもの（53）と、長脚のもの（50）がある。後者の坏部は口径に比して浅く、坏部中位で折れて外傾して開く。須恵器坏Bは、一つは端部が外側に小さく張り出し、丸く納まるやや長めの高台に、体部と底部の境が丸みを帯び、端部で小さく外反する体部がつくもの（48）である。もう一つは小型で、底部と体部の境が明瞭で、やや内湾気味に開く体部を有するものである（49）。

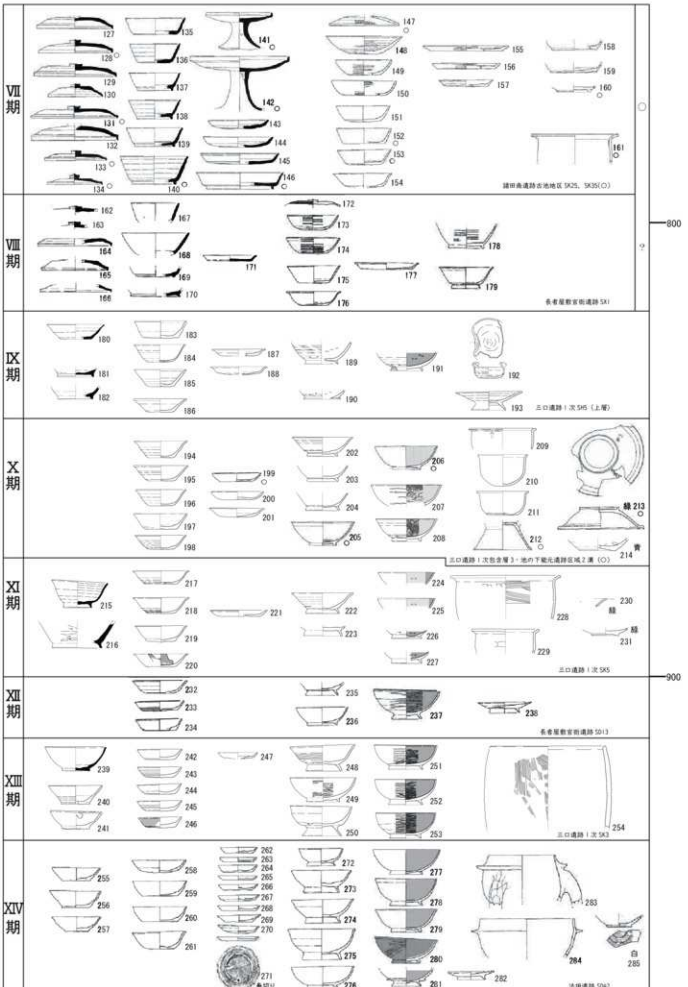
土師器坏はいずれも外面はミガキで、内面に垂直線の暗文が描かれているもの（54～57、坏②）と、外面ヘラ削りあるいはナデ、内面ナデのもの（59、坏①）がある。前者は口縁端部の内面に小さな凹線を持つものも１点あるが（54）、その他は端部が丸く納まる。後者は体部が直線的に開き、端部で小さく外反するもの と内湾気味のもの、そのまま丸く納まるものとがある。また、同じく内面に暗文を持つ小型の壺（58）がある。土師器皿（60）は、口径21.2㎝とやや大型で、平底の底部から、体部は内湾して立ち上がる。器表面は剥落しており調整は不明である。土師器壺（62）は器高19.6㎝の小型で、ヘラ削りを施す球形の体部に、大きく外反しながら伸びる長い口縁部がつく。口縁部の形状は異なるが、同じ中津市内の伊藤田田中遺跡の古代の溝（水路）から出土したものに類似する（大分県埋セ2010a）。土師器甕の口縁部は２点あるが、いずれも緩やかに外反して開くものである。その他、甑、蛸壺などが出土している。

Ⅳ期

定留遺跡八反ガソウ地区Ⅲ区SK-5（中津市2006）、大勢遺跡７号遺構（中津市2010）、大勢遺跡80号土坑（中津市2010）が該当する。山国川上流域にある大勢遺跡と、他の中津平野の遺跡とでは土師器の様相が異なる。具体的には大勢遺跡80号土坑では、ヘラ削りを施す丸底気味の底部に、やや内湾気味に外傾する短い体部が付く坏（66、坏⑤）と、平底に外反しながら開く体部を持つ坏（71、坏③）の２種類があるが、前者は中津平野の遺跡ではまったく確認されていない。この形式の坏は、古墳時代から須恵器坏身を模倣した土師器坏を作り続ける筑後川上流域の影響を受けたものと考えられる。大勢遺跡の場所からは山国川を下って中津平野に出るよりも、山を越えて筑後川上流の日田、玖珠地方に出る方が容易い[20]。



第75図　7世紀から10世紀の編年表その1



第76図　7世紀から10世紀の編年表その2

土師器埦は大勢遺跡のみで確認出来る。平野部での資料が少ないためである可能性もあるが、筑後川上流域の影響で、いち早く土師器埦を受容した可能性もある。いずれにしても、下毛郡域における土師器埦の出現と捉えられる。２点とも低平な高台に、口縁端部で小さく外反する体部に内外面ともヘラミガキを施すという共通の技法を有している（72、73）。

この期の坏には、定留遺跡八反ガソウ地区Ⅲ区SK-5によると、前記した坏③と坏⑤以外に坏②（68）もある。坏②には暗文が施される。次期以降主体となる坏③の出現もこの時期に求めることができるだろう。

須恵器では、坏G（63）と坏B（64）が出土しているが、資料が少ない。また、図示していないが、須恵器高台付坏（埦）は、相原山首遺跡４号墳と６号墳で高い高台に丸い椀状になる体部がのるものが出土している（中津市2023）。それに伴うと考えられる蓋は返りがなく、端部でやや強く「く」字に折れるものである。伊藤田窯跡群では出土例が知られていないので他地域からの搬入品と考えられるが、一応この段階に位置付けておく。しかし、Ⅱ期に位置付けることも可能かもしれない。

Ⅴ期

定留遺跡田畑地区SX1、SK3（中津市2005）が該当する。須恵器坏（77～80）は平底、あるいはやや突出気味の平底に、外傾して直線的に開く口縁部を持つ。口径は12.9～14.7㎝。高さは3.1～4.1㎝である。口径に比べて底径がやや小さい。高台付坏（83～85）は、高台が内側に傾斜し、やや外側に張り出しながらほぼ直線的に外傾して開く坏部となる。坏蓋（81、82）は、上面が窪む扁平な摘みが付き、口縁端部は屈曲することなく素直に開く。破片ではあるが、返りのあるものも出土している。

土師器坏はやや大ぶりで、口縁部は内湾しながら立ち上がるもの（91、坏①あるいは②？）と、平底底部から直線的に開く坏部を持つもの（89、90、坏③）がある。高台付きの埦（93）は高台が外側に踏ん張り、内湾する坏部を持つ。皿（94）は平底から外反する体部を持つ。いずれも外面にミガキはない。甕は緩やかに外反する口縁部を持つもの（95）で、胴部はあまり張らない。他に鉢壺などが出土している。

Ⅵ期

諸田南遺跡古（こえい）池地区SK32（中津市2016）が該当する。須恵器坏は平底のもの（104）と、やや底部が突出気味のもの（105）とがあるが、体部はやや外傾気味に開く。高台付坏（106～111）は大中小のものがあり、高台の底面が水平にならずに外側に傾き、内側で接地するものが少なからず認められる。高台から体部にかけての張り出しは小さいものが多い。体部は直線的かやや外反気味に開く。蓋（97～103）は扁平な摘みで、口縁端部が所れて下がるものから、一度強く上に折れて嘴状になるものもある。皿（114）は体部が外反しながら開く。高台付のもの（115）もある。高坏（112、113）は、水平の底部に小さく立ち上がる坏部が付く。須恵器では他に甕（116）や壺（117）がある。

土師器坏は２種類あり、底部から内湾して立ち上がる体部を持つもの（120、坏①）と、平底から明確な稜線を持って立ち上がる体部で、先端部で小さく外反するもの（121、坏③）である。両者ともミガキはない。埦（123～126）は、高台部はバラエティに富み、外側に踏ん張るものや接地面が高台内側のものがあり、しっかり接地する安定したものは少ない。坏部は大小があるが、概ね高台部からあまり張り出さずに直線的な体部が伸びる。蓋（118、119）は扁平な摘みを持ち、口縁端部は小さく折れる。皿（122）は平底からやや内湾して立ち上がる体部で、口縁端部が外反し小さく摘み上げられる。甕は口縁部の屈曲が強くなく、口縁部も短いものが多い。その他、甑や鉢壺、製塩土器も出土しているが、特筆すべきは器形が不明なもの、あるいは器形はわかるが用途の不明な土師器が多く出土していることである。

このSK32は、報告書の図面では複数の土坑が切り合っているように見えるが、大きな時期差を示すような遺物群ではないと考えられるので、ここでは一括して扱った。

Ⅶ期

諸田南遺跡古池地区SK25（中津市2016）、諸田南遺跡古池地区SK35（中津市2016）が該当する。須恵器坏（127、128）は平底から外傾して直線的に立ち上がる体部を持つ。高台付坏（137～140）は大中小があり高台部もバラエティに富む。安定的に接地するものよりも、内側や外側に傾いて、接地面が一方の端部だけになるものが多い。体部の立ち上がりは高台部からやや外側か、あるいは直接立ち上がるものがある。坏部は直線的に開く。蓋（127～134）は高さのある擬宝珠形があるが、多くは扁平で、端部は折れて「く」字形になるか、端部で一度上向きに折れて強く

屈曲し嘴状になる。皿（143 ～ 145）は平底、あるいはやや突出気味の底に、外反しながら開く口縁部が付く。高台付皿（146）はやや大型のもので、平底に直線的あるいはやや外反して開く体部を持つ。高台部はやや内側に傾斜する。高坏（141、142）は浅い皿状の坏部に、強く屈曲して小さく立ち上がる口縁部を持つ。裾部はラッパ状に大きく開く。須恵器は他に甕がある。

土師器坏は２種類で、平底から明確な稜線を持って立ち上がる体部を持つもの（151 ～ 154、坏③）と、坏部が内湾気味に開き、内外面にミガキが施されるもの（148 ～ 150、坏⑥）である。前者の平均口径は12.7㎝である。体部上半で僅かに外反する。高台付坏（160）は破片１点であるが、しっかりした短い高台が付く。蓋（147）は口縁端部が小さく折れ曲がるもので、１点には内外面にミガキがある。皿（155 ～ 157）は小さな破片であるが、内外面にミガキがある。甕（161）は小さく緩やかに口縁部が屈曲する。土師器では他に甑や蛸壺などがある。

この時期までは須恵器の占める割合が大きく、伊藤田窯跡群では未確認ではあるが、この時期の窯跡が今後見つかる可能性は高いと考えられる。

なお、中津市内では他に才木遺跡で当該時期の遺物が出土している（中津市1988）。

Ⅷ期

長者屋敷官衙遺跡SX1（中津市2001）が該当する。良好な資料が乏しい時期である。正倉が建ち並ぶ中で、Ⅰ期（８世紀中頃から後半）の長舎型側柱建物を切って掘られた廃棄土坑で、報告者によると数度の掘り返しがあるという。遺物は８世紀中～後半、９世紀前葉、９世紀後半、10世紀前葉に分けられているが、出土位置（層位）が示されていないので、共伴資料が認定できない。ここでは、ある一時期に一括性があったと考えられる資料を、「抽出」という形で選び出している。そのため、今後一括性の確実な資料が発掘されれば、置き換えが必要になる資料群である。須恵器坏蓋（162 ～ 166）は、扁平な摘みを持ち、口縁部は陵を持って小さく屈曲する。高台付坏（169、170）は、直線的な坏部に、外側に踏ん張る高台が付くが、坏部の外側への張り出しはほとんどない。土師器は扁平な摘みの付くもの（172）がある。坏には２種類あって、体部が丸みを持ち、外面にミガキがあるもの（173、174、坏⑥）と、外反して開く体部のもの（175、176、坏③）である。椀（178、179）は、直線的な体部に横方向に間隔をあけてヘラミガキをするもの、内湾して開き、先端で小さく外反するものなどがある。皿（177）は、平底から外傾して立ち上がり、口縁端部が小さく外方向に折れる。

Ⅸ期

三口遺跡１次SH5出土資料の内、新しい様相の一群が該当する。明確な一括性はないが、何らかの遺構に含まれていた可能性が高い資料である。須恵器坏（180）は平底から外傾して直線的に開くものである。高台付坏も２点（181、182）ある。土師器坏（183 ～ 186）は口径が12.4 ～ 12.9㎝と13㎝未満である。平均は12.5㎝である。坏の形態的には底径が比較的大きく箱型を呈する古い形態のものと、底径が小さく、体部が大きく開くもの、その中間的なものがある（いずれも坏③）。小皿（187、188）はミガキがないが、前時期までの口縁端部が小さく外反する形態を持つ。今のところ、黒色土器A類椀が出現するのはこの時期である。全形がわかるものが無いが、内湾気味に立ち上がる体部である（191）。また、この時期になると土師器の蓋は見られなくなる。さらに、前時期まで認められた丸底坏に系譜を有する坏⑥も姿を消す。このことから考えると、この両者はセットをなしていたものであろう。また、耳皿（192）が伴う。この耳皿はミガキが無く、無高台である。なお、高橋照彦氏は耳皿の出現を９世紀前半としており（高橋1993）、大分市井ノ久保遺跡でも、三口遺跡例と同様の耳皿AⅡ類を９世紀前半代に位置付けている（大分市2000）。

この時期には須恵器が極端に少なくなる。地元の伊藤田窯跡群の動向を示すものであろう。

Ⅹ期

池の下・籠（のうもと）元遺跡区域２溝状遺構（大分県埋セ2015）、三口遺跡１次包含層３が該当する。三口遺跡包含層３は包含層出土資料ではあるが、本来は遺構一括資料であった可能性が高い一群である。いずれも須恵器の共伴は確認されない。土師器坏（194 ～ 198）の口径は11.8 ～ 13.5㎝で、平均は12.6㎝である。形態は口縁端部を小さく外反させるものである。高台付きの椀（202 ～ 205）は、坏と同様に口縁端部を小さく外反させるものは、体部がやや丸みを帯びる。204は、脚の付くところからほとんど張り出さずに直線的に開く体部となる。皿（199 ～ 201）は口縁端部が小さく外反するものと、内湾気味に開いて終わるものがある。鉢（209 ～ 211）は小さな平底のものと、底径の大きなものがあるが、口縁部は緩やかに折れて開く。甕は胴部が張らない。黒色土器A類椀（206 ～ 208）は、丸みを

持つ体部で、土師器椀と同様の形状を持つ。長く伸びる脚付きの鉢（212）も出土している。須恵器は破片ではあるが、直線的に外傾して開く坏の破片がある。

これらと共に、防長系緑釉陶器の蓋（213）と越州窯青磁大碗（214）が出土している。前者は薄い緑がかった黄褐色の釉が全体にかかり、上面３ヶ所（１ヶ所は推定）に濃い緑の釉薬で文様を描く。このタイプの蓋は、概ね９世紀代に位置付けられている（高橋1993）。後者は山本分類大碗Ｉ５で（山本1999）、８世紀末から９世紀中頃の年代が与えられている。

XI期

三口遺跡１次SK5が該当する。土師器坏（217～220）の口径は11.8～13.5㎝で、平均は12.7㎝である。土師器椀は破片も含めると２種類あり、一つは前時期から引き継いだ内湾気味の体部を持つもの、もう一つは新たに出現した直線的に開く体部を持つもの（222）である。前者は、前時期まで外面にミガキが認められたが、そのミガキはなくなる。しかし、器壁は比較的薄く、色調はやや赤みが強いという前時期までの特徴を有している。このタイプの椀は徐々に後者に置き換わっていくと考えられる。皿（221）も含め、土師器からはミガキ調整が姿を消す。

須恵器はごく僅かに確認される。215は高台付の椀で、口縁部が緩やかに外反する。壺（216）も共伴している。椀形態の器は数量を増す黒色土器A類（224～227）に置き換わっていく状況が確認出来る。また、この時期から防長産や畿内産の緑釉陶器（230、231）が見られるようになる。

この時期になると、土師器坏の底径指数（後述）は再びやや大きくなり、0.55前後を示すようになり、さらに器高も4㎝を超えるものは無くなり、低くなる傾向が窺われるようになる。

XII期

長者屋敷官衙遺跡SD13（中津市2001）が該当する。下層からは８世紀後半の遺物が出土するが、ここでは上層から出土した資料を扱う。土師器坏（232～234、坏③）の口径を見ると、10.1～13.0㎝（平均11.9㎝）である。前期の三口遺跡包含層３の土師器坏が口径11.8～13.5㎝（平均12.6㎝）であることを考えると、前者から後者へという変化が想定できる。椀（235、236）はやや内湾気味に体部が開くようである。黒色土器A類椀（237）は、前時期に比べてやや深くなり、丸みを帯びた体部にやや長い脚が付く。

XIII期

三口遺跡１次SK3が該当する。土師器坏（242～246）の口径は9.7～11.3㎝（平均10.4㎝）である。前期の長者屋敷官衙遺跡SD13の土師器坏が口径10.1～13.0㎝（平均11.9㎝）であることを考えると、さらに口径の縮小化が進んだことになる。

この時期は、土師器坏（坏③）が極限まで口径を小さくするとともに、新しい形式の円盤状底部を持った坏（240、241、坏④）が出現する。これによって、黒色土器A類椀（251～253）、土師器椀（248～250）、土師器坏の大小２種という組み合わせとなる。円盤状底部を持った土師器坏は、共伴する円盤状底部の須恵器坏（239）の影響があるのかもしれない。一方で、前時期まで認められた奈良時代以来の皿は姿を消す。

土師器椀は形態には３形態ある。一つは体部が直線的に開くもの（248）、二つ目は体部が内湾しながら開くもの（249）、この両者には高台が極端に高いものが出現する。もう一つは、黒色土器と同形態のもの（250）で、緩やかに内湾して開く体部に、短い高台が付くものである。黒色土器A類椀（251～253）はやや高台の高いものもあるが、基本的には低い高台である。

XIV期

法垣（はっかき）遺跡SD42（中津市2018b）が該当する。溝出土遺物のため、厳密には一括資料として扱いづらいが、中層からまとまって出土した一群を取り上げる。

土師器坏（255～261）は10.3～15.0㎝と幅があり、大きさは集中せずに器高も含めてバラつきが大きい。形態的には大きく２種類あり、体部が大きく開かずに、底径と口径の比が小さく浅いもの（坏③系譜？）と、器高が高く体部が大きく開くもの（坏④系譜？）の２種類である。前者は形態的にはさらに分類が可能であるが、前後の繋がりが不明なため、ここでは扱わない。椀も様々な形態があるが、多くはやや伸びた高台部に、内湾して大きく開く体部を有するもので、口縁端部で小さく外反するものもある。小皿（262～271）は口径8.6～10.8㎝で、底部が完全に平底になるものと、やや突出気味のものとがある。図示された計45点の内、１点のみ糸切り離し（271）で、他はヘ

ラ切り離しである。高台付皿（282）も１点ある。土師器では他に脚付きの鍋、釜（283、284）が多く出土している。黒色土器A類の埦（277～281）は、外側に踏ん張る高台に、内湾して大きく開く体部を持つものが多く、口縁端部を小さく外反させるものもある。

これらに伴い、猿投窯の広口短頸壺、越州窯青磁碗、白磁碗（285）が出土している。広口短頸壺はやや肩が張る球形胴で、９世紀前半代のものであろう。越州窯青磁碗は、やや内側に傾斜する蛇の目高台で、底部全面が施釉され目跡が残る。山本編年Ⅰ1aに相当し、８世紀末から９世紀中頃の年代が与えられている（山本1999）。白磁碗は幅広の輪高台で、大宰府編年Ⅰ－１類またはⅠ－２類に相当し、やはり８世紀末から９世紀前半の年代が与えられている。

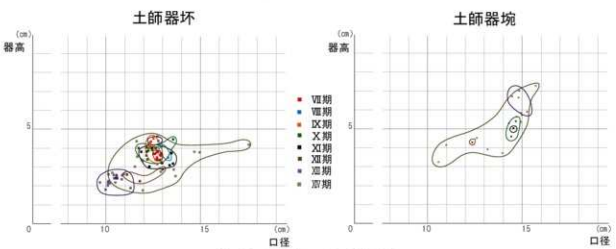
外来系土器は９世紀前半代を示すが、在地の土師器の年代観からは９世紀まで遡るものではなく、10世紀後半に置くことができる。ただし、土師器や黒色土器の中に、９世紀前半まで遡るものが含まれる可能性はある。坏や埦に形態差が大きいのもそれを示唆しているのであろう。厳密に抽出できるほど型式設定ができていないので、ここでは可能性にとどめておく。

糸切り離しの小皿が１点あるのは、土師器坏や小皿への糸切り離し技法が導入されようとする時期であることを示し、さらに中世的な小皿出現期の様相として貴重である。

この段階では、土師器坏は２形態[19]、埦は、前時期同様の３形態のものが存在する。それらとともに、土師器小皿、黒色土器A類埦という組み合わせとなる。12世紀には埦類が瓦器埦に置き換わるものの、中世的な（木地椀を除く）食器構成が成立した時期とすることができる。

土師器坏の変化

以上の変遷のなかで、特に須恵器が減少する中で中心的な器種となる土師器坏③の型式変化について述べておきたい。坏③はⅣ期に出現し、坏①や坏⑥などとの共存を経て、最終的に坏の主流として中世に繋がることになる。この坏の底径と器高の関係を表したのが第77図になる。



第77図　坏と埦の口径、器高グラフ

第78図　底径指数

これを見ると、Ⅶ期からⅪ期にかけては口径12.5cm前後、器高3.5cm前後に集中しているのがわかる。Ⅻ期になると口径が縮小し始め、器高も低くなる。さらにXIII期には底径の縮小と、器高の低下が顕著となる。そして、小皿が出現するXIV期になると、再び坏は器高、口径とも大きくなる。つまり、Ⅶ期からⅪ期の変化は口径と器高だけでは読み取ることができないのである。そこで、口径を１とした時の底径の大きさ（仮にこれを底径指数と呼ぶ）に注目し、そこに器高の要素を加えてグラフで表したのが第78図である。

これをみると、Ⅶ期については底径が相対的に大きく（底径指数が0.6を超える）が、Ⅷ期、Ⅸ期、Ⅹ期と概ね底径指数は0.6を下回るようになり、器高も概ね3.5cmを超え、

4㎝を超えるものもある。ところが、XI期には底径指数は0.55あたりに集中し、XII期には器高の低下とともに底径指数が0.7を上回るものが出てきて、XIII期にはさらに器高の低下と底径指数の大きなものが出現する。つまり、VII期とXI期からXIII期の坏は明確に分離できるが、VIII期からX期の坏は型式変化が緩慢で、なかなか坏③の要素からだけでは年代を決める決め手にはならないことが言えるだろう。

須恵器編年との関係

豊前南部（宇佐郡、下毛郡）の資料では、土器の実年代を示すようなものは皆無と言って良い。ここでは、前記した各期の実年代を考えるために、編年作業の進んでいる須恵器の窯出土資料との比較を述べ、その手掛かりとしたい。

下毛郡には伊藤田窯跡群という一大須恵器産地がある。その編年について、瓦ヶ迫窯跡－草場窯跡（＝夜鳴池窯跡）－穂屋１号窯跡（＝伊藤田城山窯跡A地区２号窯跡、同B地区２号窯跡）－穂屋２号窯跡－コンゲ窯跡という推移を辿ることについては、ほぼ共通理解となっている（大分県理セ2010、長2012など）。

瓦ヶ迫窯跡出土資料は、田辺編年TK43、中村編年Ⅱ－４段階、長氏（長2012、以下同じ）のⅢ－３期、草場窯跡と夜鳴池窯跡出土資料は田辺編年TK209、中村編年Ⅱ－５段階、長氏のⅣ期、伊藤田城山窯跡出土資料と穂屋１号窯跡出土資料は田辺編年TK217、中村編年Ⅲ－１段階、長氏のⅤ－１期からⅤ－２期、穂屋２号窯跡出土資料は田辺編年TK46、中村編年Ⅲ－２段階、長氏のⅥ期、コンゲ窯跡出土資料は田辺編年MT21、中村編年Ⅳ－１段階、長氏のⅦ－２段階とされる。

１期の三口遺跡１次SK1出土資料は、蓋坏の蓋口径が12.5㎝前後で、ヘラ切り離しの後、天井部は丁寧にヘラ調整を行うなど、瓦ヶ迫窯跡出土資料に近いものの、三口遺跡１次SK1出土資料には瓦ヶ迫窯跡では確認されなかった短脚の高坏があることから、次の草場窯跡・夜鳴池窯跡の時期まで含むと考えられる。

Ⅱ期の諸田遺跡南方地区SK16の須恵器坏Hは、蓋の天井部はヘラ切りの後ナデ調整を行うが、身にはヘラ切りのままのものもある。口径は蓋で9.7～11.2㎝、身の受け部で9.6～10.0㎝である。穂屋１号窯跡出土の代表的な資料を見ると、蓋坏は、天井部及び底部は回転ヘラ切り未調整が基本で、かなり小型化している。椀状の坏はやはり小型化し、蓋内面には返りを持つ。高坏は低脚のものが多く、長脚でも透かしは持たない。穂屋１号窯跡の蓋口径と身受け部径はそれぞれ8.7～12.0㎝、8.5～11.0㎝であり、諸田遺跡南方地区SK16の資料もこの幅に納まる。低脚の高坏の脚端部の処理なども共通するので、このⅡ期は、ほぼ穂屋１号窯跡の時期と考えられる。

Ⅲ期の諸田遺跡南方地区SK50については、次の穂屋２号窯跡との並行関係が想定される。この穂屋２号窯跡出土資料の時期は、金属器模倣埦が変化し定型化を見るに至った時期で、穂屋２号窯跡からは体部がS字形に反って、高台が外側に踏ん張る長分類の埦AⅠ１が３点出土している。この埦AⅠ１は、長分類の坏C１の形態からほぼ同時期と考えられる諸田南遺跡南方地区SK50には含まれない。今のところ、下毛郡内での集落遺跡での出土は確認していない。一方で、墳墓である相原山首遺跡４号墳と６号墳からは、長分類には含まれない高い高台の付く埦が出土している。４号墳のものは脚部端部が外側に踏ん張るのに対し、６号墳のものは端部で内側に傾くという違いがある。これらに伴うと考えられる蓋は、やや扁平になった摘みが付き、口縁部には返りはなく、端部で小さく屈曲するもの（４号墳）と、緩やかに折り曲げ、やや外向きに真っすぐ伸ばすもの（６号墳）となる。これらは、今のところ穂屋２号窯跡に続く時期（窯跡は未発見）に位置付けておきたい。

コンゲ窯跡出土資料は田辺編年MT21、中村編年Ⅳ－１段階とされるもので、長編年ではⅦ－２期となる。摘み付きの蓋の内面返りが消失する段階で、コンゲ窯跡では口縁部があまり明確な稜線を持たずに緩やかに折れて垂下するものが多い。埦（高台付坏）は長分類のAⅢ2で、高台は短く断面方形のものとなる。坏は長分類C１に比べて底径が相対的に大きくなり、内湾せずに直線的、あるいはやや外反気味に立ち上がるものになる。このコンゲ窯跡出土資料と並行するものは、上記で述べたⅤ期である。

このように、ここでいうⅠ期は瓦ヶ迫窯跡から草場窯跡、夜鳴池窯跡の時期に、Ⅱ期は概ね穂屋１号窯跡、Ⅲ期は穂屋２号窯跡、Ⅴ期はコンゲ窯跡と並行あるいはやや新しい時期とすることができる。つまり、Ⅳ期は未だ伊藤田窯跡群では確認されていない田辺編年TK48、Ⅲ-3段階に並行するという事になるだろう。さらに、ここでいうⅦ期まで須恵器が占める割合が大きく、供給地として伊藤田窯跡群での操業が想定できる[7]。

各期の実年代観

上記のように須恵器窯との関係が考えられるとすると、１期からⅤ期までの実年代観は、１期６世紀後半、Ⅱ期７世紀前半、Ⅲ期７世紀後半、Ⅳ期７世紀末から８世紀初め、Ⅴ期８世紀前半、Ⅵ期８世紀中頃ということになろう。

続くⅦ期は須恵器が多く出土し、その様相から８世紀後半を充てておきたい。

Ⅷ期以降は土師器主体となり、須恵器編年は援用できなくなるが、越州窯青磁や緑釉陶器が伴う他、僅かに須恵器などが出土することから、他地域との並行関係を追うことが可能となる。Ⅺ期の三口遺跡Ⅰ次SK5からは、高橋編年Ⅱ期と考えられる畿内系の緑釉陶器が出土しており、９世紀中頃から後半に位置づけることができる。同じⅪ期に位置付けられる野依遺跡D地区１号溝は、高橋編年A－２類の防長産緑釉陶器壺が出土する溝を切っている。高橋編年A－２類は９世紀後半に位置づけられている（高橋1993）ので、Ⅺ期は９世紀後半以降という事になる。そうすると一つ前のⅩ期は９世紀中頃ということになるが、ほぼ同時期と考える弥勒寺SK-2の報告者宮内氏は大宰府編年から９世紀中頃、ないしは後半代に位置付けている。Ⅹ期の池の下・能元遺跡区域２溝状遺構からは概ね９世紀代に位置付けられている防長系緑釉陶器の蓋が出土していることも矛盾しない。同じく三口遺跡１次包含層３からは越州窯青磁の大碗が出土しているが、時期的には８世紀末から９世紀中頃のもので、やや古い。Ⅹ期は９世紀の中頃に近い時期に位置付けておきたい。

Ⅻ期とⅩⅢ期は良好な共伴遺物がなく、直接的には実年代に言及できないが、一応Ⅻ期を10世紀前半、ⅩⅢ期を10世紀中頃としておきたい。ⅩⅣ期の法垣遺跡SD42は溝出土でやや出土遺物に幅がある。蛇の目高台を持つ白磁Ⅰ類の碗が伴うが、この１点から時期を特定するのは難しい。小皿や坏の多くが底部糸切り離しになる11世紀前半に位置付けられている宇佐宮弥勒寺跡SK-3（大分県歴民1989）出土資料との関係から、このⅩⅣ期を10世紀後半に位置付けておきたい。ただし、弥勒寺跡で10世紀後半から末に位置付けられているSK-5の出土遺物を見ると、小皿の３割、坏ではごく少数に糸切り離しがある。法垣遺跡SD42では糸切り離しは小皿の１点のみであり、糸切り離しの採用時期に地域差があるのか、あるいは法垣遺跡SD42の時期がやや古いのかは即断できないが、小皿の口径はほぼ同じながら、やや口径の大きいものが法垣遺跡SD42にあることから、時期差と考える方が良いのかもしれない。

おわりに

以上、下毛郡内の遺跡の土坑出土一括資料等を使って、飛鳥時代から平安時代中期の土器を14期に分けて説明してきた。本来であれば、各形式の細かな変遷についても触れるべきであったが、資料の制約から一部器種にとどまった。今回示したのはあくまで現状の「編年案」であり、今後資料の増加に合わせて、より精緻な編年を行うことが期待される。そのことが、律令体制の成立と弛緩、さらには新たな在地勢力の伸長といった該期の社会的変遷に考古学から迫るための基礎資料になるはずである。

註

(1) 厳密にはSH2出土資料は６世紀代の可能性もあるが、他に今回の調査で６世紀代に遡る遺物はないことから、SH2も７世紀代と考えておく。

(2) 加原遺跡では屋に接して倉があるが、ここは傾斜地という立地から自ずと建てる場所が限定されていた可能性がある。

(3) 近年では実年代観において研究者間で齟齬が生じているが、ここでは従来の年代観に従っておく。

(4) 梨ヶ谷窯跡は、2017年度に中津市教育委員会が発掘調査している。諸般の事情で報告書が未刊行であるが、出土資料を見るとコンゲ窯跡に次ぐ８世紀前半代に位置付けられるものである。

(5) 大勢遺跡では製塩土器も出土しているが、山国川ではなく筑後川経由でもたらされたものである可能性を考えた方が良いであろう。

(6) 13世紀の中津市伊藤田田中遺跡（大分県埋セ2010）でも、やはり浅い坏と深めの坏の２種類が存在する。使用時の状況は分からないものの、浅い坏は「大皿」と捉えた方が良いのかもしれない。

(7) 註(4)で触れたように、未報告の梨ヶ谷窯跡がコンゲ窯跡の直後に位置付けられる可能性があるが、正式報告を待ちたい。

参考文献

安岐町教育委員会　1991 『久末京徳遺跡』

大分県教育委員会　1989 『上ノ原横穴墓群Ⅰ』

大分県教育委員会　1991 『上ノ原横穴墓群Ⅱ』

大分県教育委員会　1992 『一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅰ）勘助野地遺跡　六畝町遺跡　大池南遺跡　清水郎原西遺跡　黒水遺跡　大坪遺跡　権現島遺跡』

大分県教育委員会　1992 『一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書（４）伊藤田窯跡群』

大分県教育委員会　2004 『久末京徳遺跡』

大分県教育庁埋蔵文化財センター　2005 『坂手熊横穴墓・坂手熊城跡』

大分県教育庁埋蔵文化財センター　2010a 『伊藤田田中遺跡　屋敷田遺跡』

大分県教育庁埋蔵文化財センター　2010b 『伊藤田窯跡群発掘調査報告書<コンゲ窯跡・穂屋１号窯跡・穂屋２号窯跡>』
大分県教育庁埋蔵文化財センター　2010c 『高畑遺跡』
大分県教育庁埋蔵文化財センター　2014 『加原遺跡』
大分県教育庁埋蔵文化財センター　2015 『嶋ノ町遺跡１次、２次　香紫庵遺跡　灰床遺跡　池ノ下・能元遺跡　今成近世墓　虚空蔵寺遺跡』
大分県教育庁埋蔵文化財センター　2016 『諫山遺跡』
大分県立埋蔵文化財センター　2023 『石神城跡・濱田遺跡』
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館　1989 『弥勒寺』
大分市教育委員会　2000 『井ノ久保遺跡発掘調査報告書』
太宰府市教育委員会　2000 『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』
中津市教育委員会　1984 『幣旅塚古墳』
中津市教育委員会　1985 『伊藤田城山窯跡群』
中津市教育委員会　1988 『洞ノ上遺跡群Ⅰ』
中津市教育委員会　1989 『相原廃寺』
中津市教育委員会　2001 『長者屋敷遺跡』
中津市教育委員会　2005 『定留遺跡田畑地区』
中津市教育委員会　2006 『定留遺跡　八反ガソウ地区発掘調査報告書』
中津市教育委員会　2010 『大勢遺跡』
中津市教育委員会　2011 『坂手隈城跡』
中津市教育委員会　2015a 『市場遺跡１～４次調査』
中津市教育委員会　2015b 『長者屋敷官衙遺跡４～11次調査』
中津市教育委員会　2016 『諸田遺跡・諸田南遺跡発掘調査報告書（遺物編）』
中津市教育委員会　2018a 『諸田遺跡・諸田南遺跡発掘調査報告書（遺構編）』
中津市教育委員会　2018b 『法垣遺跡３次・４次調査』
中津市教育委員会　2018c 『定留遺跡　赤松地区発掘調査報告書』
中津市教育委員会　2022 『三口遺跡６次調査』
中津市教育委員会　2023 『相原山首遺跡』
大分・大友土器研究会　2001 『大分・大友土器研究会論集』
大阪府立近つ飛鳥博物館　2006 『年代のものさし－陶邑の須恵器』
九州前方後円墳研究会　2023 『集落と古墳の動態Ⅳ』
考古学研究会関西例会　2016 『土器編年研究の現在と各時代の特質－須恵器生産の成立から終焉まで－』
小田富士雄　長直信　2006 『豊前北部の土師器と編年』『行橋市史　資料編』（行橋市）
坂上康俊　2022 「福岡市域における８～９世紀集落の変貌とその背景」『国立歴史民俗博物館研究報告　第232集』（国立歴史民俗博物館）
佐藤浩司　1991 「旧豊前国における古代末から中世前期の土器様相」『中近世土器の基礎研究Ⅶ』（日本中世土器研究会）
重藤輝行　2018 『古墳時代～奈良時代の西日本集落遺跡における倉庫遺構に関する研究』（佐賀大学芸術地域デザイン部）
高橋照彦　1993 「防長産緑釉陶器の基礎的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告　第50集』（国立歴史民俗博物館）
高橋照彦　1994 「近江産緑釉陶器をめぐる諸問題」『国立歴史民俗博物館研究報告　第57集』（国立歴史民俗博物館）
高橋照彦　1995 「平安期緑釉陶器生産の展開と終焉」『国立歴史民俗博物館研究報告　第60集』（国立歴史民俗博物館）
高橋照彦　2020 「近江における緑釉陶器生産の再検討」『待兼山論叢　史学編　第54号』（大阪大学）
高橋徹　小林明彦　1990 「九州須恵器研究の課題－岩戸山古墳出土須恵器の再検討－」『古代文化Vol.42』（古代学協会）
長直信　2012 「豊前地域の土器様相と須恵器生産－７世紀を中心に－」『古文化談叢　第67集』（古文化研究会）
長直信　2016 「豊前・豊後の官衙・集落と土器様相」『第19回古代官衙・集落研究会報告書』（奈良文化財研究所）
長直信　2023 「豊前中部地域における墳墓と集落動態の基礎研究」『集落と古墳の動態Ⅳ』（九州前方後円墳研究会）
丸山利枝　2023 「古代の集落－中津市の事例－」『大分縣地方史　第249号』（大分県地方史研究会）
丸山利枝　2023 「豊前南部（下毛郡）における集落と墳墓の動態」『集落と古墳の動態Ⅳ』（九州前方後円墳研究会）
宮内克己・村上久和　1988 「豊前南部および豊後出土の緑釉陶器」『古文化談叢　第20集』（九州古文化研究会）
山本信夫　1999 「大宰府出土施釉陶器の編年について」『国立歴史民俗博物館研究報告　第82集』（国立歴史民俗博物館）

第５表　遺物観察表１

調査次数	遺物番号	図版番号	出土遺構	注記	種別	器種	法量 (cm) 器高	口径	底径	残存	調整/文様	焼成	胎土	色調/釉付着剤	備考
一	1	第７図	SH1	SH01 P6	須恵器	坏蓋	3.8	(11.6)		40%	内外面:ナデ	良好	精緻	灰色	
調査区	2	第７図	SH1	SH01 P8	須恵器	坏身	3.6	(11.0)		33%	内外面:ナデ 底部:雑なヘラ切り	良好	精緻	灰色	
	3	第７図	SH1	SH01 P1-2	須恵器	甕	(24.0+α)	(14.2)	最大胴 (22.0)	45%	内面:上部1/3ヨコナデ,下部2/3同心円当て具痕 外面:上部1/3弱ヘラケズリ,下部2/3横・斜め方向の平行タタキ	良好	精緻	暗灰黄色	
	4	第９図	SH2	SH02 P1	土師器	甑	(10.4+α)				内面:上方向へのヘラケズリのちナデ 外面:ハケ目	良好	1mm大の石英・多量 白色粒子・多量 黒色粒子・中量	橙色	
	5	第９図	SH2	SH02 一括4	土師器	鍋か鉢か	(7.0+α)				ナデ	良好	0.5～1mm大の角閃石、石英・多量	濃橙色	
	6	第11図	SH3	SH03 P3	須恵器	坏蓋	4.5～3.4	(13.6)		65%	ヘラケズリのちナデ 上部外面:羽転ヘラケズリ	良好	0.5～1mm大の白色粒子・中量	灰色	
	7	第11図	SH3	SH03 P5	須恵器	坏蓋	4.2	(14.8)		45%	ナデ 上部外面:ヘラケズリのちヘラ調整	不良	0.5mm大の黒色粒子・微量	淡黒灰色	
	8	第11図	SH3	SH03 一括166	須恵器	坏蓋	(4.1+α)	(12.0)		30%	内面:ヨコナデ 外面:上部ヘラケズリ,下部ヨコナデ	良好	石英・少量	暗灰色	
	9	第11図	SH3	SH03 一括174	須恵器	坏身	3.6	(9.8)	(4.5)	50%	内面:ヨコナデ 外面:ヘラケズリのちナデ 底部:ヘラケズリ	良好	角閃石・少量	暗灰色/外面:自然釉	
	10	第11図	SH3	SH03 一括170	須恵器	坏身	3.5	(10.0)	(6.2)	30%	外面:ヨコナデ 底部:手持ちヘラ調整	良好	石英・少量	灰色	表面が平滑
	11	第11図	SH3	SH03 床直	須恵器	坏身	3.6	(10.0)	(4.6)	50%	ナデ 底部:羽転ヘラケズリ	良好	精緻	暗灰色	
	12	第11図	SH3	SH03 一括155	須恵器	椀蓋	(1.3+α)			30%	外面:ヘラケズリ(ロクロ回転利用)/ヘラ記号	良好		暗橙色	
	13	第11図	SH3	SH03 一括172	須恵器	壺	(1.8+α)		(8.3)	小		良好		外面:黒・内面:灰色 外面:自然釉	
	14	第11図	SH3	SH03 一括164	須恵器	甕	(3.8+α)	(22.0)		小片	ナデ	良好	白色粒子・少量	内面:灰色 外面:茶色	
	15	第11図	SH3	SH03 P4	土師器	坏	3.4～3.8	(11.2)	(5.8)	60%	内面:頃又 外面:ナデ,横方向のミガキ 底部:ミガキ	良好	精緻 0.5mm大の赤色粒子・微量	茶褐色	
	16	第11図	SH3	SH03 一括145	土師器	坏	(2.0+α)		(8.0)	小		良好	長石、角閃石、石英・少量	橙色	表面に炭付着
	17	第11図	SH3	SH03 一括11	土師器	甑	(7.5+α)	(19.0)		小	内面:ヘラケズリ 外面:ナデ	良好	長石、角閃石、中量 石英・少量	橙色	
	18	第11図	SH3	SH03 一括181	土師器	甕	(8.2+α)	(24.0)		小	内面:ヨコナデ,ナデ,ヘラケズリ 外面:ハケのちヨコナデ,ハケ目	良好	白雲母・多量 長石・少量	橙色	
	19	第11図	SH3	SH03 一括179	土師器	甕	(6.8+α)	(34.0)		小	内面:ヘラケズリ 外面:ナデ	良好	長石・中量 石英、白色粒子・少量	淡橙色	
	20	第11図	SH3	SH03 一括211	土製品	土錘	長さ 5.1	幅 1.2	重さ 8 g		手びねり	良好	石英・中量 角閃石・少量	暗黒色	炭付着
	21	第12図	SH4	SH04 一括95	須恵器	壺	(6.7+α)				外面下部:ヘラケズリ	良好	白色粒子、黒色粒子・中量	暗灰色	
	22	第12図	SH4	SH04 マガ玉	石製品	勾玉	長さ 3.9	幅 1.9						灰色	滑石
	23	第12図	SH4	SH04 刀子和3	鉄製品	刀子	刃幅 1.2								
	24	第15図	SH5	SH05 一括	須恵器	坏蓋	(3.6+α)	(13.2)		小片	外面:上部回転ヘラケズリ・下部水引き		精選	灰色/外面:自然釉	
	25	第15図	SH5	SH05 P8	須恵器	坏蓋	(2.1+α)	(11.0)		20%	内面:ナデ 外面:上部ヘラナデ/下部ヨコナデ	良好	長石、角閃石・少量	灰色	
	26	第15図	SH5	SH05 表一括90	須恵器	坏蓋	(2.1+α) (3.2+高台)	(11.4)	受け部径 (9.5)	30%	内面:羽転ヨコナデ		1mm以下の石英、白色粒子・多量 角閃石、赤色粒子・微量	暗灰色	
	27	第15図	SH5	SH05 一括	須恵器	坏蓋	(2.0+α)			小片	内面:水引き 外面:羽転ヘラケズリ・ヨコナデ		精選	灰色	
	28	第15図	SH5	SH05 表一括40	須恵器	坏身	2.2	(8.8)		1/2	内面:ナデ 外面:ヘラ調整 底部:ヘラ切り	良好	雲母	黄灰色	
	29	第15図	SH5	SH05 一括	須恵器	坏身	(3.6+α)			小片	内面:ヨコナデ 底部:ヘラ切りのちナデ	良好	石英・中量　角閃石、長石・少量	暗灰色	内外口縁部スス付着
	30	第15図	SH5	SH05 表一括48	須恵器	坏身	4.2	12.6	8.0	70%	内外面:ヨコナデ 底部:ヘラ切り	良好	角閃石、砂粒・少量 0.5～1mm大の石英含む	明るい明灰褐色 一部赤変	
	31	第15図	SH5	SH05 表一括53	須恵器	坏	(2.82+α)		(8.45)	小片	ヨコナデ	良好	石英・多量　砂粒	内面:灰色 外面:薄い褐色	器付にヘラによるキザミあり
	32	第15図	SH5	SH05 表一括46	須恵器	坏	(2.8+α)		(8.75)	小片	内外面:ヨコナデ 底部:ヘラ調整	良好	角閃石・少量 砂粒・多く含む	灰色	
	33	第15図	SH5	SH05 一括	須恵器	高坏	−			小片			わずかに砂粒を含む	灰色	脚部貼り付け
	34	第15図	SH5	SH05 一括	須恵器	高坏	−			小片	ヨコナデ		砂粒、石英を含む(小粒色)	赤みがかった灰色	ヘラ記号あり
	35	第15図	SH5	SH05 表一括43	須恵器	甕	(1.3+α)	(44.0)		小片	回転ヨコナデ	良好	1mm以下の白色粒子、黒色粒子・多量　石英・微量	淡灰色/内面:透明釉	
	36	第15図	SH5	SH05 表一括59	須恵器	壺	(4.15+α)		(8.0)	小片	回転ヨコナデ		2mm以下の白色粒子・多量	灰色	
	37	第15図	SH5	SH05 表一括24	須恵器	壺	(4.4+α)		(15.6)	小片	内面:ヨコナデ 外面:羽転ヘラケズリ		1mm以下の白色粒子・多量　黒色粒子・中量　石英・少量　角閃石・微量	暗灰色	
	38	第15図	SH5	SH05 表一括	陶器 (緑釉)	椀	(3.8+α)	(11.6)		小片	内面:羽転ヨコナデ 外面:羽転ヘラケズリ	良好		白土の色調:黄灰色 緑釉	
	39	第15図	SH5	SH05 一括	土師器	坏	(4.3+α)			小片	内面:頃又 外面:ヘラミガキ	良好	雲母微粒子・中量　長石、角閃石、白色粒子・少量	明橙色	

遺物観察表 2

調査次数	遺物番号	図版番号	出土地点	注記	種別	器種	法量 (cm) 口径	底径	底高	残存	調整/文様	焼成	胎土	色調/釉付着剤	備考
一次調査	40	第15図	SH5	SH05 一括	土師器	坏身	(4.8+α)			小片	内面:摺又 外面:ヘラミガキ	良好	雲母微粒子・多量 赤色粒子・少量	橙色	
	41	第15図	SH5	SH05 一括275	土師器	坏身	(7.1+α)			小片	内面:摺又 外面:ヘラミガキ	良好	雲母微粒子・多量 長石、赤色粒子・中量	橙色	
	42	第15図	SH5	SH05 一括	土師器	甕	3.6	(13.0)	6.2	60%	内外面:ナデ 底部:ヘラ切のちナデ/板目圧痕あり	良好	0.5mm大の白色粒子・中量 黒色粒子・少量	暗橙色	
	43	第15図	SH5	SH05 表一括2	土師器	坏	4.2	12.6	6.6	70%	内外面:ナデ 底部:ヘラ切りのまま	良好	0.5~1mm大の黒色粒子・少量 0.5~1mm大の白色粒子・少量 0.5~1mm大の赤色粒子・微量	淡橙色	
	44	第15図	SH5	SH05 一括	土師器	坏	(4.1+α)			30%	回転ナデ	良好	石英、角閃石、白色粒子・少量	黄橙色	
	45	第15図	SH5	SH05 表一括741	土師器	坏	4.2	(12.2)	8.8	70%	内面:ヨコナデ 底部:ヘラ切りのまま	良好	角閃石、白色粒子・少量 石英・極少量	明るい橙色	底部に与巻き痕 放淵巻き痕
	46	第15図	SH5	SH05 一括	土師器	坏	(1.7+α)			小片	内外面:ヨコナデ 底部:回転ヘラ切り	良好	角閃石、白色粒子・少量	橙褐色	粘土紐の痕跡残す
	47	第15図	SH5	SH05 一括	土師器	坏	(2.8+α)			小片	内外面:回転ナデ 底部:ヘラ切りのまま	良好	白色粒子・中量 赤色粒子・少量	明橙色	
	48	第15図	SH5	SH05 一括479	土師器	坏	4.2	(12.5)		40%	内面:撫込み痕又は工具痕 外面:ナデ 底部:ヘラ切りのちヘラ調整	良好	白色粒子・中量 石英、角閃石・少量	橙色	
	49	第15図	SH5	SH05 一括	土師器	坏	(2.8+α)			50%	内外面:ヨコナデ 見込み:調整 底部:ヘラ切り	良好	石英・多量 角閃石、白色粒子・少量	黄橙色	
	50	第15図	SH5	SH05 表一括534	土師器	坏	3.3	(12.5)	(6.3)	70%	表面劣化のため調整不明	良好	角閃石、石英、赤色粒子・少量	淡茶白色	
	51	第16図	SH5	SH05 表一括107	土師器	甕	(5.0+α)		(8.2)	小片	内面:ヘラミガキ 外面:上部ヘラミガキ・下部ヘラケズリ 底部~高台:ヨコナデ	良好	角閃石・やや多い 石英・粗子、長石・少量 雲母・細かい、粗子 黒曜石・極少量	明るい橙色	
	52	第16図	SH5	SH05 表一括431	土師器	甕	(2.05+α)		(8.6)	小片	内面:ヘラミガキ 外面:胴部ヘラケズリ・高台ヨコナデ 底部:ヘラケズリ	良好	長石、石英、角閃石、砂粒・少量	明るい橙色	
	53	第16図	SH5	SH05 表一括	土師器	甕	–			小片	ヨコナデ	良好	角閃石、白色粒子、赤色粒子・少量	明るい橙色	
	54	第16図	SH5	SH05 表一括533	土師器	皿	1.65	(13.0)	(8.5)	小片	内外面:ヨコナデ 底部:ヘラ調整	良好	角閃石、石英、赤色粒子・少量	明るい橙色	
	55	第16図	SH5	SH05 表一括528	土師器	皿	1.9	(13.6)		小片	内外面:ヨコナデ 底部:ヘラ調整	良好	石英、角閃石、白色粒子、黒色粒子・少量	黄白色	
	56	第16図	SH5	SH05 表一括1	土師器	鉢	4.6	16.2	8.4	100%	内面:ナデ 外面:ナデ/一部にヘラケズリ 底部:ヘラ切り	良好	0.5mm大の白色粒子・中量 石英、角閃石・少量	橙色	
	57	第16図	SH5	SH05 一括	土師器	耳皿	3.9			70%	回転ヘラ切り 外面凹線状のロクロ目を残す	良好	石英、角閃石、白色粒子・少量	明橙色	
	58	第16図	SH5	SH05 表一括	土師器	鉢	(4.2+α)	(11.5)		小片	口縁部:ヨコナデ 内面:ナデ 外面:上部ヨコナデ・下部ヘラケズリ	良好	角閃石、石英、赤色粒子・少量	橙色	内面に粘土接合痕あり
	59	第16図	SH5	SH05 一括	土師器	脚付き盤?	(3.1+α)	(14.0)		小片		良好	長石・中量 角閃石、白色粒子、赤色粒子・少量	明灰黄色	
	60	第16図	SH5	SH05 P15	土師器	甕	(10.2+α)	(23.2)		小片	内面:横方向ハケ目・指ナデ 外面:ハケ目/頸部ハケ目のちナデ	良好	白雲母・多量 長石・少量	橙色	
	61	第16図	SH5	SH05 表一括	土師器	甕	(4.6+α)			小片	口縁部:ヨコナデ 内面:上部ナデ、下部ケズリ 外面:ナデ	良好	角閃石・普通 石英、白粒・少量	橙色	粘土接合痕あり 外面に指圧痕あり
	62	第16図	SH5	SH05 一括483	土師器	甕	(6.3+α)	(28.4)		小片	口縁部:ヨコナデ 外面上部:指圧痕 内外面:ナデ	良好	石英・多量 角閃石、黒色粒子・少量	茶橙色	
	63	第16図	SH5	SH05 一括108	土師器	甕	(4.3+α)	(19.4)		小片	内面:ヘラケズリ 外面:ハケ目・沈線	良好	長石、白色粒子、黒色粒子・中量 石英・少量	黄橙色	
	64	第16図	SH5	SH05 一括480	土師器	甕	(9.5+α)	(17.6)		小片	口縁部:ヨコナデ 内外面:上部:指圧痕 内面:ヘラケズリ 外面:ナデ	良好	石英・多量 角閃石、白色粒子、赤色粒子・少量	茶褐色	
	65	第16図	SH5	SH05 一括	土師器	甕	(6.8+α)	(17.0)		小片	口縁部:ヨコナデ 内面:横方向ナデ 外面:ハケ目調整(カキ目風)	良好	石英、角閃石・中量 赤色粒子・少量	灰黄色	反転復元
	66	第16図	SH5	SH05 一括	土師器	鉢	(4.6+α)	(11.7)		小片	口縁部:ヨコナデ 外面:ナデ~ヘラケズリ	良好	石英・多量 角閃石・少量	灰黄色	炭化殻付着
	67	第16図	SH5	SH05 表一括538	黒色土器	甕	(4.2+α)		(7.8)	小片	内面:ミガキ 外面:上部ヨコ方向ヘラミガキ・下部ヘラケズリ・高台ヨコナデ 底部:ヘラ調整	良好	角閃石、石英・少量 白粒子・多量 石英・微量	内面:黒色 外面:明るい橙色	
	68	第16図	SH5	SH05 一括517	須恵土器	甕	(3.8+α)			小片	外面:ハケ目	良好	石英・多量 角閃石・中量 白色粒子・少量	黄橙色	黒斑あり
	69	第16図	SH5	SH05 表一括1001	土製品	土錘	長さ 5.0	幅 1.2	重さ 5g	ほぼ完形	手づくね		1mm以下の赤色粒子・中量 白色粒子・少量 石英、角閃石・微量	黄橙色	
	70	第16図	SH5	SH05 表一括646	土製品	土錘	長さ (4.9+α)	幅 1.35	重さ 8g	97%	手づくね		1mm以下の白色粒子、赤色粒子・少量 石英・微量	暗灰色	瓦質
	71	第16図	SH5	SH05 表一括1007	土製品	土錘	長さ (3.1+α)	幅 1.1	重さ 3g	80%	手づくね		1mm以下の角閃石・少量 石英・微量	黄灰色	
	72	第16図	SH5	SH05 表一括1004	土製品	土錘	長さ (3.8+α)	幅 1.1	重さ 4g	98%	手づくね		1mm以下の角閃石、赤色粒子・微量	黄灰色	
	73	第16図	SH5	SH05 表一括1003	土製品	土錘	長さ (5.7+α)	幅 1.8	重さ 13g	98%	手づくね		1mm以下の石英・少量 角閃石、赤色粒子・微量	淡橙灰色	
	74	第16図	SH5	SH05 表一括1002	土製品	土錘	長さ (3.9+α)	幅 1.9	重さ 7g	80%?	手づくね		1mm以下の角閃石・少量 白色粒子・微量	橙色	
	75	第16図	SH5	SH05 表一括	土製品	土錘	長さ (4.3+α)	幅 1.4	重さ 7g	ほぼ完形	手づくね		1mm以下の石英・少量 角閃石、白色粒子・微量	灰橙色	

遺物観察表 3

調査次数	遺物番号	図版番号	出土遺構	注記	種別	器種	法量 (cm) 器高	口径	底径	残存	調整/文様	焼成	胎土	色調/釉付着剤	備考
1調査区	76	第16図	SH5	SH05 表一括106	土製品	土錘	長さ 5.4	幅 1.4	重さ 11 g	ほぼ完形	手づくね	良好	1mm以下の角閃石・多量 石英・少量 赤色粒子・微量	黄灰色	
	77	第16図	SH5	SH05 表一括410	石製品	砥石	長さ (7.8+α)			小片					泥岩製
	78	第18図	SH6	SH06 一括171	須恵器	坏蓋	(1.9) 口ちょう高 0.15	(15.0)	受け部径 (12.7)	20%	内面:回転ヨコナデ 外面:上部回転ヘラ切りのちナデ・回転ヨコナデ		1mm以下の白色粒子・多量 石英、赤色粒子・微量	灰色	
	79	第18図	SH6	SH06 一括176	須恵器	坏身	(3.6+α) 口ちょう高 0.35	(13.1)	受け部径 (10.8)	20%	内面:回転ヨコナデ 外面:回転ヨコナデ・回転ヘラケズリ	良好	1mm以下の白色粒子・少量 石英、角閃石・微量	灰色	
	80	第18図	SH6	SH06 一括101	須恵器	高坏	(4.2+α)	(15.0)		30%	内面:回転ヨコナデ 外面:回転ヨコナデ・ヘラケズリ・ナデ	甘い	1mm以下の角閃石、白色粒子・中量 石英・少量 赤色粒子・極微量	内面:淡黄灰色 外面:黄灰色	口縁部下にススあり
	81	第18図	SH6	SH06 一括102	土師器	椀	(4.2+α)		6.5	70%	内面:ヘラミガキ 外面:上部ヘラミガキ/胴部下方に粘土帯あり/下部ナデ 底部:ヘラ切りのちナデ調整		2mm以下の角閃石・多量 1mm以下の石英・多量 赤色粒子・微量	内面:灰橙色 外面:橙色	
	82	第18図	SH6	SH06 一括93	土師器	鉢	(7.3+α)	(30.1)		小片	口縁部:回転ヨコナデ 内面:ヘラケズリ 外面:ハケ目	良好	2mm以下の白色粒子・少量・1mm以下の石英、角閃石・多量 赤色粒子・微量	内面:明橙色 外面:淡橙色	外面スス付着
	83	第18図	SH6	SH06 一括98	黒色土器	椀	(2.45+α)		8.3	40%	内面:ヘラミガキ 外面:高台一部ボ:回転ヨコナデ 底部:ヘラ調整	良好	1mm以下の石英、角閃石・少量 赤色粒子・極微量	内面:黒色 外面:黄灰色	
	84	第18図	SH6	SH06 一括10	古代瓦	平瓦	幅 (3.0+α)		厚さ 2.3	小片		良好		橙色	
	85	第20図	SH7	SH07 一括6	須恵器	坏蓋	(2.6+α)		(8.4)		外面:上部回転ヘラ調整・胴部ヨコナデ	良好	1mm以下の黒色粒子・白色粒子、赤色粒子・中量	内面:本地色 外面:黒灰色/自然釉	内面に釉の黒玉付着
	86	第20図	SH7	SH07 一括5	土師器	坏身	(3.4+α)	(11.4)			ナデ		1mm以下の白色粒子・多量 黒色粒子・微量	内面:地灰色 外面:明灰色	内面に自然釉ちあり 口縁部の歪み形状に重ね焼きの痕跡あ
	87	第20図	SH7	SH07 一括21	須恵器	坏身	(5.2+α)	(10.2)			外面:下部ヘラ調整 底部:ヘラ切りのちヘラ調整/ヘラ記号あり	良好	1mm以下の石英・1~2個 微母・微量	灰灰色	
	88	第20図	SH7	SH07 一括38	須恵器	皿	(2.4+α)	(13.0)			内面:ナデ 外面:ナデ 底部:ヘラ調整	良好	1mm以下の黒色粒子・多量 赤色粒子・少量 石英・微量	灰灰色(部分的に淡橙色)	
	89	第20図	SH7	SH07 一括202	須恵器	鐘	–				内面:四心円当て痕跡 外面:格子目タタキのちカキ目痕	良好	1mm以下角閃石、白色粒子、赤色粒子・少量	灰色	
	90	第20図	SH7	SH07 一括20	土師器	坏	(3.9+α)	(13.8)		20%	回転ヨコナデ	良好	1mm以下の角閃石・多量 石英、赤色粒子・少量 白色粒子・微量	内面:橙色 外面:黄橙色	
	91	第20図	SH7	SH07 一括51	土師器	坏	(1.3+α)		(7.2)		内面:降雨痕状の痕跡あり 外面:ナデ 底部:回転ヘラ切りのちナデ	良好	2mm以下の角閃石・中量 1mm以下の石英・少量 雲母、赤色粒子・微量	内外面とも明橙色と淡橙色に分かれる	
	92	第20図	SH7	SH07 一括50	土師器	坏	(1.5+α)				内面:見込みに降雨き状の段々あり 底部:回転ヘラ切りのちナデ	良好	2mm以下の石英・微量 1mm以下の黒色粒子・赤色粒子・微量	内面:明橙色 外面:淡橙色	
	93	第20図	SH7	SH07 一括52	土師器	坏	(1.8+α)		(7.6)		底部:回転ヘラ切りのちナデ	良好	2mm以下の角閃石・少量 1mm以下の黒色粒子・中量 石英・少量	淡橙色	底部に焼成時の黒斑
	94	第20図	SH7	SH07 一括57	土師器	托?	(3.2+α)			小片	回転ヨコナデ	良好	1mm以下の石英・中量 角閃石、白色粒子・少量 白色粒子・極微量	内面:淡灰色 外面:橙色	
	95	第20図	SH7	SH07 一括27	土師器	鐘	(5.9+α)	(23.2)		小片	内面:口縁部ハケ目・胴部ナデ・調整ハケ目 外面:口縁部~胴部回転ヨコナデ・調整ハケ目	良好	2mm以下の石英・多量 1mm以下の角閃石・少量 白色粒子・多量 赤色粒子・極微量	灰黄色 外面の刀縁の下一段橙色	
	96	第20図	SH7	SH07 一括7	土師器	鐘	(3.4+α)	(16.6)		小片	口縁部:ヨコナデ 内面:ヘラケズリ	良好	1mm以下の石英・多量 角閃石、白色粒子・中量 赤色粒子・微量	内面:黄橙色(口縁)~淡黄色 外面:橙色	
	97	第20図	SH7	SH07 一括25	土製品	紡手	厚 (5.3+α)	幅 2.5					2mm以下の石英・中量 角閃石・微量	外:黄色 中:橙色	
	98	第20図	SH7	SH07 一括191	黒色土器	椀	(5.1+α)	(17.6)			内面:ヘラミガキ 外面:ヨコナデ	良好	2mm以下の角閃石・少量 1mm以下の石英、黒色粒子・中量 赤色粒子・少量	内面:黒色 外面:淡橙色	
	99	第20図	SH7	SH07 一括45	黒色土器	椀	(2.5+α)		(8.2)		内面:ミガキ 外面:ヘラケズリ (の方高台貼付) 底部:ヘラ調整	良好	1mm以下の黒色粒子、赤色粒子・少量	内面:黒色 外面:淡橙色	
	100	第22図	SB1	SB01 P19フク土	須恵器	平瓶 (注口部)	(4.2+α)	(7.0)			ヨコナデ	良好	0.5mm以下の白色粒子・少量	暗灰色	
	101	第22図	SB1	SB01 P26一括2	須恵器	壺	(2.4+α)	(20.0)		小片	ナデ	良好	0.5mm以下の白色粒子・中量	暗灰色	
	102	第22図	SB1	SB01 P15フク土	土師器	坏	(3.3+α)	(13.0)		小片	内面:ナデ	やや不良	0.5~1mm大の黒色粒子・多量	黄橙色	
	103	第22図	SB1	SB01 P47	土師器	坏	(3.4+α)			小片	内面:ナデ	良好	精緻	黒茶色	
	104	第22図	SB1	SB01 P26一括1	土師器	椀	(3.4+α)		7.6	小片	内面:ナデ/ヘラケズリ/見込み:ヘラ切りのちナデ 外面:ナデ 底部:ヘラ切りのちナデ	良好	0.5mm大の石英、白色粒子・少量	橙色	
	105	第22図	SB1	SB01 P26一括4	土師器	鐘	(8.3+α)			小片	内面:ナデ・指頭圧痕あり 外面:ナデ	良好	0.5mm大の角閃石・少量 1~5mm大の砂粒・少量 0.5mm大の白色粒子・微量	内面:暗黄色 外面:黄橙色	外面にススが付着
	106	第22図	SB1	SB01 P15	土師器	鉢	(9.6+α)			小片	内面:ヘラケズリ 外面:ナデ?	良好	0.5mm大の石英・多量 黒色粒子・中量 角閃石、白色粒子・少量	淡橙色	
	107	第22図	SB1	SB01 P47	土製品	土錘	長さ 5.8	幅 1.3	重さ 10 g	100%	手づくね	良好	0.5mm以下の石英、白色粒子・微量	黄橙色	
	108	第22図	SB1	SB01 P47	土製品	土錘	長さ 6.5	幅 1.5	重さ 11 g	100%	手づくね	良好	0.5mm以下の石英、黒色粒子・微量	暗茶灰色	

遺物観察表 4

調査次数	遺物番号	図版番号	出土地点	注記	種別	器種	法量 (cm) 口径	底高	底径	残存	調整/文様	焼成	胎土	色調/釉付着薬	備考
一次調査	109	第26図	SB3	SB03 P48	弥生土器	壺	(3.5+α)			小片	□縁部:ヨコナデ 内面:ナデ 外面:縦のハケ目	良好	0.5mm大の角閃石,白色粒子,黒色粒子少量	暗茶白色	
	110	第34図	SK1	SK01 P29	須恵器	坏蓋	4.4	(13.0)		45%	回転ヘラケズリのちナデ	良好	精緻 0.5mm大の白色粒子,微量	内面:淡灰色 外面:灰色	
	111	第34図	SK1	SK01 一括7	須恵器	坏蓋	(4.4+α)	(12.8)			外面:ヘラナデ/ナデ	良好	0.5mm大の黒色粒子・微量	茶白色	
	112	第34図	SK1	SK01 P47	須恵器	坏蓋	(3.8+α)	(14.0)		小片	外面:回転ヘラナデ/ヨコナデ	良好	0.5mm大の白色粒子・少量	灰色	□縁部痕跡あり
	113	第34図	SK1	SK01 P22	須恵器	坏蓋	(3.3+α)	(13.0)		小片	ヨコナデ	良好	精選 0.1mm大の黒色粒子,白色粒子・少量	灰色	
	114	第34図	SK1	SK01 一括70	須恵器	坏蓋	(1.2+α)		6.2	小片	外面上部:回転ヘラ切りのちナデ 内外面:ナデ	良好	精緻	淡灰色	
	115	第34図	SK1	SK01 P12	須恵器	坏蓋	(2.1+α)			小片	ヘラ切り未調整	良好	0.5mm大の黒色粒子・微量	灰白色	
	116	第34図	SK1	SK01 一括10	須恵器	坏蓋	(2.8+α)	(11.6)		小片	内面:ナデ 外面底部:手持ちヘラ調整	良好	精緻(精選)	暗灰色	
	117	第34図	SK1	SK01 P23	須恵器	坏	5.6	(12.0)	(4.4)	30%	内外面:回転ヨコナデ 底部:ヘラナデ	良好	精緻	淡茶灰色	
	118	第34図	SK1	SK01 P42-11-a	須恵器	坏身	4.6	13.6	6.0	85%	回転ヘラケズリのちナデ	良好	0.5mm大の黒色粒子・微量	内面:灰色 外面:灰茶色	
	119	第34図	SK1	SK01 P1	須恵器	坏身	(4.1+α)	(12.4)		小片	外面:ナデ/ヘラナデ	良好	精緻	灰白色	
	120	第34図	SK1	SK01 一括29	須恵器	高坏	(3.0+α)	(6.0)		小片	ナデ	良好	精緻(砂粒少々あり)	灰色	
	121	第34図	SK1	SK01 P7	須恵器	高坏	(3.7+α)	(13.2)		小片	ナデ	良好	砂粒混ざる	灰色	
	122	第34図	SK1	SK01 P51	須恵器	高坏	(3.1+α)	(9.2)		小片	ヨコナデ	良好	精緻	茶褐色	
	123	第34図	SK1	SK01 P33	須恵器	鉢	(2.4+α)	6.4			内外面:ナデ	良好	0.5mm大の白色粒子・少量 0.5mm大の黒色粒子・微量	灰色	
	124	第34図	SK1	SK01 P21	須恵器	高坏	7.6	(13.6)	8.6	65%	内外面:回転ヘラケズリのちナデ	やや不良	0.5mm大の黒色粒子・微量	灰茶色	
	125	第34図	SK1	SK01 P9	須恵器	高坏	(5.0+α)		9.2	不明	内外面:ヘラケズリのちナデ	良好	精緻 0.5mm大の黒色粒子・微量	灰色	
	126	第34図	SK1	SK01 P46	須恵器	高坏	9.4	(10.8)	9.4	65%	内外面:回転ヘラケズリのちナデ	堅緻	精緻	褐灰色	
	127	第34図	SK1	SK01 P31	須恵器	高坏	−	最大胴(5.0)			ナデ 内面:しぼり痕 外面:凹線2本	良好	精緻	暗灰色	透かしあり
	128	第34図	SK1	SK01 P32	須恵器	高坏	(5.8+α)	(15.6)		不明	回転ヘラケズリのちナデ	良好	精緻	黒灰色	
	129	第34図	SK1	SK01 P26	須恵器	脚部	(3.8+α)		(13.0)	小片	ナデ	良好	精選 0.1mm大の黒色粒子,白色粒子・少量	杯茶褐色	
	130	第34図	SK1	SK01 P18	須恵器	脚部	(6.0+α)		(15.2)	小片	ナデ	良好	精選 0.1mm大の白色粒子・多量 黒色粒子・微量	暗灰色	穿孔あり
	131	第34図	SK1	SK01 P25	須恵器	脚部	(5.3+α)		(16.0)	小片	ナデ	良好	精選 0.1mm大の白色粒子・多量 黒色粒子・少量	淡灰色	穿孔3つであろうか?
	132	第34図	SK1	SK01 P24	須恵器	鐙				小片	内面:指ノ爪の当て具痕 外面:ダタキ目痕	良好	精選 0.1mm大の黒色粒子,白色粒子・多量	淡灰色/外面:透明釉・薄釉	
	133	第34図	SK1	SK01 P-19	土師器	坏	5.0	(18.2)	(6.8)	40%	内面:横又・丹塗り 外面:ヘラミガキ・丹塗り	良好	金雲母・多量 白色顆粒粒・少量	橙褐色	
	134	第35図	SK1	SK01 P-10	土師器	坏	(6.0+α)	(17.0)	−	20%	内面:横又 外面:ヘラミガキ	良好	雲母・多量 白色顆粒粒・中量	橙褐色	
	135	第35図	SK1	SK01 一括74	土師器	坏	−	(15.9)	−	20%	内面:横又 外面:ヘラミガキ	良好	斜長石・多量 白色顆粒粒・少量	橙褐色	
	136	第35図	SK1	SK01 P-5	土師器	坏	−	(11.4)	−		内面:横又 外面:ヘラミガキ	良好	斜長石・多量	橙褐色	
	137	第35図	SK1	SK01 P39	土師器	坏	(4.1+α)	(15.0)			内面:横又 外面:ヘラミガキ	良好	2mm以下の長石・少量 1mm以下の石英・多量 雲母・少量 赤色粒子・微量	明褐色	
	138	第35図	SK1	SK01 P49	土師器	坏	(3.7+α)	(17.4)			内面:横又 外面:ミガキ		2mm以下の石英・中量 角閃石・微量 1mm以下の雲母・中量 黒色粒子,赤色粒子・少量	明褐色	化粧土か?
	139	第35図	SK1	SK01 P14	土師器	坏	(3.1+α)		(11.0)		内面:横又 外面:ミガキ	良好	3mm以下の石英・中量 1mm以下の雲母・多量 白色粒子,赤色粒子・少量	橙色	
	140	第35図	SK1	SK01 一括77	土師器	坏	(2.1+α)		(5.0)		内面:横又 外面:ミガキ		3mm以下の長石・微量 2mm以下の石英・少量 1mm以下の赤色粒子,雲母・少量	茶褐色	
	141	第35図	SK1	SK01 P20	土師器	鉢?	(6.4+α)	(23.6)			外面:胴部ヘラケズリ	良好	2mm以下の角閃石・中量 1mm以下の黒色粒子,赤色粒子・中量 石英・少量	内面:暗橙色 外面:橙色 口縁部:赤彩あり	
	142	第35図	SK1	SK01 P50	土師器	鐙	(4.7+α)	(21.6)			内面:口縁部ヨコナデ/胴部横方向申目 外面:胴部ハケ目のちナデ/鉄心縦方向申目模様	良好	1mm以下の黒色粒子,白色粒子・中量 雲母,赤色粒子・微量	淡橙色	
	143	第35図	SK1	SK01 P-57	土師器	鐙	−	(16.4)	−	小片	内面:ヨコナデ−ケズリ 外面:ヨコナデ−ハケ目	良好	斜長石・多量 砂粒・多量 石英・中量	淡橙褐色	
	144	第35図	SK1	SK01 P-55	土師器	鐙	−	−	−	小片	内面:ヨコナデ 外面:ヨコナデ−ケズリ	良好	角閃石・中量 斜長石・多量 石英・中量	淡赤褐色	

遺物観察表 5

調査次数	遺物番号	図版番号	出土遺構	注記	種別	器種	法量 (cm) 器高	口径	底径	残存	調整/文様	焼成	胎土	色調/釉付着剤	備考
1 調査区	145	第35図	SK1	SK01 P-56	瓦?	一	—	(24.4)	—	小片	内面:ヨコナデ→粗状工具でヨコナデ後タテナデ 外面:ヨコナデ→ケズリ後指おさえ→タテナデ	良好	角閃石・多量 斜長石・多量 石英・中量	淡黄褐色	
	146	第35図	SK1	SK01 P11	土師器	鉢?	(8.0+α)	(27.4)			□縁部:ヨコナデ 内面:ハラケズリ 外面:ナデ	良好	角閃石・多量 1mm以下の角閃石・多量 1mm以下の石英・多量 雲母・少量	暗茶褐色	
	147	第35図	SK1	SK01 P38	土師器	甕	(5.6+α)				内面:ナデ 外面:ハケ目?	良好	雲母、石英、0.5mm大の白色粒子・少量	淡茶色	
	148	第35図	SK1	SK01 P35	土師器	甕	(10.4+α)			小片	内面:不定方向のハケ目 外面:縦方向のハケ目	良好	0.5mm大の石英、白色粒子、赤色粒子・少量	淡橙色	
	149	第35図	SK1	SK01 P4	土師器	壺	—				内面:ナデ 外面:ミガキ	良好	0.5mm大の石英、角閃石、白色粒子・多量	橙色	
	150	第35図	SK1	SK01 P54	土師器	甕					本体:ハケ目/肩手:ナデ 内面:ナデ/ハケ目	良好	0.5mm大の白色粒子・少量	に赤い黄土色	
	151	第37図	SK2	SK02 一括25	土師器	甕	(8.7+α)	(33.2)		小片	□縁部:ヨコナデ 内面:ユビオサエのちナデ 外面:ナデ	良好	0.1~0.5mm大の黒色粒子、白色粒子・多量 0.1mm以下の石英、角閃石・少量		外面一部スス付着
	152	第37図	SK2	SK02 一括23	土師器	甕	(5.0+α)	(26.6)		小片	□縁部:ヨコナデ 内外面:ナデ	良好	0.1mm大の石英、黒色粒子、白色粒子・多量 赤色粒子・微量		
	153	第37図	SK2	SK02 一括11	土製品	壁土?	縦 (4.3+α)	横 (5.3+α)	高さ (1.8+α)			良好	0.1mm大の白色粒子・少量 スサ入り	藁のあとがわかる	
	154	第39図	SK3	SK03 P-39,13	須恵器	坏	5.9	14.7	6.8		内外面:ヨコナデ 底部:ヘラ切りのちナデ	良好	5mm大のレキ1個 白色微粒子・少量 斜長石・中量	浅灰色	
	155	第39図	SK3	SK03P49 +下層一括4	土師器	坏	4.5	(13.0)	(7.0)	60%	内面:ナデ/下部一底部:ヘラケズリのちナデ	良好	0.5mm大の赤色粒子・少量 黒色粒子・微量	淡橙色	外面に墨書あり
	156	第39図	SK3	SK03 P-22,33	土師器	坏	4.1~4.5	12.6	6.7	2/3 破片	内外面:ヨコナデ 底部:切り離しで不明、良く擦でている。	良好	角閃石・中量 斜長石・多量 白色微粒子	明茶褐色	底部に粘土のかたまり付着
	157	第39図	SK3	SK03 下層一括1	土師器	坏	2.5	10.7	6.7	完形品	内外面:ヨコナデ 底部:ヘラ切り後ナデ痕残あり	良好	斜長石・多量 角閃石・中量 白色微粒子・中量	淡黄褐色	
	158	第39図	SK3	SK03 下層一括3	土師器	坏	2.2~2.6	10.8	7.4	ほぼ完形	内外面:ヨコナデ 底部:ヘラ切り後ナデ痕残あり	良好	斜長石・多量 角閃石・中量	淡黄褐色	□縁部一部欠損
	159	第39図	SK3	SK03 P-38,49	土師器	坏	2.5	10.8	7.4	ほぼ完形	内外面:ヨコナデ 底部:ヘラ切り後ナデ痕残あり	良好	斜長石・多量 角閃石・少量	淡黄褐色	□縁部一部欠損
	160	第39図	SK3	SK03 P-49一括	土師器	坏	2.4~2.5	10.8	6.5	4/5 破片	内外面:ヨコナデ 底部:切り離し後ナデ	良好	斜長石・多量 白色微粒子・中量	淡黄褐色	
	161	第39図	SK3	SK03 P-45	土師器	坏	2.4	10.8	7.2	4/5 破片	内外面:ヨコナデ 底部:切り離し後ナデ痕残あり	良好	斜長石・多量 角閃石・少量 赤色微粒子・少量	淡黄褐色	
	162	第39図	SK3	SK03 P-8	土師器	坏	2.3~2.5	11.2	7.1	完形品	内面:ヨコナデ一指ナデ 外面:摩滅が著しく調整不明瞭 底部:ヘラ切り後ナデ	良好	斜長石・多量 角閃石・中量	淡黄褐色	
	163	第39図	SK3	SK03 P-40	土師器	坏	2.2	(10.8)	5.2		内面:ヨコナデ一指による雑なナデ 外面:ヨコナデ 底部:ヘラ切り後ナデ、板目あり	良好	斜長石・多量 角閃石・中量	淡黄褐色~淡灰褐色	
	164	第39図	SK3	SK03 P-29	土師器	坏	2.5~2.7	10.5	7.4	ほぼ完形	内面:ヨコナデ一ヨコナデ後指ナデ 外面:ヨコナデ 底部:ヘラ切り後雑なナデ仕上げが異常に汚い、板目あり	良好	斜長石・多量	淡黄白色 外面に黒斑あり	
	165	第39図	SK3	SK03 P-15	土師器	坏	2.3	10.9	8.2	完形品	内面:ヨコナデ一指ナデ 外面:ヨコナデ 底部:ヘラ切り後雑なナデ、板目あり	良好	斜長石・多量	淡黄白色	
	166	第39図	SK3	SK03 P-4	土師器	坏	2.25~2.35	10.8	7.6	完形品	内面:ヨコナデ一指ナデ 外面:ヨコナデ 底部:ヘラ切り後雑なナデ	良好	斜長石・多量 1mm大の白色レキ・少量	淡黄褐色~淡赤褐色	
	167	第39図	SK3	SK03 P-23	土師器	坏	2.6	(11.0)	7.8	1/3 破片	内外面:ヨコナデ 底部:ヘラ切り後雑なナデ、板目あり	良好	斜長石・多量	淡黄白色	
	168	第39図	SK3	SK03 P-43	土師器	坏	2.4	10.1	7.6	完形品	内外面:ヨコナデ 底部:ヘラ切り後ナデ	良好	斜長石・多量 白色微粒子・少量 雲母粒子・少量 赤色微粒子・少量	内面:赤褐色~黒褐色 外面:淡赤褐色	
	169	第39図	SK3	SK03 P-47	土師器	坏	1.9~2.1	10.2	7.7	完形品	内面:ヨコナデ一指ナデ 外面:ヨコナデ 底部:切り離し後雑なナデ	良好	斜長石・多量	淡赤褐色	
	170	第39図	SK3	SK03 P-10	土師器	坏	2.5	(10.7)	6.6	2/3 破片	内外面:ヨコナデ 底部:ヘラ切り後ナデ	良好	斜長石・多量 角閃石・中量 白色微粒子・少量	赤褐色	
	171	第39図	SK3	SK03 P-17	土師器	坏	2.1~2.4	10.3	6.2	完形品	内面:ヨコナデ 外面:ヨコナデ、ホリ痕残る 底部:ヘラ切り後ナデ	良好	斜長石・多量 角閃石・中量	淡赤褐色	
	172	第39図	SK3	SK03 P-20	土師器	坏	2.5	9.2	5.7	完形品	内面:ヨコナデ一ヨコナデ後指ナデ 外面:ヨコナデ 底部:切り離し後ナデ板目あり	良好	斜長石・多量 白色微粒子・中量 3mm大の赤色レキ混入	淡黄白色	
	173	第39図	SK3	SK03 下層一括5	土師器	坏	2.0	11.4	6.6	2/3 破片	内外面:ヨコナデ 底部:ヘラ切り後ナデ	良好	角閃石・少量	淡黄褐色	
	174	第39図	SK3	SK03 P-26	土師器	坏	2.1~2.4	10.4	7.4	完形品	内外面:ヨコナデ 底部:ヘラ切り後ナデ、擦痕あり	良好	斜長石・多量 角閃石・多量 1mm以下の白レキ、赤色レキ・少量	淡黄褐色~淡灰褐色	
	175	第39図	SK3	SK03 P-3,37	土師器	坏	1.9~2.0	10.2	6.7	ほぼ完形	内外面:ヨコナデ 底部:ヘラ切り後軽くナデ痕残あり	良好	斜長石・多量 白色微粒子・少量	淡黄褐色~赤褐色	□縁部一部欠損
	176	第39図	SK3	SK03 P-49	土師器	坏	2.4	(11.4)	(9.8)	1/3 破片	内外面:ヨコナデ 底部:切り離し後ナデ	良好	白色微粒子・中量	淡黄褐色	
	177	第39図	SK3	SK03 P-49	土師器	坏	2.5	11.6	7.6		内外面:回転ヨコナデ 底部:回転ヘラ切り後ナデ	良好	斜長石・中量 白色微粒粒・多量	淡黄褐色	
	178	第40図	SK3	SK03 P-2	土師器	坏	2.4~2.6	10.5	6.9	ほぼ完形	内外面:ヨコナデ 底部:ヘラ切り	良好	斜長石・多量 角閃石・少量	淡黄褐色~淡灰褐色	□縁部一部欠損

遺物観察表 6

調査次数	遺物番号	図版番号	出土遺構	注記	種別	器種	法量 (cm) 器高	口径	底径	残存	調整/文様	焼成	胎土	色調/釉付着剤	備考
一次調査	179	第40図	SK3	SK03 P-18	土師器	小皿	1.5+α	(9.6)	(6.5)	1/5 破片	内外面：ヨコナデ 底部：ヘラ切り	良好	斜長石・多量 角閃石・多量 白色微粒子・少量	赤褐色	
	180	第40図	SK3	SK03 P-35,36,41	土師器	椀	6.6~7.2	14.7	9.6	ほぼ完形	内面：ヨコナデ→ナデ 外面：ヨコナデ、ケズリあり 底部：ナデ	良好	角閃石・中量 斜長石・多量 白色微粒子・中量	淡黄褐色	□縁部1/3欠損
	181	第40図	SK3	SK03 P-52, 下層一括2	土師器	椀	7.1~7.3	15.0	9.6	ほぼ完形	内面：ヨコナデ→指ナデ 外面：ヨコナデ 底部：ヨコナデ(やや雑)	良好	角閃石・多量 斜長石・多量 白色微粒子・中量	淡黄白色～淡灰褐色	□縁部一部欠損
	182	第40図	SK3	SK03 P-14,48	土師器	椀	5.8~6.3	15.5	8.5	2/3 破片	内面：ヨコナデ→ナデ 外面：ヨコナデ 底部：ヨコナデ	良好	斜長石・多量 角閃石・中量	淡赤褐色	
	183	第40図	SK3	SK03 P-16	土師器	椀	–	(15.6)	–	体部1/2	内面：ヨコナデ→ナデ 外面：ヨコナデ 底部：切り離し後ナデ	良好	角閃石・多量 斜長石・多量 2.4㎝大のレキ2個含有	淡黄白色	高台欠損
	184	第40図	SK3	SK03 P-1	土師器	椀	–	–	7.1	底部のみ	内面：ヨコナデ→ナデ 外面：ヨコナデ 底部：ナデ	良好	斜長石・多量 角閃石・少量	淡黄褐色	
	185	第40図	SK3	SK03 P-5	土師器	椀	–	(15.8)	–		内外面：回転ヨコナデ	良好	斜長石・多量	淡灰褐色	
	186	第40図	SK3	SK03 P-27	土師器	椀	–	(12.4)	–		内外面：回転ヨコナデ	良好	角閃石・少量 斜長石・多量	淡黄褐色	
	187	第40図	SK3	SK03 P-12,44	土師器	甕	–	(28.0)	–		内面：ナデ 外面：ハケ目後ナデ	良好	角閃石・中量 斜長石・多量	淡橙褐色	
	188	第40図	SK3	SK03 P-24,42,16	土師器	椀	5.8	16.1	8.0	2/3	内面：雑なヘラミガキ 外面：ヨコナデ後ヘラミガキ 底部：ヨコナデ	良好	斜長石・多量 角閃石・中量	内面：淡灰色 外面：淡赤褐色	
	189	第40図	SK3	SK03 P-11,49	土師器	椀	–	(16.2)	–	小片	内外面：ヘラミガキ	良好	角閃石・中量 斜長石・多量	内面：黒色 外面：淡橙褐色	
	190	第40図	SK3	SK03 P-3	黒色土器	椀	5.9	15.3	8.4	4/5 残存	内面：ヨコナデ、1.5㎝幅で全面にミガキ、底部付近はやや雑 外面：ヨコナデ、ヨコナデ後ヘラミガキ 底部：ナデ雑でロクロが激しい	やや不良	角閃石・多量 斜長石・多量 石英・少量	内面：黒色 外面：淡赤褐色	
	191	第40図	SK3	SK03 P-31	黒色土器	椀	6.1	15.0	8.3	2/3					
	192	第40図	SK3	SK03 P-49,50,51	黒色土器	椀	6.2	14.6	7.6	4/5 残存	内面：ヨコナデ後、1.5㎝幅で全面丁寧なヘラミガキ 外面：ヨコナデ後ヘラミガキ、ケズリ後ヘラミガキ 底部：ヘラ切り後ヨコナデ	良好	角閃石・多量 斜長石・多量 石英・少量	内面：黒色 外面：淡黄白色	
	193	第40図	SK3	SK03 P-11	黒色土器	椀		(14.6)	–	小片	内面：丁寧なヘラミガキ 外面：回転ヘラミガキ	良好	角閃石・中量 斜長石・多量 石英・少量	内面：黒色 外面：淡赤褐色	
	194	第40図	SK3	SK03 P-06	黒色土器	椀	–	(16.9)	–	小片	内外面：ヘラミガキ	良好	角閃石・少量 斜長石・多量	内面：黒色 外面：淡橙褐色	
	195	第40図	SK3	SK03 P-11	黒色土器	椀	–	(16.0)	–	小片	内外面：ヘラミガキ	良好	角閃石・多量 斜長石・多量	内面：黒色 外面：橙褐色	
	196	第40図	SK3	SK03 P-19	黒色土器	椀	–	(13.4)	–	小片	内外面：ヘラミガキ	良好	斜長石・多量 石英・少量	内面：黒色 外面：淡黄褐色	
	197	第40図	SK3	SK03 P-05	黒色土器	椀	–	(11.2)	–	小片	内外面：ヘラミガキ	良好	角閃石・中量 斜長石・多量 白色微粒子・中量	内面：黒色 外面：橙褐色	
	198	第40図	SK3	SK03 P-32	黒色土器	椀	–	–	7.4	底部のみ	内面：やや雑なナデ 外面：ヨコナデ 底部：やや雑なナデ、中心部凹凸あり	やや不良	角閃石・中量 斜長石・多量 石英・少量	内面：灰白色 外面：淡赤褐色	
	199	第42図	SK4	SK04 一括263	須恵器	坏蓋	(2.4+α)			40%	内面：ナデ 外面：ケズリ (ロクロ回転利用)	良好	精選 白色粒子、黒色粒子・多量	淡灰色	
	200	第42図	SK4	SK04 一括371	須恵器	坏身	(3.7+α)	(13.4)		小片	内面：ヨコナデ 外面：ヨコナデ/ヘラケズリ	良好	精選 0.1㎜大の白色粒子、黒色粒子・中量 長石・少量	灰褐色 (生やけ？)	
	201	第42図	SK4	SK04 一括286	須恵器	坏身	(3.0+α)	(14.4)		小片	ヨコナデ	良好	精選 0.1㎜大の白色粒子・多量 黒色粒子・少量	灰色	
	202	第42図	SK4	SK04 一括268	須恵器	坏身	3.0	(12.2)	(6.0)	30%	外面：ナデ 底部：回転ヘラ切り	良好	精選 0.1㎜大の黒色粒子、白色粒子、赤色粒子・多量 石英・少量	暗灰色	
	203	第42図	SK4	SK04 一括339	須恵器	坏身	(2.0+α)	(12.0)		小片	ヨコナデ	良好	精選 0.1㎜大の白色粒子・少量 雲母、黒色粒子・微量	灰白色	
	204	第42図	SK4	SK04 一括270	須恵器	脚部	(4.3+α)	(11.5)		小片	ヨコナデ	良好	精選 0.1㎜大の黒色粒子、白色粒子、赤色粒子・少量 雲母・微量	淡灰色	
	205	第42図	SK4	SK04 一括261	須恵器	坏身	(2.5+α)		(7.4)	30%	内外面：ナデ 底部：ヘラケズリ (ロクロ回転利用)	良好	精選 0.1㎜大の黒色粒子、白色粒子、赤色粒子・多量 石英・微量	淡黄褐色	
	206	第42図	SK4	SK04 一括266	須恵器	鉢	(6.8+α)				内面：回転ナデ 外面：上部ナデ・下部ケズリ	良好	白色粒子・微量	灰褐色	
	207	第42図	SK4	SK04 一括262	土師器	坏	(1.2+α)		(7.8)	30%	内面：ナデ・見込みに同心円 外面：ナデ 底部：清色圧状の沈線	良好	0.1㎜大の黒色粒子、白色粒子・多量 角閃石・少量 石英・赤色粒子・微量	内面：淡茶褐色 外面：淡橙白色	内面一部うるし？
	208	第42図	SK4	SK04 一括264	土師器	甕	(7.0+α)	(20.0)		小片		良好	0.1㎜大の黒色粒子、白色粒子、赤色粒子、雲母・多量 石英・少量	淡橙白色	□縁内端部の一部にベンガラあり
	209	第42図	SK4	SK04 一括336	古代瓦	瓦	残存長 7.0	残存幅 2.2				良好	黒色粒子、赤色粒子・微量	黄褐色	
	210	第44図	SK5	SK05 №25,40	須恵器	椀	6.0~6.8	(13.7)	(7.0)		内面：回転ヨコナデ→指おさえ 外面：回転ヨコナデ→ヨコナデ 底部：ヘラ切り後ナデ	良好	斜長石・少量 白色微粒子・多量	灰色	
	211	第44図	SK5	SK05 №48	須恵器	壺	–	–	高台径 (12.2)	小片	内面：ヨコナデ 外面：ヨコナデ/ヘラヨコナデ	良好	斜長石・多量 白色微粒粒・多量	暗灰色	
	212	第44図	SK5	SK05 №47	須恵器	甕	–					良好	石英、角閃石・微量	内面：淡灰色 外面：淡黄灰色	

遺物観察表 7

調査次数	遺物番号	図版番号	出土地点	注記	種別	器種	法量 (cm) 器高	口径	底径	残存	調整/文様	焼成	胎土	色調/粘付物等	備考
1調査区	213	第44図	SK5	SK05 No52	須恵器	壺	–				同心円出て具義あり	良好	0.1mm大の白色粒子、黒色粒子・微量	暗灰色	
	214	第44図	SK5	SK05 No44	陶器 (緑釉)	皿				小片	内面:ミガキ	良好	白色微粒粒・中量	淡褐色 釉:淡灰緑色	
	215	第44図	SK5	SK05 一括270	陶器 (緑釉)	皿					内外面:緑釉	良好	斜長石・多量	淡褐白色	
	216	第44図	SK5	SK05 No71	土師器	坏	3.8	(12.0)	7.0		内外面:回転ヨコナデ 底部:回転ヘラ切り後ナデ	良好	角閃石・少量 透明微粒子・多量	淡黄白色	
	217	第44図	SK5	SK05 No57	土師器	坏	4.0	(12.6)	7.0		内外面:回転ヨコナデ 底部:回転ヘラ切り後ナデ、板目あり	良好	角閃石・少量 透明微粒子・多量	淡黄褐色	
	218	第44図	SK5	SK05 No64	土師器	坏	3.0	(11.4)	(6.6)		内外面:回転ヨコナデ 底部:ナデ	良好	斜長石・多量	淡黄白色	
	219	第44図	SK5	SK05 No17	土師器	坏	3.25	(13.2)	7.4		内外面:回転ヨコナデ 底部:回転ヘラ切り後ナデ	良好	斜長石・少量	淡黄褐色	炭化物付着
	220	第44図	SK5	SK05 No5	土師器	坏	3.2	(13.4)	(7.6)		内外面:回転ヨコナデ 底部:ナデ	良好	斜長石・多量 赤色微粒子・中量 石英・多量	橙褐色	
	221	第44図	SK5	SK05 No70	土師器	坏	(4.0)	(12.4)	(7.4)		内外面:回転ヨコナデ 底部:回転ヘラ切り後ナデ	良好	角閃石・少量 斜長石・多量	淡褐色	
	222	第44図	SK5	SK05 No49	土師器	坏	3.9	(13.6)	6.8	50%	内面:回転ヨコナデ~回転ヨコナデ後ナデ 外面:回転ヨコナデ~回転ヘラ切り後~力向にナデ	良好	角閃石・中量 石英・中量 透明微粒子・多量 1mm大の赤色粒子・中量	淡褐白色	
	223	第44図	SK5	不明 (SK-5カ)	土師器	坏	3.2	(13.6)	(8.2)		内面:回転ヨコナデ 外面:回転ヨコナデ 底部:回転ヘラ切り後丁寧なナデ	良好	角閃石・少量 透明微粒子・多量	淡黄褐色	
	224	第44図	SK5	SK05 No72	土師器	坏	–	(12.8)	(7.3)		内外面:回転ヨコナデ 底部:回転ヘラ切り後ナデ	良好	角閃石・少量 斜長石・多量 石英・少量	淡黄褐色	
	225	第44図	SK5	SK05&20 一括 (SJ-1を含む)	土師器	坏	–	–	(7.2)		内外面:回転ヨコナデ 底部:回転ヘラ切り後ナデ~指おさえ	良好	斜長石・多量	橙褐色	
	226	第44図	SK5	SK05 一括357	土師器	坏	(2.5+α)				内面:同心円 外面:ヘラケズりのちナデ	良好	石英、赤色粒子、白色粒子・微量	黄灰褐色	
	227	第44図	SK5	SK05 No41	土師器	坏	(1.3+α)		5.0		底部:鼎巻き状沈線を入れる	良好	石英、角閃石、赤色粒子、白色粒子・微量	黄褐色	
	228	第44図	SK5	SK05 No50	土師器	椀	5.0	14.8	5.2		内面:回転ヨコナデ~ヨコナデ後指ナデ 外面:回転ヨコナデ~ヨコナデ~回転ヘラ切り	良好	角閃石・少量 透明微粒子・多量 赤色微粒子・中量	淡橙色	
	229	第45図	SK5	SK05 No.54	土師器	椀	–	–	9.4		内面:回転ヨコナデ 外面:回転ヨコナデ~ヨコナデ 底部:回転ヘラ切り後ナデ	良好	角閃石・中量 透明微粒子・多量 微砂粒・多量	橙褐色	
	230	第45図	SK5	SK05 No9~一括115	土師器	椀	–	–	(7.5)		内面:回転ヨコナデ 外面:回転ヨコナデ~ヨコナデ 底部:回転ヘラ切り後ナデ	良好	輝石 透明微粒子・多量	橙褐色	
	231	第45図	SK5	SK05 No8,10	土師器	椀	–	–	7.2		内面:回転ヨコナデ 外面:回転ヨコナデ~ヨコナデ 底部:回転ヘラ切り	良好	透明微粒子・多量	橙褐色	
	232	第45図	SK5	SK05 No24	土師器	椀	–	–	6.7		内面:回転ヨコナデ 外面:回転ヨコナデ~ヨコナデ 底部:指ナデ	良好	角閃石・少量 透明微粒子・多量	橙褐色	
	233	第45図	SK5	SK05 No18	土師器	椀	–	–	(7.2)		内面:回転ヨコナデ 外面:回転ヨコナデ~ヨコナデ 底部:回転ヘラ切り後ナデ	良好	角閃石・少量 透明微粒子・多量 石英・少量	淡橙色	
	234	第45図	SK5	SK05 No46	土師器	椀	–	–	(7.7)		内面:回転ヨコナデ~指ナデ 外面:回転ヨコナデ~ヨコナデ 底部:回転ヘラ切り後ナデ	良好	透明微粒子・多量	橙褐色	
	235	第45図	SK5	SK05 No58	土師器	椀	–	–	–	小片 (底部)	内面:回転ヨコナデ 外面:回転ヨコナデ~ヨコナデ 底部:回転ヘラ切り後ナデ	良好	角閃石・少量 透明微粒子・多量 2mm大のレキ・少量	淡黄褐色	
	236	第45図	SK5	SK05 一括201	土師器	椀			(7.0)	小片 (底部)	内面:回転ヨコナデ 外面:回転ヨコナデ~ヨコナデ 底部:回転ヘラ切り後ナデ	良好	透明微粒子・多量 白色微粒子・少量	淡橙色	
	237	第45図	SK5	SK05 一括244	土師器	皿	(2.0)	(11.2)	(7.0)	小片	内外面:回転ヨコナデ 底部:丁寧なナデ	良好	斜長石・多量	淡橙褐色	
	238	第45図	SK5	SK05 No63	土師器	皿	(1.5)	(13.8)	(10.0)	小片	内外面:回転ヨコナデ 底部:丁寧なナデ	良好	斜長石・中量	淡橙褐色	
	239	第45図	SK5	SK05 No16	土師器	鍋?	(3.5+α)				口縁部:ヨコナデ 内面:軽いケズり 外面:ナデ	良好	角閃石、白色粒子、赤色粒子	黄灰色	内面ヘラケズりあり ヘラによる交差する圧痕あり
	240	第45図	SK5	SK05 No26,31,33 一括346	土師器	鍋	–	(26.8)	–	小片	内面:ヨコナデ~ヨコハケ目~ナデ 外面:ヨコナデ~ナデ	良好	角閃石・多量 斜長石・多量 白色微粒子・少量	淡橙褐色	外面に板ナデアトあり
	241	第45図	SK5	SK05 No35	土師器	鍋	–	(28.4)	–	小片	内面:ヨコナデデータ状に板ナデ 外面:ヨコナデ~斜めハケ目	良好	角閃石・中量 斜長石・多量 石英・中量	淡橙褐色	
	242	第45図	SK5	SK05 No15	土師器	鍋	–	(16.4)	–	小片	内外面:ナデ・器面荒れている	良好	角閃石・少量 斜長石・多量 石英・中量	淡褐色	
	243	第45図	SK5	SK05 一括250	黒色土器	椀	–	(13.8)	–	小片	内面:ミガキ 外面:回転ヨコナデ	良好	角閃石・少量 斜長石・多量 白色微粒子・少量	淡橙褐色	
	244	第45図	SK5	SK05 一括125	黒色土器	椀	–	(14.0)	–	小片	内面:ミガキ 外面:回転ヨコナデ	良好	斜長石・少量	淡黄白色	
	245	第45図	SK5	SK05一括 35,171,221	黒色土器	椀	–	–	7.4	小片	内面:ミガキ 外面:ヘラケズり~ヨコナデ 底部:回転ヘラ切り後ナデ	良好	斜長石・多量 白色微粒子・多量	淡橙褐色	
	246	第45図	SK5	SK05 一括261	黒色土器	椀	–	–	7.4	小片	内面:ミガキ 外面:回転ヨコナデ~ヨコナデ 底部:回転ヘラ切り後ナデ	良好	角閃石・中量 斜長石・多量 白色微粒子・中量	淡黄褐色	

遺物観察表 8

調査次数	遺物番号	図版番号	出土遺構	注記	種別	器種	法量 (cm) 器高	口径	底径	残存	調整/文様	焼成	胎土	色調/釉付着剤	備考
一調査区	247	第45図	SK5	SK05 No.7	黒色土器	椀	–	–	(5.6)	小片	内面:ミガキ 外面:回転ヨコナデ~ヨコナデ 底部:ナデ	良好	斜長石・多量	淡橙白色	
	248	第45図	SK5	SK05 一括279	土師器	土鍋	長さ 5.3	幅 2.7	重さ 33g		手づくね		0.1mm大の角閃石、白色粒子・微量	黄灰色	
	249	第45図	SK5	SK05 No.53	土師器	土鍋	長さ 5.0	幅 2.8	重さ 32g		手づくね		0.1mm大の石英、角閃石・白色粒子・微量	黄灰色	むしろ圧痕？
	250	第45図	SK5	SK05 No.4	土師器	土鍋	長さ (6.2+α)	幅 1.6	重さ 11g		手づくね		0.1mm大の角閃石、白色粒子、赤色粒子・微量	茶褐色	
	251	第45図	SK5	SK05 一括4	土師器	土鍋	長さ (6.0+α)	幅 1.6	重さ 10g		手づくね		2mm大の角閃石、1mm大白色粒子、赤色粒子・微量	黄灰色	片側つぶれている
	252	第45図	SK5	SK05 一括276	土師器	土鍋	長さ 5.3	幅 1.3	重さ 9g		手づくね		1mm大の赤色粒子、黒色粒子・微量	黄灰色	
	253	第45図	SK5	SK05 No.55	土師器	土鍋	長さ (4.6+α)	幅 1.3	重さ 8g		手づくね		石英、角閃石・少量	暗灰色	瓦質
	254	第45図	SK5	SK05 一括278	土師器	土鍋	長さ (5.8+α)	幅 1.4	重さ 10g		手づくね		石英、角閃石・少量	濃橙色	
	255	第45図	SK5	SK05 No.59	土師器	土鍋	長さ (4.3+α)	幅 1.8	重さ 13g		手づくね		石英、角閃石、長石・少量	橙色	
	256	第45図	SK5	SK05 一括277	土師器	土鍋	長さ 4.0	幅 1.2	重さ 6g		手づくね		石英、角閃石・少量	橙色	
	257	第45図	SK5	SK05 一括5	土師器	土鍋	長さ 5.2	幅 1.4	重さ 8g		手づくね		1mm大の石英、角閃石、白色粒子、赤色粒子・微量	黄橙色	
	258	第45図	SK5	SK05 No.65	土師器	土鍋	長さ 4.1	幅 1.4	重さ 8g		手づくね		1mm大の角閃石、白色粒子、赤色粒子・少量	黄灰色	
	259	第45図	SK5	SK05 No.66	弥生土器	甕	(3.3+α)				外面:ケズリ/ナデ	良好	0.1mm大の石英・多量 白色粒子・中量 角閃石、赤色粒子・微量	内面:灰褐色 外面:黄橙色	
	260	第45図	SK5	SK05 一括9	青銅品	不明	長さ 5.5	幅 1.2							
	261	第47図	SK6	SK06 No.5	土師器	椀	(2.2+α)		(9.2)		内外面:ナデ 底部外周部:ヘラケズリのちナデ	良好	2mm大の角閃石・中量 1mm大の石英、白色粒子・少量	黄橙色	
	262	第47図	SK6	SK06 No.4	土師器	椀	(2.3+α)		(7.6)		内面:高台部:ナデ 外面:ケズリ 底部:ヘラケズリ	良好	1mm大の角閃石、白色粒子、赤色粒子・少量	内面:茶褐色 外面:褐色	
	263	第47図	SK6	SK06 No.3	黒色土器	椀	(2.1+α)		(6.8)		内面:ミガキ 外面:ヘラケズリ 高台部:ナデ	良好	1mm大の白色粒子、赤色粒子・少量 石英・微量	内面:黄灰色 外面:茶灰色	外面に3mmのヘラケズリ共ケズリを切っている
	264	第48図	SK7	SK07 No.3No.4	土師器	坏	4.2	11.6	5.8		外面:3mm下の凹線あり 底部外周部:ヘラケズリのちナデ	良好	1mm大の角閃石、赤色粒子・少量 石英・微量	内面:黄灰色 外面:茶灰色	外面に3mmのヘラケズリ共ケズリを切っている
	265	第48図	SK7	SK07 No.4	土師器	土鍋	長さ (3.6+α)	幅 1.4	重さ 8g			良好	1mm大の石・少量 角閃石、白色粒子、赤色粒子・微量	淡黄色	
	266	第50図	SK8	SK08 No.1	須恵器	鉢	(7.9+α)			不明	内面:横方向のナデ・指圧痕あり/見込み:不定方向のハケ目 外面:横方向に力不目・粗いヘラケズリ・指圧痕と看取り	良好	0.5~1mm大の白色粒子・中量	灰色	内外に指圧痕あり
	267	第52図	SD1	A包層 SD1	須恵器	椀	(1.3+α)		(8.1)	小片	内外面:ナデ 底部:調整状に粘土紐の痕が見える	良好	緻密	灰色	
	268	第52図	SD1	A包層 SD1	陶器 (緑釉)	碗？	(1.4+α)			小片	内面:重ね焼きの痕による釉剥がれ あり	良好		淡緑色	粕一部のみかかる 高台粘付
	269	第52図	SD1	A包層 SD1	土師器	坏	3.4	(13.2)	7.0	50%	内外面:ナデ 底部:ヘラけりのちナデ	良好	0.5mm大の石英、白色粒子・多量 角閃石・微量	茶褐色	
	270	第52図	SD1	A包層 SD1	土師器	坏	(1.7+α)		(7.0)	小片	内外面:ナデ 底部:調整き状線痕	良好	0.5mm以下の白色粒子、黒色粒子・少量	白茶色	
	271	第52図	SD1	A包層 SD1	土師器	椀	(1.4+α)		7.0	小片	内面:ナデ/見込み:渦巻文 外面:ナデ~ヘラケズリ 底部:ヘラけり痕	良好	0.5mm大の石英、白色粒子、黒色粒子・少量	淡橙色	
	272	第52図	SD1	A包層 SD1	土師器	椀	(2.7+α)		(9.6)	小片	内外面:ナデ 底部:ヘラけり	良好	0.5mm大の白色粒子、黒色粒子・中量 石英、角閃石・少量	橙色	
	273	第52図	SD1	A包層 SD1	土師器	椀	(2.8+α)		(8.0)	小片	内外面:ナデ 底部:ミガキ	良好	0.5mm大の石英、白色粒子・少量 角閃石・微量	淡橙色 底部:黒色	
	274	第52図	SD1	A包層 SD1	土師器	椀	(2.4+α)		(8.4)	小片	内面:ナデ 外面:ナデ~ヘラケズリ	良好	0.5mm以下の石英・多量 角閃石・少量	淡橙色	
	275	第52図	SD1	A包層 SD1	土師器	椀	(2.9+α)		(6.4)	小片	内外面:ナデ 見込み:底部:調整状文	良好	0.5mm以下の石英・多量	淡橙色	
	276	第52図	SD1	A包層 SD1	黒色土器	椀	(2.1+α)		(6.4))		内面:ミガキ 外面:ナデ 底部:ヘラケズリ	良好	0.5mm以下の石英、角閃石・多量 白色粒子・少量	内面:黒色 外面:淡茶色	
	277	第52図	SD1	A包層 SD1	黒色土器	椀	(2.5+α)		(6.4)	小片	内面:ミガキ 外面:ナデ~ヘラケズリ	良好	0.5mm大の白色粒子、角閃石・多量	内面:黒色 外面:に.ぶい橙色	
	278	第52図	SD1	A包層 SD1	黒色土器	椀	(3.2+α)		(6.0)	小片	内面:ミガキ 外面:ナデ~ヘラケズリ	良好	0.5mm大の石英、白色粒子・多量 角閃石・少量 レキ・多量	内面:黒色 外面:橙色	外面にわずかに煤か？
	279	第52図	SD1	A包層 SD1	黒色土器	椀	(2.0+α)	(6.0)		小片	内面:ミガキ 外面:ヘラケズリ・ヨコナデ	良好	3mm以下の白色粒子・多量 角閃石・中量 1mm以下の石英・少量 小レキ	内面:黒色 外面:橙色(一部黒変)	
	280	第52図	SD1	A包層 SD1	土師器	不明-脚部				小片	外面:丁寧なナデ	良好	1mm以下の角閃石・中量 石英・少量	黄橙色(半分程黒変)	本体への貼り付け痕あり
	281	第52図	SD1	A包層 SD1	土師器	土鍋	長さ 5.5	幅 1.3	重さ 8g	ほぼ完形	手づくね	良好	1mm以下の角閃石・多量 石英、赤色粒子・中量	黄橙色	
	282	第52図	SD1	A包層 SD1	土師器	土鍋	第52図	幅 2.1	重さ 10g	80%？	手づくね	良好	1mm以下の石英・中量 角閃石、赤色粒子・少量	淡橙色	
	283	第52図	SD1	A包層 SD1	石製品	砥石 (印者)	長さ (12.8+α)	幅 12.3	厚さ 7.6						重さ 1,014g
	284	第53図	SD2	SD2 一括1	須恵器	坏蓋	4.1	(12.4)		70%	外面:回転ヘラケズリ 内面:ヘラケズリのちナデ	良好	黒色粒子・少量	灰白色	外面上にヘラ記号、ペンガラ痕あり

遺物観察表 9

調査次数	遺物番号	図版番号	出土遺構	注記	種別	器種	法量 (cm) 器高	口径	底径	残存	調整/文様	焼成	胎土	色調/釉付着剤	備考
1 第2次調査	285	第53図	SD2	SD2 一括2	須恵器	坏蓋	3.8	13.0		60%	内外面:回転ヘラケズリのちナデ	良好	0.5～3mm大の黒色粒子・少量	内面:薄灰色 外面上部:薄灰色 外面下部・縁灰色	外面上にヘラ記号あり
	286	第53図	SD2	SD2 一括3	須恵器	坏蓋	4.0	(14.0)		35%	内外面:回転ヘラケズリのちナデ	良好	0.5mm大の白色粒子・少量 0.5～4mm大の灰色粒子・少量	青灰色	
	287	第53図	SD2	SD02 一括4	須恵器	高坏		脚部径 3.2			カキ目、左から右へヘラによる模様(工具痕)	良好	緻密	灰褐色	
	288	第53図	SD2	A包層 SD2	土師器	坏	3.8	(13.0)	7.5	60%	内外面:ナデ 底部:ヘラ切りのちナデ	良好	1mm以下の角閃石・石英・多量	橙色	
	289	第53図	SD2	A包層 SD2	土師器	坏	(3.7+α)	(12.8)		50%	内外面:ナデ 底部:ヘラ切りのちナデ	良好	2mm以下の赤色粒子・少量 1mm以下の角閃石・微量	淡橙色	
	290	第53図	SD2	A包層 SD2	土師器	坏	(3.9+α)	(13.8)			小片	良好			
	291	第53図	SD2	A包層 SD2	土師器	鉢	(1.7+α)		7.0		内外面:ナデ 底部:回転ヘラ切りのちナデ	良好	1mm以下の角閃石・石英・微量	橙色	
	292	第53図	SD2	A包層 SD2	土師器	鉢	(2.2+α)		(6.4)		小片	内面:ナデ 外面:ヘラケズリのちナデ 底部:回転ヘラ切りのちナデ	良好	1mm以下の角閃石・少量 石英・微量	橙色
	293	第53図	SD2	A包層 SD2	土師器	皿	2.7	13.6	6.5	70%	内外面:ナデ 底部:回転ヘラ切りのちナデ	良好	1mm以下の角閃石・少量 石英・微量	内面:黄橙色 外面:橙色	
	294	第53図	SD2	A包層 SD2	土師器	甕					小片	脚に窓、あるいは抉りが入る	良好	1mm以下の石英・中量 角閃石・微量	内面:橙色 外面:灰白色
	295	第53図	SD2	A包層 SD2	土師器	不明・脚部	(5.4+α)				小片	内外面:ナデ 底部:ヘラ切り	良好	1mm以下の角閃石・中量 石英・少量	橙褐色
	296	第53図	SD2	A包層 SD2	黒色土器	鉢	(2.3+α)		(6.0)	40%	内面:ミガキ 外面:ヘラケズリ 底部:ヘラのちナデ	良好	1mm以下の角閃石・少量 石英・微量	内面:黒灰色 外面:白褐色	
	297	第53図	SD2	A包層 SD2	黒色土器	鉢	(3.1+α)	(12.5)			小片	内面:ミガキ 外面:ナデ	良好	1mm以下の角閃石、石英・少量	内面:黒色 外面:白褐色
	298	第55図	SD3	SD03 No5	須恵器	坏身	(3.1+α)	(14.0)	最大銅 (16.8)		小片	外面:ヘラケズリ	良好	緻密	灰色
	299	第55図	SD3	SD03 No2	須恵器	坏身	(3.5+α)	(10.0)	最大銅 (12.8)		小片	外面:ナデ調整	良好	緻密	内面:青灰色 外面:灰色
	300	第56図	ピット69	Pit69 一括2	須恵器	坏蓋	(1.6+α)				小片	内面:ヨコナデ、指圧痕あり 外面:ナデ	良好	緻密	内面:灰褐色 外面:灰色
	301	第56図	ピット30	Pit30 一括12	須恵器	坏身	(4.1+α)	(14.2)	最大銅 (16.0)	1/5	内面:ナデ 外面:ナデ、ヘラケズリ 底部:回転ヘラケズリ	良好	緻密	灰色	
	302	第56図	ピット31	Pit31 一括1	須恵器	坏身	(2.8+α)	(13.8)	最大銅 (16.0)		小片	内外面:ヨコナデ	良好	緻密	灰色
	303	第56図	ピット137	Pit137 一括11	須恵器	坏身	(2.5+α)	(11.6)	最大銅 (14.0)		小片	内外面:ヨコナデ	良好	緻密	青灰色
	304	第56図	ピット78	Pit78 一括2	須恵器	坏身	(3.3+α)	(10.0)	最大銅 (12.0)		小片	内外面:ヨコナデ 底部:手持ちヘラケズリ	良好	緻密	内面:灰褐色 外面:灰色
	305	第56図	ピット23	A-Pit23	須恵器	鉢	(1.8+α)		(10.0)		小片	内面:ヨコナデ 外面:ナデ 底部:ヘラ切り	良好	緻密	内面:灰色 外面:灰褐色
	306	第56図	ピット101	Pit101 一括1	須恵器	鉢	(3.5+α)				小片	内外面:ナデ	良好	緻密	灰色	無節に一条のヘラ描き波状文
	307	第56図	ピット85	Pit85 一括8	須恵器	鉢					小片	内面:青海波？当て具痕 タタキのちナデ 外面:平行タタキ目痕	良好	緻密	灰色
	308	第56図	ピット11	A-Pit11	土師器	坏	4.0	(12.6)			小片	内外面:ヨコナデ 底部:回転ヘラ切り	良好	1mm以下の角閃石・多量 石英・中量 長石・少量	橙色
	309	第56図	ピット103	Pit103 一括3	土師器	坏	3.4	(14.5)			小片	内外面:ナデ 底部:回転ヘラ切り	良好	3mm以下の赤色粒子・少量 2mm以下の角閃石・中量 石英・少量 長石・少量	黄橙色
	310	第56図	ピット17	A-Pit17	土師器	坏	(3.0+α)	(11.6)			小片	内外面:ナデ	良好	1mm以下の角閃石、石英・少量 白色粒子・微量	橙色
	311	第56図	ピット79	Pit79 一括1	土師器	坏	(1.8+α)		(9.0)		小片	内外面:ナデ 底部:ヘラ切り	良好	1mm以下の角閃石・少量 石英・微量	内面:橙色 外面:白褐色
	312	第56図	ピット114	Pit114 一括1	土師器	鉢	(3.6+α)		(9.6)		小片	内外面:ナデ	良好	1mm以下の赤色粒子・多量 石英・少量 角閃石・微量	黄橙色
	313	第56図	ピット16	A-Pit16	土師器	皿	(1.5+α)	(13.0)			小片	内外面:ナデ	良好	1mm以下の石英・少量 角閃石・微量	橙色
	314	第56図	ピット27	A-Pit27	土師器	鉢	(10.0+α)	(26.8)			小片	口縁部:ヨコナデ 内面:ハケ目のちナデ 外面:ナデ	良好	1mm以下の角閃石・多量 石英・中量	内面:黄橙色 外面:橙色
	315	第56図	ピット133	Pit133 一括7	土師器	鉢	–	(16.5)	–		小片	内面:ナデ 外面:指おさえ	良好	斜長石・多量	暗褐色
	316	第56図	ピット93	Pit93 一括1	土師器	鉢	(5.3+α)				小片	内面:ナデ、ヘラケズリ 外面:ハケ目のちナデ、ヨコナデ	良好	1mm以下の白雲母・中量 石英、赤色粒子・少量 角閃石・微量	黄褐色
	317	第56図	ピット86	Pit86 一括7	土師器	鉢	(4.4+α)				小片	口縁部:ヨコナデ 内面:ナデ	良好	1mm以下の角閃石、石英・少量	橙色
	318	第56図	ピット133	Pit133 一括9	黒色土器	皿	2.6	14.2		50%	内面:丁寧なミガキ 外面:ヨコナデ→おさえ？→雑なナデ (ロクロ無しか)	良好	角閃石・少量 斜長石・多量 雲母粒・中量	淡黄褐色・内黒	
	319	第56図	ピット133	Pit133 一括6	黒色土器	鉢	–	–	–		小片	内面:丁寧なミガキ 外面:ヨコナデ→刷毛ヨコナデ	良好	角閃石・少量 斜長石・多量	淡黄褐色・内黒
	320	第56図	ピット33	Pit33 一括1	古代瓦	平瓦	厚さ 2.2				小片	上面:布目痕 下面:一部格子状のタタキ痕あり	良好	角閃石、石英・少量 赤色粒子	橙色
	321	第56図	ピット92	Pit92 一括11	土製品	土錘	長さ 5.4	幅 1.5	重さ 11g	ほぼ完形	手づくね	良好	良好 堅かに砂粒混ざる	黄褐色	
	322	第56図	ピット92	Pit92 一括14	土製品	土錘	長さ 5.4	幅 1.5	重さ 9g	ほぼ完形	手づくね	良好	良好	赤褐色	

遺物観察表 10

調査次数	遺物番号	図版番号	出土地点	注記	種別	器種	法量 (cm) 長径	口径	底径	残存	調整/文様	焼成	胎土	色調/釉付着剤	備考
一次調査	323	第56図	ピット92	Pit92 一括13	土製品	土錘	長さ (4.2+α)	幅 1.4	重さ 6g	60%?	手づくね	良好	良好	淡褐色	
	324	第56図	ピット79	Pit92 一括12	土製品	土錘	長さ 5.9	幅 1.5	重さ 10g	ほぼ完形	手づくね	良好	1mm以下の石英・少量 角閃石、赤色粒子・微量	淡橙色	
	325	第57図	包含層3	包含3 一括165	須恵器	甕				小片	内面:同心円状で貝痕 外面:ヅタキ目痕		雲母	内面:淡褐色 外面:黄橙色	
	326	第57図	包含層3	包含3 一括119	瓦器 (青磁)	椀	(2.8+α)			小片	碧付きにケズリあり	良好		淡緑色	内面に重ね焼きの痕跡 無、景印あり、鎬無
	327	第57図	包含層3	包含層3 一括102	土師器	坏	4.6	(13.8)	(8.2)	20%	内外面:回転ヨコナデ 外面下部:回転ヘラ切り後ナデ	良好	角閃石・中量 斜長石・多量	淡橙褐色	
	328	第57図	包含層3	包含層3 一括62	土師器	坏	3.7	(13.2)	7.4	40%	内外面:回転ヨコナデ 外面底部:回転ヘラ切り後ナデ	良好	角閃石・少量 斜長石・多量 赤色微粒子・少量	淡黄褐色	
	329	第57図	包含層3	包含層3 一括21	土師器	坏	4.1	(13.2)	(7.6)	20%	内面底部:一条の指ナデ 内外面:回転ヨコナデ 外面底部:回転ヘラ切り後ナデ	良好	斜長石・多量 石英・少量	橙褐色	
	330	第57図	包含層3	包含3 一括75	土師器	坏	4.4	(12.8)	(6.6)	小片	内外面:ナデ 底部:ヘラ切りのちナデ	良好	1mm以下の石英・多量 角閃石・少量	内面:淡褐色 外面:淡橙色	
	331	第57図	包含層3	包含3 一括27	土師器	坏	3.8	(12.6)		1/2	内外面:ナデ 底部:ヘラ切りのちナデ	良好	1mm以下の角閃石、石英・多量	橙色	
	332	第57図	包含層3	包含層3 一括	土師器	坏	3.6	(12.4)	(6.0)	小片	内外面:ナデ 底部:ヘラ切りのちナデ	良好	1mm以下の角閃石、赤色粒子・少量 石英・微量	橙色	
	333	第57図	包含層3	包含層3 一括101	土師器	坏	4.1	(12.8)	6.3	70%	内外面:回転ヨコナデ 外面底部:回転ヘラ切り後丁寧なナデ	良好	角閃石・多量 斜長石・多量	淡黄褐色	
	334	第57図	包含層3	包含層3 一括93	土師器	坏	3.8	(12.6)	(7.2)	45%	内外面:回転ヨコナデ 外面底部:回転ヘラ切り後丁寧なナデ	良好	角閃石・多量 斜長石・多量	黄白色	
	335	第57図	包含層3	包含層3 一括71	土師器	坏	4.0	(12.7)	(6.4)	20%	内外面:回転ヨコナデ 外面底部:回転ヘラ切り後ナデ	良好	斜長石・多量	淡橙色	
	336	第57図	包含層3	包含層3 一括100	土師器	坏	3.5	(12.4)	(7.0)	40%	内外面:回転ヨコナデ 外面底部:回転ヘラ切り後ナデ	良好	斜長石・多量	淡黄褐色	
	337	第57図	包含層3	包含層3 一括69	土師器	坏	4.2	(12.4)	7.0	40%	内面底部:一条の指ナデ 内外面:回転ヨコナデ 外面底部:回転ヘラ切り後ナデ	良好	斜長石・多量 2mm大の赤色粒子・少量	淡黄褐色	
	338	第57図	包含層3	包含層3 一括77	土師器	坏	3.9	(12.3)	6.2	60%	内面底部:ホリ痕明瞭 内外面:回転ヨコナデ 外面底部:回転ヘラ切り後丁寧なナデ	良好	斜長石・多量 1mm大の赤色レキ・中量	淡黄褐色	
	339	第57図	包含層3	包含層3 一括74	土師器	坏	3.55	(12.3)	(6.1)	30%	内面:回転ヨコナデ 外面底部:ヨコナデ→ナデ	良好	斜長石・多量	淡黄褐色～暗灰色	
	340	第57図	包含層3	包含層3 一括8	土師器	坏	4.1	(11.8)	7.0	70%	内外面:回転ヨコナデ 外面底部:回転ヘラ切り後ナデ	良好	角閃石・多量 斜長石・多量	淡黄褐色	
	341	第57図	包含層3	包含3 一括70	土師器	坏	(2.2+α)			1/3	内外面:ヨコナデ 底部:ヘラ切りのちナデ	良好	1mm以下の角閃石・中量 石英・少量	淡褐色	
	342	第57図	包含層3	包含3 一括10	土師器	坏	(2.0+α)		(6.0)	小片	内外面:ヨコナデ 底部:ヘラ切りのちナデ	良好	1mm以下の角閃石、石英・微量 赤色粒子	橙色	
	343	第57図	包含層3	包含3 一括59	土師器	坏	(2.2+α)		(7.0)	小片	内外面:ヨコナデ 底部:ヘラ切りのちナデ	良好	1mm以下の角閃石、石英・多量	橙色	
	344	第58図	包含層3	包含層3 一括4	土師器	椀	4.6	(14.8)	7.5	60%	内外面:回転ヨコナデ 底部:回転ヘラ切り	良好	斜長石・多量 1mm大の赤色レキ・中量	橙色	
	345	第58図	包含層3	包含層3 一括6	土師器	椀	–	–	–		内外面:回転ヨコナデ 底部:丁寧なナデ	良好	斜長石・多量 赤色微粒子・少量	淡橙白色	
	346	第58図	包含層3	包含層3 一括7	土師器	椀	–	–	8.3		内外面:回転ヨコナデ 底部:回転ヘラ切り後ヨコナデ	良好	角閃石・少量 斜長石・多量 白色顆粒粒・少量	橙色	
	347	第58図	包含層3	包含層3 一括99	土師器	皿	2.2	12.8	5.0	ほぼ完形	内外面:回転ヨコナデ 底部:回転ヘラ切り後ナデ	良好	斜長石・多量 赤色粒子・中量	淡黄褐色から黒灰色 (内)	
	348	第58図	包含層3	包含層3 一括5	土師器	皿	2.0	12.7	10.2	50%	内面:ナデ 外面:指圧痕在最多数	良好	雲母・多量 石英・中量	橙褐色	
	349	第58図	包含層3	包含3 一括98	土師器	鉢	7.7	(11.6)		3/4～4/5	内面:ナデ 外面:被熱により赤化？全体に剥落	甘い	1mm以下の石英・中量 角閃石・少量	赤褐～灰色	
	350	第58図	包含層3	包含層3 一括97	土師器	鉢	5.8	(12.8)	(8.0)	40%	内面:ナデ 外面底部:回転ヘラ切り後ナデ	良好	角閃石・斜長石・多量 石英・中量 顆粒粒・中量	黄褐色～暗灰色	全体的に雑な仕上げ。ひずみ大。
	351	第58図	包含層3	包含3 一括22	土師器	鉢	(4.9+α)	(14.8)		小片	口縁部:ヨコナデ 内面:ナデ 外面:ケズリのちナデ	良好	1mm以下の角閃石・多量	黒褐色	
	352	第58図	包含層3	包含3 一括160	土師器	鉢	(3.0+α)			小片	口縁部:ヨコナデ 内面:ナデ 外面:ハケ目のちナデ	良好	2mm以下の角閃石・多量 1mm以下の石英・多量	淡褐色	
	353	第58図	包含層3	包含3 一括14	黒色土器	椀	–	(17.2)	–	小片	内面:丁寧なヘラミガキ 外面:まばらなヘラミガキ	良好	斜長石・多量 角閃石・少量 赤色微粒子・中量	淡黄褐色	
	354	第58図	包含層3	包含層3 一括16	黒色土器	椀	5.4	14.9	7.1		内面:ヘラミガキ 外面:丁寧なナデ→回転ヘラケズリ 高台:ヨコナデ 外底面:丁寧なナデ	良好	斜長石・多量	淡黄褐色	
	355	第58図	包含層3	包含3 一括11	黒色土器	椀	(3.5+α)			小片	内面:ミガキ 外面:ナデ	良好	1mm以下の角閃石、石英・多量	内面:黒色 外面:橙色～黒色	
	356	第58図	包含層3	包含3 一括2	土製品	土錘	長さ 4.3	幅 1.25	重さ 5g	ほぼ完形	手づくね	良好	角閃石・多量 石英・少量	黄灰色	
	357	第58図	包含層3	包含3 一括3	土製品	土錘	長さ 5.8	幅 1.95	重さ 16g	ほぼ完形	手づくね	良好	良好 角閃石、石英・少量	淡褐色	
	358	第58図	包含層3	包含3 一括1	土製品	土錘	長さ 5.4	幅 1.45	重さ 8g	ほぼ完形	手づくね	良好	良好 角閃石、石英・少量	橙色	
	359	第58図	包含層3	包含3 一括144	土製品	輪の羽口	長さ (5.5+α)			小片					一部溶解
	360	第58図	包含層3	包含3 一括147	土製品	土錘？	厚さ (3.0)			ほぼ完形					ほぼ形の粘土の固まり スサ入り

遺物観察表 11

調査次数	遺物番号	図版番号	出土遺構	注記	種別	器種	法量(cm) 底高	口径	底径	残存	調整/文様	焼成	胎土	色調/給付釉薬	備考
1調査区	361	第59図	包含層	包層一括	須恵器	坏蓋	(1.9+α)		最大径(14.0)	小片	内面:ナデ 外面:上部回転ヘラケズリ/下部ナデ	良好	緻密	灰色	
	362	第59図	包含層	包層一括	須恵器	坏蓋	(2.4+α)		最大径(10.0)	小片	内外面:ナデ	良好	緻密	灰褐色	
	363	第59図	包含層	包層一括	須恵器	坏蓋	(1.5+α)			小片	内面:ナデ 外面:手持ち~ヘラ調整のちナデ	良好	緻密	灰色	
	364	第59図	包含層	包層一括	須恵器	壺	(3.0+α)		(8.0)	小片	内面:風化により全体的に剥落/外面:ナデ 高台部:ヨコナデ 底部:ヘラ切り	良好	1mm以下の石英・中量 レキ・僅か 黒曜石・1点	内面:灰褐色 外面:灰色	
	365	第59図	包含層	包層一括	須恵器	壺	(2.8+α)		(10.5)	小片	内外面:ナデ 底部:ヘラ切りのちナデ	良好	緻密	灰色	
	366	第59図	包含層	包層一括	須恵器	坏身	4.2	(13.8)	(8.6)	小片	内外面:ナデ 底部:回転ヘラ切り離し	良好	緻密	白灰色	
	367	第59図	包含層	包層一括	須恵器	壺	(7.0+α)	(8.8)		小片	内外面:ナデ	良好	緻密	灰色	
	368	第59図	包含層	包層一括	須恵器	甕			最大径(8.8)	小片	内外面:ナデ 底部:不定方向にナデ	良好	緻密	灰色	
	369	第59図	包含層	包層一括	須恵器	甕	(4.2+α)			小片	内外面:ナデ	良好	緻密	内面:淡灰~灰褐色 外面:灰色	日然釉かかる 口縁下端に粘付あり
	370	第59図	包含層	包層一括	須恵器	甕	(4.2+α)			小片	内外面:ナデ	良好 (赤焼け)	緻密 石英・少量	橙色	
	371	第59図	包含層	包層一括	須恵器	壺	(2.8+α)			小片	内面:ナデ	良好	緻密	灰色 (内面に緑色の釉)	
	372	第59図	包含層	包層一括	須恵器	甕	(11.2+α)			小片	内面:ナデ/指頭圧痕・青海波タタキ当て同義あり 外面:ナデ	良好	緻密 石英・多量	赤褐色	
	373	第59図	包含層	包層一括	須恵器	甕				小片	内面:青海波タタキ当て同義 外面:縦い格子目タタキ痕	良好	緻密	黄褐色	
	374	第59図	包含層	包層一括	磁器 (青磁)	碗	(2.3+α)			小片	内外面とも無文	良好		淡緑色	越州窯
	375	第59図	包含層	包層一括	磁器 (青磁)	碗	(2.4+α)			小片	内外面とも無文	良好		淡緑色	越州窯
	376	第59図	包含層	包層一括	磁器 (青磁)	碗				小片	内外面とも無文	良好		淡緑色	越州窯
	377	第59図	包含層	包層一括	磁器 (青磁)	碗	(2.2+α)		(10.4)	小片	見込み に重ね焼きの痕 畳付きに荒起?	良好		にぶい緑色	越州窯
	378	第59図	包含層	包層一括	磁器 (青磁)	碗	(1.3+α)		(5.5)	小片		良好		淡緑色 全体に粕かかる	越州窯
	379	第59図	包含層	包層一括	磁器 (白磁)	碗	(2.9+α)			小片	内外面とも無文	良好		白灰色	□縁部が玉縁状
	380	第59図	包含層	包層一括	土師器	坏	3.6	(11.8)	(6.0)	小片	内外面:ナデ 底部:回転ヘラ切り	良好	1mm以下の石英・多量 角閃石・中量	橙色	
	381	第59図	包含層	包層一括	土師器	坏	4.7	(13.0)	1/3~1/4	小片	内外面:ナデ 底部:回転ヘラ切りのちナデ	良好	1mm以下の角閃石・中量 石英・少量少量 赤色粒子・微量	橙色	
	382	第59図	包含層	包層一括	土師器	坏	3.3	(11.8)	(6.4)	小片	内面:ナデ 外面:ヘラ調整のちナデ 底部:回転ヘラ切りのちナデ	良好	1mm以下の赤色粒子・多量 石英・少量 角閃石・微量	淡褐色	
	383	第59図	包含層	包層一括	土師器	坏	3.6	(12.8)	(6.8)	小片	内面:ナデ 外面:ヘラ調整のちナデ 底部:回転ヘラ切り	良好	1mm以下の石英・中量 角閃石・少量	橙色	
	384	第59図	包含層	包層一括	土師器	坏	(2.7+α)		1/2~1/3	小片	内面:ナデ/見込みに渦文状 外面:ヘラ調整 底部:回転ヘラ切りのちナデ	良好	1mm以下の石英・少量 角閃石・微量	橙色	
	385	第59図	包含層	包層一括	土師器	坏	(3.1+α)		1/2~1/3	小片	内面:ナデ 外面:ヘラ調整のちナデ 底部:回転ヘラ切り	良好	1mm以下の角閃石・石英・少量	橙色	
	386	第59図	包含層	包層一括	土師器	坏	(1.7+α)		1/3	小片	内面:ナデ 底部:ヘラ切りのちナデ	良好	1mm以下の角閃石・石英・中量	内面:黄褐色 外面:橙色	
	387	第59図	包含層	包層一括	土師器	坏	(1.3+α)		(6.8)	底部のみ	内外面:ナデ 底部:ヘラ切りのちナデ	良好	1mm以下の角閃石・石英・赤色粒子・微量	橙色	
	388	第59図	包含層	包層一括	土師器	坏	(1.1+α)			底部のみ	内外面:ナデ 底部:ヘラ切りのちナデ	良好	1mm以下の角閃石・石英・少量	橙色	
	389	第59図	包含層	包層一括	土師器	甕	(4.2+α)		(6.8)	小片	内面:底部:ナデ 外面:ヘラ調整 高台部:ヨコナデ	良好	1mm以下の石英・多量 角閃石・微量	橙色	
	390	第59図	包含層	包層一括	土師器	甕	(2.3+α)		(7.0)	小片	内外面:ナデ 高台部:ヨコナデ 底部:ヘラ切り	良好	1mm以下の角閃石・多量 石英・中量	橙~灰褐色	
	391	第59図	包含層	包層一括	土師器	甕				小片	内外面:ナデ 見込み:渦文状 底部:ヘラ切のちナデ	良好	1mm以下の石英・中量 角閃石・少量	黄橙色	
	392	第59図	包含層	包層一括	土師器	甕	(2.3+α)		(7.6)	1/2~1/3	内面:ナデ/外面:ヘラケズリ 高台部:ヨコナデ 底部:回転ヘラ切り	良好	1mm以下の角閃石・中量 石英、赤色粒子・少量	内面:淡橙色 外面:橙色	
	393	第59図	包含層	包層一括	土師器	甕	(2.2+α)		(7.7)	1/4	外面:ヘラ調整 高台内面:ヨコナデ 底部:回転ヘラ切り	良好	1mm以下の石英・少量 角閃石・微量	赤橙色	
	394	第59図	包含層	包層一括	土師器	甕	(1.7+α)		(7.0)	1/4~1/5	内面:ナデ 外面:ヨコナデ 底部:回転ヘラ切り	良好	1mm以下の角閃石、石英・微量	内面:橙色 外面:淡橙色	
	395	第59図	包含層	包層一括	土師器	甕	(4.0+α)		(8.0)	1/6~1/5	内面:ナデ/外面:ナデ調整 高台部:ヨコナデ 底部:回転ヘラ切り	良好	1mm以下の石英・多量 角閃石・中量 赤色粒子・少量	橙色	内外面にベンガラ塗布か?
	396	第59図	包含層	包層一括	土師器	皿	1.3			小片	内面:ナデ 外面:上部ナデ/下部ヘラ調整 底部:回転ヘラ切りのちナデ	良好	1mm以下の角閃石、石英・少量	橙色	

遺物観察表 12

調査次数	遺物番号	図版番号	出土遺構	注記	種別	器種	法量 (cm) 器高	口径	底径	残存	調整/文様	焼成	胎土	色調/釉付着剤	備考
1調査区	397	第59図	包含層	包層一括	土師器	鉢	5.1	(11.6)	(5.5)	1/4	□縦部:ヨコナデ 内面:ナデ/外面:上部ナデ/下部ヘラ調整? 底部:回転ヘラけずりのちナデ	やや不良	1mm以下の石英・多量 角閃石・少量	黒一橙色	
	398	第59図	包含層	包層一括	不明(土師?)	長さ(6.5+α)					小片	外面:ヘラケズリ	良好	2mm以下の石英・多量 1mm以下の角閃石・多量	褐色	断面六角形で、中空となる
	399	第60図	包含層	包層一括	土師器	壺	(3.0+α)				小片	内面:板状の道具で強くなでる 外面:粗いナデ? 底部:ナデ	良好	1mm以下の角閃石、石英・多量	橙一灰褐色	
	400	第60図	包含層	包層一括	土師器	甕	(5.7+α)	(11.8)			小片	□縦部:ヨコナデ 内面:ナデ/指頭圧痕あり 外面:ケズリのちナデ	良好	1mm以下の角閃石、石英・少量	灰褐色	
	401	第60図	包含層	包層一括	土師器	甕	(6.6+α)				小片	□縦部:ヨコナデ 内面:ナデ 外面:ケズリのちナデ?	良好	1mm以下の角閃石、石英・多量	淡褐色	
	402	第60図	包含層	包層一括	土師器	甕					小片	内面:タタキ目痕 外面:ナデ/ハケ目	良好	2mm以下の石英母・多量 石英、赤色粒子	淡褐色	
	403	第60図	包含層	包層一括	黒色土器	椀	5.1	(12.6)	(7.3)	1/3	内面:ミガキ 外面:ナデ 高台部:ヨコナデ	良好	1mm以下の角閃石・少量 石英・微量	内面:黒色 外面:淡褐色	
	404	第60図	包含層	包層一括	黒色土器	椀	(4.9+α)	(5.4)			小片	内面:ミガキ 外面:ヨコナデ-ヘラ調整-ヘラケズリ	良好	1mm以下の角閃石、石英・微量	内面:黒色 外面:淡褐色	
	405	第60図	包含層	包層一括	黒色土器	皿?	(3.1+α)		(8.4)	小片	内面:ミガキ 外面:上部ヘラ調整/下部ヘラケズリ 高台部:ヨコナデ/底部:ヘラけずりのちナデ	良好	1mm以下の角閃石、石英・微量	内面:黒色 外面:淡褐色～淡橙色	
	406	第60図	包含層	包層一括	土製品	土錘	長さ 4.0	幅 1.45	重さ 6 g	ほぼ完形	手づくね	良好	良好 1mm以下の角閃石・少量 石英・微量	淡褐色	
	407	第60図	包含層	包層一括	土製品	土錘	長さ 4.75	幅 1.6	重さ 9 g	ほぼ完形	手づくね	良好	良好 赤色粒子・少量	淡褐色	
	408	第60図	包含層	包層一括	土製品	土錘	長さ 4.8	幅 1.05	重さ 5 g	ほぼ完形	手づくね	良好	良好	橙色	
	409	第60図	包含層	包層一括	土製品	土錘	長さ 5.1	幅 1.5	重さ 14 g	完形品	手づくね	良好	良好	橙色	
	410	第60図	包含層	包層一括	土製品	土錘	長さ 4.9	幅 1.55	重さ 8 g	ほぼ完形	手づくね	良好	良好	白褐色	
	411	第60図	包含層	包層一括	土製品	土錘	長さ 4.5	幅 1.7	重さ 9 g	ほぼ完形	手づくね	良好	良好	白褐色	
	412	第60図	包含層	包層一括	古代瓦	丸瓦					小片	上面:ナデ 下面:布目痕	良好		橙一淡褐色	
	413	第60図	包含層	包層一括	古代瓦	丸瓦					小片	上面:ナデ 下面:布目痕	良好		黄褐色	
	414	第60図	包含層	包層一括	古代瓦	平瓦					小片	上面:布目痕 下面:縄目タタキ	良好	1mm以下の角閃石・微量	黄褐色	
	415	第60図	包含層	包層一括	鉄製品	鏃										
	416	第60図	包含層	包層一括	鉄滓	鍛冶滓									椀形滓	
	417	第60図	包含層	包層一括	鉄滓	精錬滓									木炭の痕が見られる	
	418	第60図	包含層	包層一括	鉄滓	精錬滓										
	419	第60図	包含層	包層一括	石製品	砥石	幅 8.8				小片		－	－	赤灰色	硬質凝灰岩
	420	第61図	試掘時出土	シクツ	須恵器	坏身	2.1	10.8	6.8	1/5	内外面:回転利用ナデ 底部:ケズリ後雑なナデ	堅緻	白色微粒子・多量	灰褐色	
	421	第61図	試掘時出土	シクツ	須恵器	坏	2.6	10.0	6.4	1/2	内面:回転利用ナデ-ヘラ記号あり 外面:回転利用ナデ 底部:ヘラケズリ	堅緻	角閃石・中量 斜長石・少量 白色微粒子・少量	淡灰褐色	
	422	第61図	試掘時出土	シクツ	須恵器	皿	1.85	(17.3)	(14.0)	1/6	内外面:回転利用ナデ 底部:ヘラけり後ヨコナデ	堅緻	斜長石・多量 白色微粒子・多量 角閃石・中量	淡褐灰色	
	423	第61図	試掘時出土	シクツ	須恵器	高坏	－	－	10.8	脚部1/2	坏内面:回転ナデ後いろいろな方向にナデ 脚部:回転ヨコナデ	堅緻	角閃石・中量 斜長石・少量	灰白色	
	424	第61図	試掘時出土	試掘	磁器(青磁)	椀	(2.3+α)				小片		良好		灰緑色	越州窯
	425	第61図	試掘時出土	試掘	磁器(青磁)	椀	(3.0+α)				小片		良好		灰緑色	越州窯
	426	第61図	表土	表一括 1221	磁器(青磁)	椀	(2.5+α)		(5.2)		小片	見込みに花菱り模様あり	良好		淡緑色 高台内部は無釉	龍泉窯
	427	第61図	試掘時出土	6トレ一括6	磁器(青磁)	椀	(2.1+α)				小片	見込みに片彫りあり	良好		灰緑色	龍泉窯
	428	第61図	試掘時出土	試掘	陶器(緑釉)	皿	(1.5+α)		(7.8)		小片	見込みに植物が描かれる	良好		明緑色	
	429	第61図	表土	表探一括	陶器(緑釉)	皿	(2.3+α)		7.2		小片	ナデ?	良好	1mm大の赤色粒子、0.5mm大の白色粒子・少量	高台部:釉なし 内外面:緑釉が風化により剥落	
	430	第61図	表土	表土一括	陶器(緑釉)	皿	(2.1+α)				小片		良好		明黄灰色	
	431	第61図	試掘時出土	シクツ	土師器	坏	3.65	13.1	8.0	1/3	内面:輪積みの後明瞭 外面:回転利用ナデ 底部:ヘラけり雑し	やや不良	斜長石・多量 角閃石・中量 石英・中量	内面:黄白褐色 外面:淡赤褐色	
	432	第61図	試掘時出土	シクツ	土師器	坏	3.7	12.5	6.0	2/3	内外面:回転ナデ(摩滅のため調整不明瞭) 底部:ヘラけり後ナデ(調整不明瞭)	やや不良	角閃石・多量 斜長石・多量	淡黄褐色	
	433	第61図	試掘時出土	シクツ	土師器	坏	4.0	13.0	5.6	2/3	内外面:回転ナデ 底部:ヘラけり後横ナデ、一部板目あり	良好	斜長石・中量 角閃石・中量 赤色微粒子	淡黄褐色	

遺物観察表 13

調査次数	遺物番号	図版番号	出土地点	注記	種別	器種	法量 (cm) 器高	口径	底径	残存	調整/文様	焼成	胎土	色調/釉付着薬	備考
1調査区	434	第61図	試掘抗出土	シクツ	土師器	坏	3.45	12.9	6.0	1/2	内外面:回転ナデ 底部:ヘラ切り後ナデ	良好	角閃石・多量 斜長石・多量	淡黄褐色	
	435	第61図	試掘抗出土	シクツ	土師器	坏	3.8	14.2	6.2	2/3	内外面:回転利用ナデ 底部:ヘラ切り後いろいろな方向にナデ,調整時にヘラの跡がついている	良好	斜長石・多量 角閃石・中量 赤色微粒子・少量	淡赤褐色	
	436	第61図	試掘抗出土	シクツ	土師器	坏	3.65	13.0	7.0	1/2	内外面:回転利用ナデ 底部:ヘラケズリ後ヨコナデ	良好	角閃石・多量 斜長石・中量	淡黄色	
	437	第61図	試掘抗出土	シクツ	土師器	坏	3.7	12.6	7.4	2/3	内外面:回転利用ナデ 底部:ヘラケズリ後丁寧なヨコナデ	良好	角閃石・中量 斜長石・多量	内面:淡赤褐色 外面:淡黄褐色	
	438	第61図	試掘抗出土	シクツ	土師器	坏	3.3	12.8	6.0	1/2	内外面:回転利用ナデ 底部:ヘラケズリ後ヨコナデ	やや不良	角閃石・多量 斜長石・多量 石英・中量	淡赤褐色	
	439	第61図	試掘抗出土	シクツ	土師器	坏	3.5	13.0	5.6	1/3	内外面:回転ナデ 底部:ヘラケズリ後ナデ	良好	角閃石・中量 斜長石・多量 白色微粒子・中量	淡赤褐色	
	440	第61図	不明	不明	土師器	坏	3.9	(12.4)	(7.8)		内外面:回転ヨコナデ 底部:ヘラケズリ後ナデ	良好	斜長石・多量　石英・少量 赤色微粒子・少量	橙色	
	441	第62図	試掘抗出土	シクツ	土師器	甕	5.7	14.8	7.3		内外面:回転利用ナデ 底部:ヨコナデ	良好	角閃石・中量 斜長石・中量 2mm大のレキ混入	淡黄褐色	
	442	第62図	試掘抗出土	シクツ	土師器	甕	–	–	6.6		内面:回転ナデ後雑なナデ 外面:ヨコカキケズリ~ヨコナデ 底部:ヘラ切り後雑なナデ	良好	角閃石・中量 斜長石・多量 石英・中量		
	443	第62図	試掘抗出土	シクツ	土師器	皿	1.4	13.6	8.7	1/2	内外面:回転利用ナデ 底部:ヘラ切り後ヨコナデ	良好	角閃石・中量 斜長石・多量 赤色微粒子・少量	淡黄褐色	
	444	第62図	試掘抗出土	シクツ	土師器	皿	1.85	12.8	8.2	1/5	内外面:回転ヨコナデ 底部:ヨコナデ	良好	角閃石・中量 斜長石・多量 石英・中量	淡赤褐色	
	445	第62図	試掘抗出土	シクツ	土師器	皿	2.0	13.4	8.0	1/6	内外面:回転利用ナデ 底部:ヘラケズリ後ナデ	良好	角閃石・中量 斜長石・多量	淡赤褐色	
	446	第62図	表土	表土一括	土師器	不明(把手)					把手部分のみ:把手内面:ナデ	本体内面:ハケ目 外面:ヘラ磨	良好	1mm以下の角閃石・少量 石英・微量	淡橙色	上からの埋孔あり
	447	第62図	試掘抗出土	シクツ	黒色土器	椀	5.3	12.2	6.4		内面:全面2mm幅のヘラミガキ 外面:ヨコナデ~ヨコ方向ケズリ~ヨコナデ 底部:ナデ		良好	角閃石・中量 斜長石・多量	内面:黒色 外面:淡黄褐色	
	448	第62図	試掘抗出土	シクツ	黒色土器	椀	4.8~5.2	11.9	6.7	3/4	内面:ヨコ方向ヘラミガキ 外面:回転ヨコナデ~ヨコナデ 底部:ヨコナデ		良好	角閃石・中量 斜長石・多量	内面:黒色 外面淡赤褐色	
	449	第62図	試掘抗出土	シクツ	黒色土器	椀	–	–	8.8		内面:全面1mm幅のヘラミガキ 外面:回転ナデ~ヨコナデ 底部:ナデ		やや不良	角閃石・中量 斜長石・多量	内面:黒色 外面:淡黄褐色	
	450	第62図	表土	表土一括	古代瓦	平瓦					小片	上面:布目痕一部ナデ消し 下面:格子タタキ目	良好		灰色	
	451	第62図	試掘抗出土	2トレ包含一括193	古代瓦	平瓦	幅(7.0+α)	厚さ2.2			小片	上面:布目痕 下面:格子状のタタキ痕	良好	赤色粒子・多量 角閃石、石英・少量	淡橙色	
	452	第62図	試掘抗出土	2トレ一括198	古代瓦	平瓦	幅(6.2+α)	厚さ2.9			小片	上面:布目痕、接痕最外	良好	赤色粒子・多量 角閃石・少量	淡橙色	
	453	第62図	試掘抗出土	シクツ	古代瓦	瓦					小片	内面:布目 外面:約2.5cm幅の板で縦方向にケズリ後ヨコナデ	良好	斜長石・多量 石英・多量 角閃石・少量	淡赤褐色	内面にひきひち痕あり
	454	第62図	試掘抗出土	シクツ	近世瓦	軒平瓦					小片		良好		灰色	
2調査区	455	第67図	SH2	SH2.P1	須恵器	坏	(1.1+α)	(8.0)			小片	内面:ナデ 外面:ナデ-ヘラケズリ	良好	白色粒子・中量	内外面:暗灰色	
	456	第67図	SH2	SH2.P2	土師器	鍋	(3.9+α)				小片		やや不良	0.1mm~白色粒子、長石・多量　石英・少量 0.1~0.2mmレキ・多量		
	457	第67図	SH2	SH2.P1	古代瓦	軒平瓦	4.0				小片		やや不良	0.1mm大の赤色粒子・多量　白色粒子・少量		相原美寺の瓦(重圏文)
	458	第67図	SH2	SH2.P1	古代瓦	丸瓦	(3.8+α)				小片	内面:布目痕	良好	石英・多量 黒色粒子・少量		最石に使ったか? 焼ひれ痕あり (表面一部)
	459	第67図	SH2	SH2.P1	瓦質土器	鍋	(4.0+α)				小片	内面:ハケ目 外面:ナデ	良好	石英、長石・少量	内外面:黄褐色、炭付着	
	460	第67図	SH2	SH2.P1	瓦質土器	鍋	(4.3+α)				小片	□縁部:ヨコナデ 内面:ナデ 外面:ヘラケズリ	良好	角閃石、石英、白色粒子、少量	内面:黄褐色 外面:黄褐色、炭付着	
	461	第67図	SH2	SH2.P1	瓦質土器	鍋	(4.6+α)	(22.8)			小片	内面:ナデ	良好	白色粒子、石英、角閃石・少量	外面:白橙色、炭付着 内面:白橙色	
	462	第67図	SH2	SH2.P2	瓦質土器	鉢	(4.5+α)				小片		良好	白色粒子、石英・少量		□縁部側面部黒色あり
	463	第67図	SH2	SH2.P2	瓦質土器	火鉢?	(4.4+α)				小片	内面:ハケ目 外面:布目痕~ヘラケズリ	良好	赤色粒子・少量	内外面:暗灰色	
	464	第67図	SH2	SH2~一括	石製品	砥石	タテ(6.1+α)	ヨコ 高さ7.5 1.8	重さ132g							赤間石?
	465	第67図	SH2	SH2~一括	鉄滓		タテ4.7	ヨコ4.8	重さ46g							
	466	第70図	SD1	ミゾ	須恵器	高坏	(2.3+α)				小片		良好	赤色粒子、白色粒子、角閃石、石英・少量		
	467	第70図	SD1	ミゾ	陶器		(2.0+α)				小片	内面に灰釉、外面に茶色の釉がかかる	良好	2mm大の黒色粒子・微量		
	468	第70図	SD1	ミゾ	黒色土器	椀	(2.1+α)				小片	内面:三ガキ 外面:ナデ	良好	赤色粒子、石英・多量 角閃石・少量		
	469	第70図	SD1	ミゾ	土師器	鍋	(4.8+α)				小片	□縁部:回転ヨコナデ 内外面:ヘラケズリ	良好	石英・多量　赤色粒子、白色粒子、角閃石・少量		反転復元 粘土紐痕あり

遺物観察表 14

調査次数	遺物番号	図版番号	出土遺構	注記	種別	器種	法量 (cm) 器高	口径	底径	残存	調整/文様	焼成	胎土	色調/釉付着剤	備考
2次調査	470	第70図	SD1	ミゾ	古代瓦	丸瓦	1.0	ダテ (5.3)	ヨコ (5.7)	小片	外面:タタキ?、内面に布目痕あり	良好	0.5～1.0㎜大の赤色粒子・少量 0.5㎜大の白色粒子・黒色粒子・少量	淡橙色	
	471	第71図		一括	須恵器	甕	(6.4+α)			小片	内面:当て具痕? 外面:格子状タタキ	良好	精緻	灰色	
	472	第71図	試掘時出土	3トレ 第土一括	土師器	皿	1.0	(8.0)	(5.6)	小片	内外面:ナデ 底部:糸切り痕	良好	0.5㎜大の赤色粒子、角閃石、雲母・微量	淡茶白色	反転復元
	473	第71図	試掘時出土	8トレ	土師器	鉢	(3.1+α)			小片	内外面:ナデ 外面:横方向にヘラケズリ	良好	0.5㎜大の石英、白色粒子、黒色粒子・少量	淡橙色	
	474	第71図	試掘時出土	8トレ	陶器	皿	(1.7+α)		4.8	小片	内面:ナデ? 外面:ヘラケズリ・ナデ	良好	0.5㎜大の白色粒子・少量		内面に胎土目痕
	475	第71図		一括	磁器	碗	(2.3+α)		4.2	小片		良好		内面:透明釉 外面:透明釉・染付(植物文?)	高台脇部に二重圏線、高台中央に紋あり
	476	第71図		一括	土師器	土錘	長さ (3.8+α)	最大胴 1.0		90%		良好	0.5㎜大の黒色粒子、白色粒子・少量	淡橙色	
	477	第71図	試掘時出土	8トレ	古代瓦	丸瓦	ダテ 9.8	ヨコ 9.6		小片	凹面に布目痕	良好	0.5㎜大の赤色粒子、白色粒子・少量	淡茶橙色	
	478	第71図		一括	古代瓦	丸瓦	ダテ (6.6+α)	ヨコ (6.6+α)		小片	内面:布目痕	良好	0.5㎜大の赤色粒子、白色粒子・少量	淡茶灰色	
	479	第71図	試掘時出土	8トレ	石製品	石鏃	ダテ 2.3	ヨコ 2.0	重さ 1g						脚部先端欠損・姫島産黑曜石

P65 第４表参考文献

① 中津市教育委員会　2001 『長者屋敷遺跡』
中津市教育委員会　2015 『長者屋敷官衙遺跡４～ 11次調査』
② 本書
③ 中津市教育委員会　2006 『定留遺跡　八反ガソウ地区発掘調査報告書』
④ 中津市教育委員会　2018 『定留遺跡　赤松地区発掘調査報告書』
⑤ 中津市教育委員会　2005 『定留遺跡田畑地区』
⑥～⑨ 中津市教育委員会　2016 『諸田遺跡・諸田南遺跡発掘調査報告書（遺物編）』
中津市教育委員会　2018 『諸田遺跡・諸田南遺跡発掘調査報告書（遺構編）』
⑩ 中津市教育委員会　2017 『法垣遺跡３次・４次調査－遺構・遺物（土器・鉄製品）写真図版、観察表編－』
中津市教育委員会　2018 『法垣遺跡３次・４次調査－本文、遺構・遺物図版、石製品写真図版・観察表編－』
⑪ 大分県教育庁埋蔵文化財センター　2007 『北小枇杷遺跡・野田遺跡』
⑫ 中津市教育委員会　2015 『市場遺跡１～４次調査』
⑬ 大分県教育庁埋蔵文化財センター　2016 『諫山遺跡』
⑭ 宮内克己・村上久和　1988 「豊前南部および豊後出土の縁釉陶器」『古文化談叢　第20集』(九州古文化研究会)
⑮ 大分県教育庁埋蔵文化財センター　2015 『嶋ノ町遺跡１次、２次　香葉座遺跡　灰床遺跡　池ノ下・能元遺跡　今成近世墓　虚空蔵寺遺跡』
⑯ 大分県教育庁埋蔵文化財センター　2008 『諸田南遺跡D地区　田代遺跡　上畑成遺跡　馬下遺跡』
⑰ 中津市教育委員会　2010 『大勢遺跡』
⑱ 中津市教育委員会　2023 『相原山首遺跡』
⑲ 大分県教育委員会　1989 『上ノ原横穴墓群Ⅰ』
大分県教育委員会　1991 『上ノ原横穴墓群Ⅱ』
⑳ 中津市教育委員会　2011 『坂手隈城跡』
㉑ 大分県教育委員会　1992 『一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書（１）勘助野地遺跡　六畝町遺跡　大池南遺跡　清水郎原西遺跡　黒水遺跡　大坪遺跡　権現島遺跡』
㉒ 三光村教育委員会　1994 『森山遺跡』

写　真　図　版

1 次調査区全景

1 次調査区西側

写真図版 2

1 次調査区最西端部

1 次調査区東側

1 次調査区全景（東から）

1 次調査区西側SB2周辺

写真図版 4

1 次SB3周辺

1 次調査区中央部SD3、SD4周辺

1 次調査区東側SB7、SB8周辺

1 次SH5周辺

写真図版 6

1 次調査区東側

1 次調査区西側（西から）

1 次調査区東側（西から）

1 次SH1完掘状態

1 次SH1竈の状況

右から 1 次SH2、SH3、SH4

写真図版 8

1 次SH3（左）とSH4

1 次SH3完掘状態

1 次SH4完掘状態

1 次SH5遺物出土状況

1 次SH5完掘状態

1 次SH5竈の状況

1 次SH6完掘状態

1 次SH7完掘状態

1 次SB4、5

1 次SH8完掘状態

1 次SK1遺物出土状況(1)

1 次SK1遺物出土状況(2)

1 次SK1完掘状態

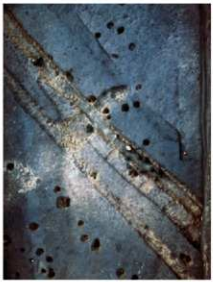
1 次SK2遺物出土状況

1 次SK3遺物出土状況(1)

1 次SK3遺物出土状況(2)

1 次SD1、SD2完掘状態

1 次SK5遺物出土状況



1 次SD3、SD4完掘状態

1 次包含層 3 の遺物出土状況

1 次包含層遺物出土状況

2 次調査区北側（北から）

2 次調査区南側（南から）

2 次SH1完掘状態

2 次SH2完掘状態

2 次SB1完掘状態

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38

1 次調査出土遺物(1)

39
40
41
44
42
43
45
48
46
47
49
50
53
51
52
54
55
56
58
57
59
60
61
62
63
65
64
66
67
68

1 次調査出土遺物(2)

69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105

1 次調査出土遺物(3)

106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
132
133
134
135
136
137
138
139
140

1 次調査出土遺物(4)

141
143
144
145
146
147
142
150
151
152
153
148
154
155
157
160
156
159
158
161
162
163
164
165
166
168
167
170
169
171
173
172
176
178
174
175

1 次調査出土遺物(5)

179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203

1 次調査出土遺物(6)

205
206
207
204
209
210
208
211
212
213
215
216
217
218
220
214
219
221
222
224
226
223
225
227
230
228
229
231
232

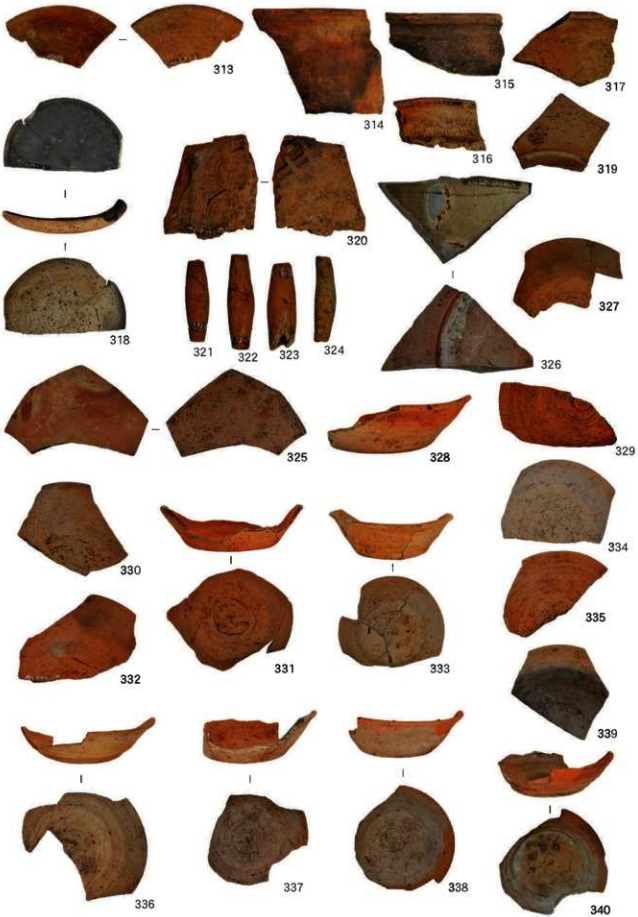
1 次調査出土遺物(7)

233
234
235
236
237
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
260
261
262
263
264
265
266
268
267
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278

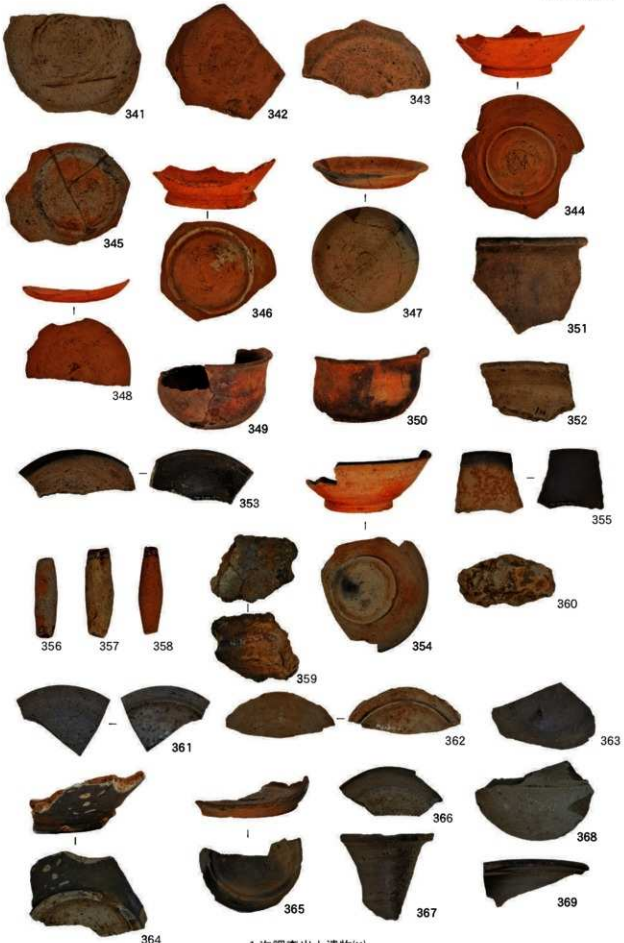
1 次調査出土遺物(8)

279
280
281
282
283
284
285
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312

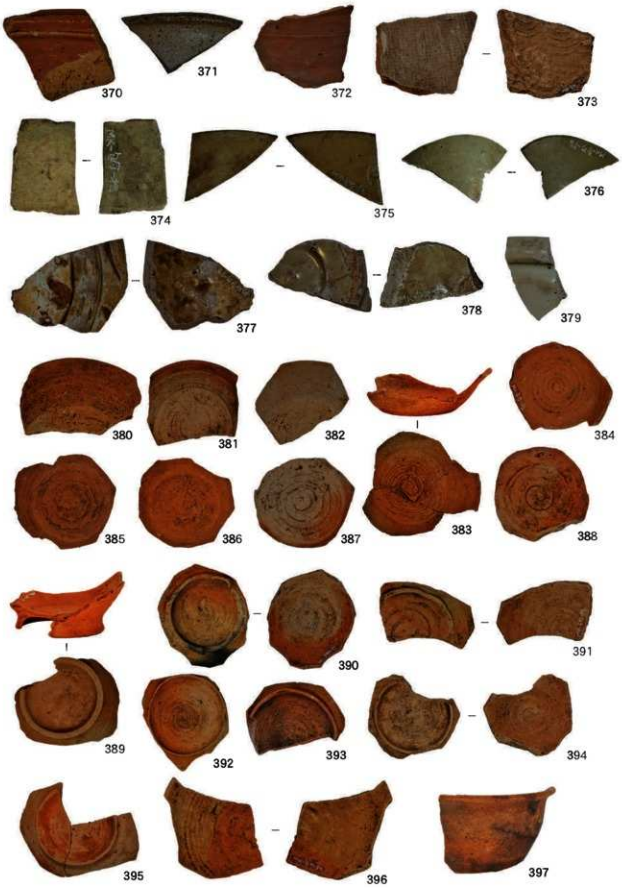
1 次調査出土遺物(9)


313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340

1 次調査出土遺物(10)


341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369

1 次調査出土遺物(11)


370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
384
385
386
387
383
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397

1 次調査出土遺物(12)

398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426

1 次調査出土遺物(13)

427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453

1 次調査出土遺物(14)

455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479

2 次調査出土遺物

報 告 書 抄 録

書　　名	三口遺跡（ミクチイセキ）１次（ジ）・２次（ジ）調査（チョウサ）
副 書 名	市道相原上ノ原線及び農道鶴居53号線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	中津市文化財調査報告
シリーズ番号	第121集
編 集 者 名	小柳和宏
編 集 機 関	中津市教育委員会
所　在　地	〒871-8501　大分県中津市豊田町14番地３　Tel：0979-22-1111
発行年月日	2024年３月31日

所収遺跡名	所　在　地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	面　積	調査原因
三口遺跡（１次）（ミクチイセキ　ジ）	大分県中津市大字相原字郷ノ木ほか（オオイタケンナカツシオオアザアイハラアザゴウノキ）	44203	203041	33°34′04″	131°11′19″	1993/7/19～1993/10/28	1,557㎡	市道建設
三口遺跡（２次）（ミクチイセキ　ジ）	大分県中津市大字相原字前田（オオイタケンナカツシオオアザアイハラアザマエダ）			33°34′07″	131°11′28″	1998/1/7～1998/3/30	212㎡	農道建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三口遺跡（１次）（ミクチイセキ　ジ）	集落	古墳・古代	竪穴建物、掘立柱建物、土坑	須恵器、土師器、緑釉、越州窯青磁	
三口遺跡（２次）（ミクチイセキ　ジ）	集落	古墳・古代・中世	竪穴建物、掘立柱建物、溝	須恵器、土師器、古代瓦	

要　　約	１次調査区では、６世紀末から７世紀の竪穴建物群と、９世紀から10世紀前半の掘立柱建物群が検出された。特に後者には緑釉陶器や越州窯青磁を伴うなど、蔵を持つ地域の有力者層の屋敷の可能性が考えられる。 ２次調査区では、７世紀後半から８世紀前半の竪穴建物と時期不明の掘立柱建物が確認されている。

三口遺跡１次・２次調査

市道相原上ノ原線及び農道鶴居53号線建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

中津市文化財調査報告　第121集

令和６年３月31日

発行　中津市教育委員会
印刷　㈱川原田印刷社